

朝鮮部落調査特別報告

第一册

朝鮮總督府

朝鮮部落調査特別報告

第一冊 (民家)



本府は大正十一年九月より十月に亘り今和次郎氏をして朝鮮民家の調査に従はしめしが、その報告茲に成れるを以て、今回庶務部調査課に於て之を印刷に附し、頒布する事とせり。

大正十三年三月二十日

朝鮮總督府

序言

私は大正十一年の九月から十月の間に一月間朝鮮各地を旅行して朝鮮の人達の民家を研究する機会を與へられた。

旅行に就いては、齋藤總督、守屋庶務部長、其他岩井建築課長及矢澤社會課長の好意を受けたのに對して感謝と敬意を表したく、また總督府囑託小田内通敏氏、同屬吉田正廣氏より色々御教示にあづかりたるを感謝したい。

大正十三年三月

今 和 次 郎

目次

緒言	一
第一章 構造及それに就いての考察	八
第一節 一般構造	八
第二節 地方的觀察	一六
第三節 溫突	二六
第二章 間取及それに就いての考察	三六
第一節 一般型と北部型	三六
第二節 開城邑内の民家	四九
第三節 日本の民家との交渉	五五
第三章 内地人と交渉を持てる民家	六六
第一節 朝鮮の人達の改良民家	六六
第二節 農業移民者の住家	七三
結言	七六

圖版目次

- 第一 村落概景（京畿道廣州郡分院）、市街概景（開城）
- 第二 開城雲溪川沿岸の景、開城の丘陵に建てられたる民家
- 第三 場末の民家（開城）、民家の中庭（開城）
- 第四 藁屋根の民家（金泉）、京城の民家、同
- 第五 田舎の商店及扉（京畿道廣州郡分院）
- 第六 外壁の腰積工作の状況（京城）、壁眞の構造
- 第七 民家構築模型圖
- 第八 丸太造の民家外観及内部（咸鏡南道長津郡）
- 第九 丸太造の民家（咸鏡南道豊川郡）同（咸鏡南道長津郡）、同（同）
- 第二〇 金泉邑内場末、金泉邑内概景、構築中の泥の家（金泉）
- 第二一 邑内の中樞區及場末の模型圖（金泉）、泥の家（同）、泥の家の平面圖（金泉邑内煙管職）
- 第二二 泥の家の外観（金泉）
- 第二三 温突の煙出し
- 第二四 一般型（中鮮型）民家の間取圖
- 第二五 一般型（中鮮型）民家の見取圖

- 第二六 京城上流の邸宅、地方兩班の邸宅（慶尙北道安東郡）
- 第二七 中流住宅の大門（平壤）、上流邸宅の中門（開城）
- 第二八 中流住宅の舍廊内部（平壤）
- 第二九 中流住宅内房内の箆筒（開城）、中流住宅の大廳（京城）
- 第三〇 中流住宅の臺所（開城）
- 第三一 飲食店の戸棚と器具（咸興）、民家の醬甕埕（咸興）
- 第三二 咸鏡南道北青の中流住宅——外觀——平面
- 第三三 咸鏡南道咸興郡の民家平面圖、咸興の民家の外觀
- 第三四 開城の民家の入口、開城の路次概景
- 第三五 開城邑内の民家平面圖
- 第三六 開城邑内の民家平面圖
- 第三七 開城の民家の越房、開城の民家の入口
- 第三八 開城の路次にある井戸、開城邑内の餅屋の店
- 第三九 咸興（洪聖淵氏）の新住宅——平面圖——日本間——外觀
- 第四〇 咸興（韓洛用氏）の新住宅——平面圖——外觀——臺所
- 第四一 咸興（中錫定氏）の新住宅——外觀——平面圖
- 第四二 開城（金基臺氏）の新住宅——中庭より主人居間及大廳を望む——夫人居間
- 第四三 農家の平面圖（平壤附近）

- 第三四 農家の垣根（京畿道）、農家の納舎（開城附近）
- 第三五 農家の平面圖（咸鏡南道北青）
- 第三六 農家の前庭（咸鏡南道北青）、農家の溫突内部（同）
- 第三七 朝鮮式の移民農家（全州附近）——外觀——平面圖
- 第三八 内地式の移民農家（全州附近）——平面圖——外觀
- 第三九 内地式の移民農家外觀（全州附近）
- 第四〇 移民農家（全羅北道益山郡）——平面圖——土間内部
- 第四一 移民農家（全羅北道益山郡）——外觀——溫突内部

朝鮮部落調査特別報告

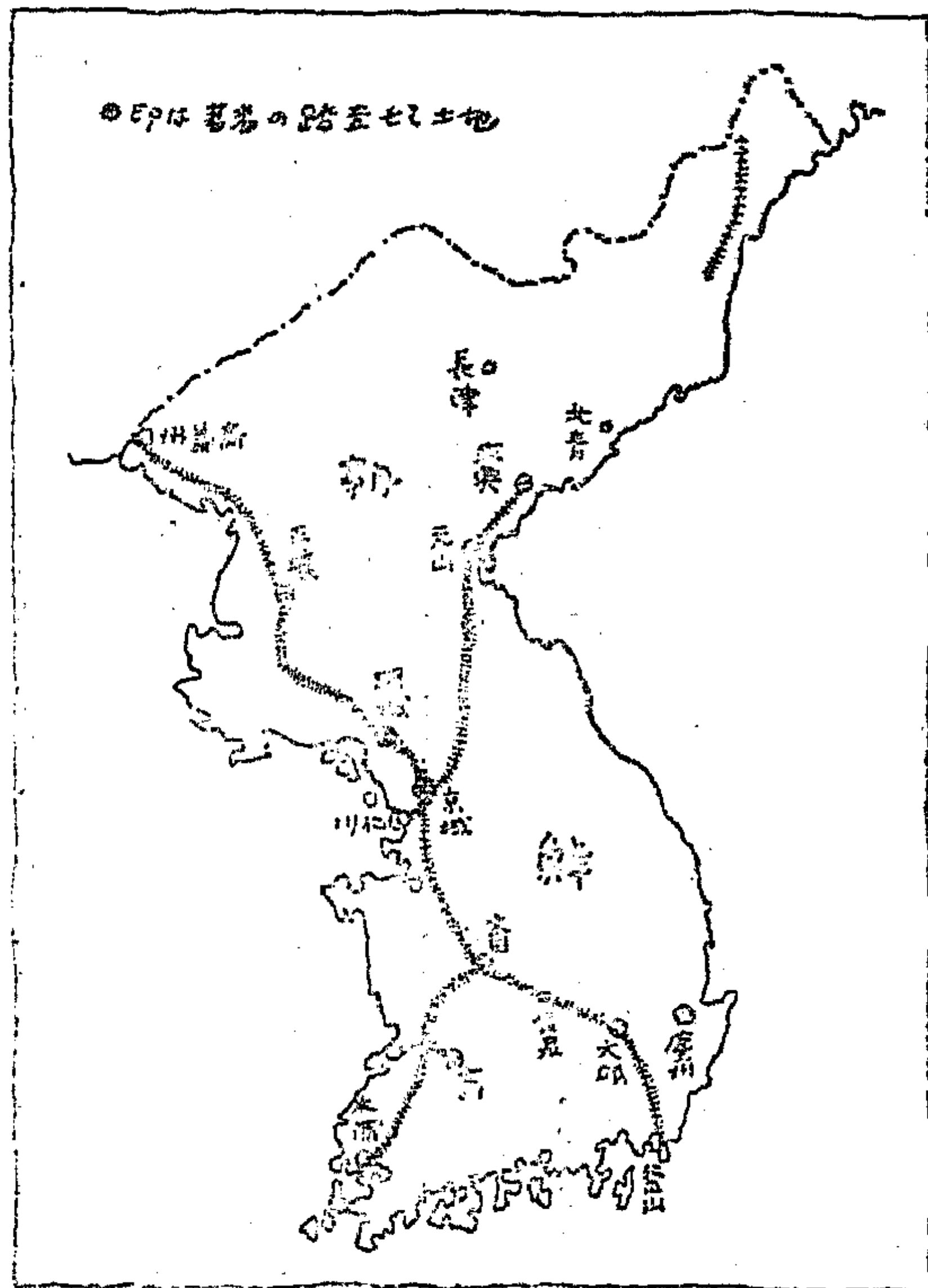
第一冊

今 和次郎

緒言

私は約一と月間、次の順序で旅行をしたのである。

旅程
京城——平壤及其の附近——開城——咸興及其の附近——全州——金泉——大邱及慶州。



第一圖 朝鮮畧圖

以上の土地で、色々な人の世話になり、行先の都市々々では、常に上流、中流、下流乃至貧民窟と云ふ風に各階級の家を見せてもらつた。先づ茲に、其等から受けた全體としての印象を述べておく事とする。

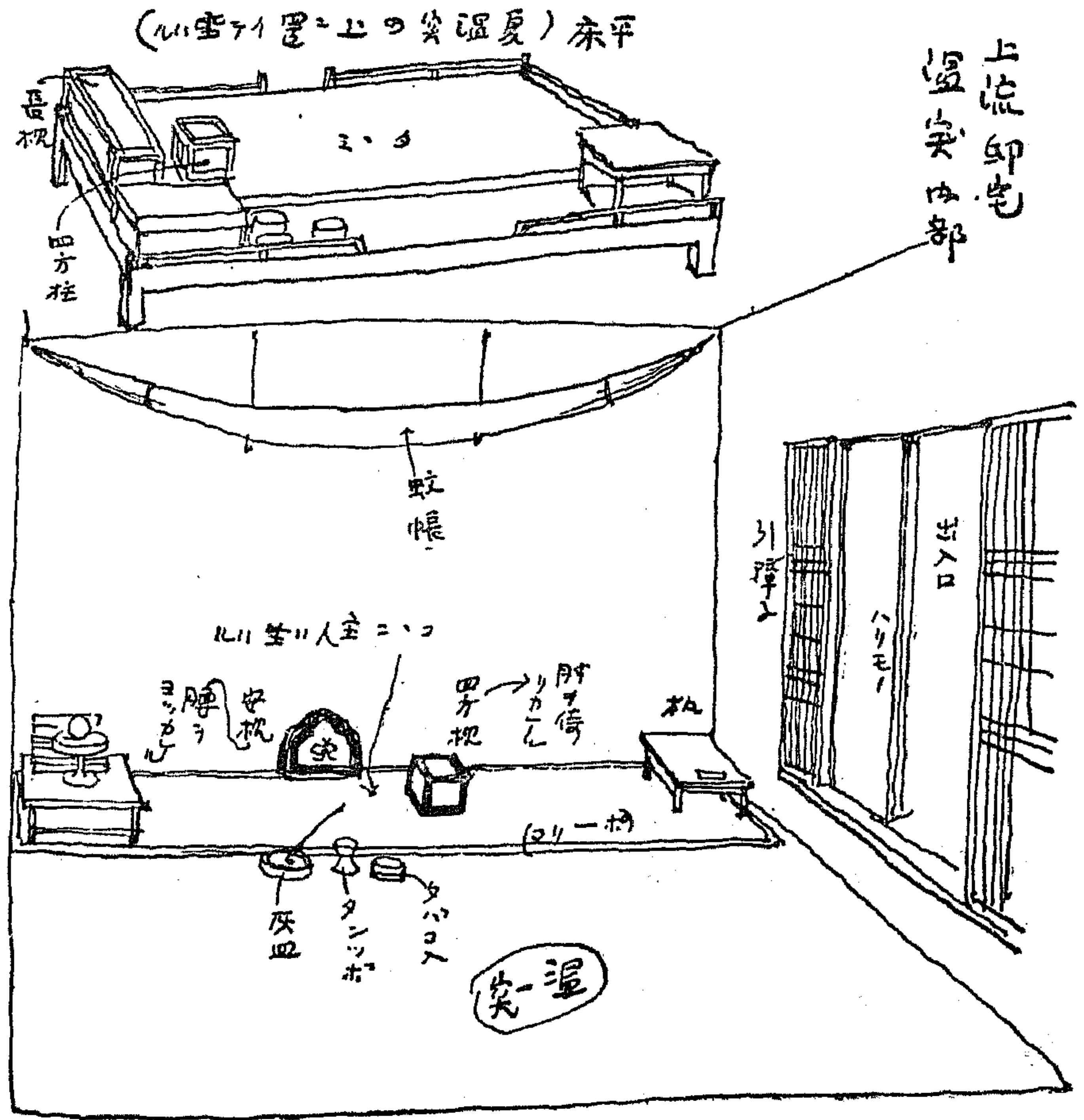
朝鮮では接客室以外へ外部からの人を入れないう慣になつてゐるから、見せてもらつた家々に行くと、き濟まない氣が起つた。婦人達の居る内房を見せて

上流邸宅の印象
貰ふ時には、電話で頼んで承諾を得てから行くと、丁度其時刻に婦人達が外出して留守にしてゐられると云ふ風なのである。

上流の人達の生活は、朝鮮の美術に認められてゐるやうな一種の寂し味を持つた繊細な美しさがあるとしても言へる。お世辭のいゝ、如才のない應對をされ、生活全體がそれで一貫して居るとでも言へ、生活をそれ等で裝飾してゐるとでも言へるやうな流暢さがある。實に生活そのものは裝飾美で衣裳付けられてゐるが、家も亦さうである。日本内地の邸宅に見る様な土藏と云ふ様なものがなく、ありたけの書畫置物の類を部屋々々に列べ、壁に貼り付けて置く。特に驚くのは、名家の書畫をも部屋の壁へ直接糊付けに貼つてゐる事で、をしげなく其等を享樂の爲めの消耗品としてゐる状は見事だと言はねばならない。特別に大げさにした玄關と云ふものもない。さうかと思ふと外來者には見えない裏庭の堀や、後に立てた溫突の煙突等を美しい飾りのあるものにしてゐる。かう云ふ事は武家時代を經過してゐる日本内地の上流人士の家には見られない現象である。昔の武士はかう云ふ風に裝飾を樂しむ事を、女性的だと貶した傾きがあるとしても考へられる。或は日本内地のそれは禪宗道徳から來てゐるのかも知れぬ。朝鮮の人の生活には日本の王朝時代の風味があると言はれてゐるが、全くさうだと感じられる。骨董でない、純粹の裝飾を樂しむ事に徹底してゐるのを見たのが、或る樂しい空想的な世界を覗いてゐるやうな氣がしたのである。掠奪乃至誅求苛斂の悲惨に遭はされた苦しみを積んだか知れぬが、禁慾の風習に縛られた經驗をば持つてゐない、自由なゆとりのある美しさを家の上にも、生活の上にも見る事が出來たのが愉快な事であつた。かくして家の内外は美しい飾りのある、一つの作品つくりものになつてゐるのである。訪問者は、十分、其家の主人の樂しみとしてゐる美しい美術品を部屋の内に、また家そのものの上に見る事が出來、共に樂しく坐る事が出來るのであ

一般民家
の印象

上流邸宅
の印象



第二圖 上流邸宅主人の間

る。

下流の人達の家、乃至一般民衆の家は——朝鮮には兩班及士班と云ふ貴族乃至士族格の家が各地にある。其等の家は瓦葺で、裝飾的な外觀を持つた邸宅の構へをなしてゐる。其等に對して實に多數の民衆は極く小さい家を持つてゐる——朝鮮への外來者達、旅行家達の印象記に「豚の家」(Pigs House)と批評され、而してもう少したち入つて、「いぢけた精神の表現!」と呼ばれてゐる。

私はそれ等の家々の多數を見て歩いた。而して彼等の家の内部をはじめて見た時には、實際よく綺麗に片付いてゐて、美しいと感じたのであつた。お了ひまで此初めの印象は裏切られることがなかつた。たゞ然し、驚くべく單純だと最後に結論付けをしてしまつてゐた。便所や下水の始末は随分汚ないが、それは教育の普及、衛生思想の植付けによつて案外早く變革の見らるべき事項で、風習の根本の姿とは關係の薄い事なのである。それ等の家々の内部の清潔な事は、一つは温突から來てゐるやうである。其に就いては後に

述べる機会があらう。第三章 第三節 清潔を喜ぶ風は、其服装に於て特に顯著に見られる所で、實に其等は驚くべき事件である。朝鮮の家庭に於ける家婦の仕事の全部は、食事の調理と、衣服の洗濯とであると言はれてゐるが、特に衣服の洗濯に使ふ時間の分量は恐るべき量だらうと思はれる。

朝鮮の旅行者は誰も言ふ「朝鮮の人の衣服は鶴や鷺のやうに眞白い」と、男も女もさうなのである。で、その汚れたのは大きな不名譽だとして貶される習慣になつてゐる。晝中、砂の間のさゝ流れの水に、婦人達の群が習慣の爲めの此戦鬪の爲めに集まつてゐ、夜は所謂美しき情調を朝鮮の國土に與へる響の仕事、砧の音を作る習慣に拂ふ爲めの勞働を總ての家々でやつてゐる。

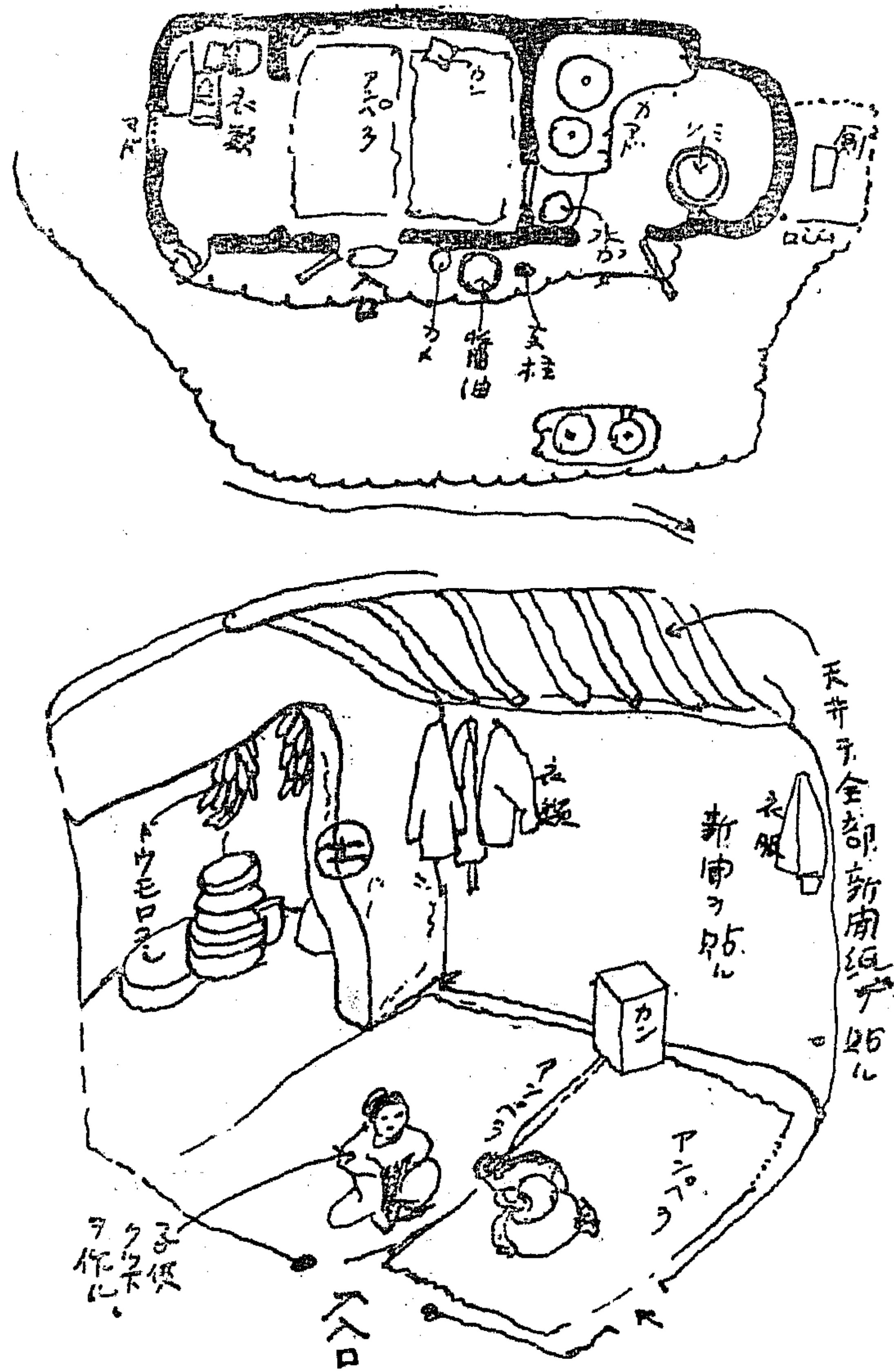
斯くして現在の朝鮮の婦人は總てを藏されたるまゝ、柔和しい外貌を成して、所謂ピツグス・ハウスなる美しい油紙を貼られた暖い石の床の小さい部屋の内に、日々の生活を營んで居るのである。

貧民窟と
都市

特に貧民窟に於て私は見た。意外に其等は美しい事を私は見た。小さい女の子達が靴下作りの内職をしてゐる繪圖^{第三}でも解る通り、其等はたゞ餘りに不思議だから外來者たる私に美しく感じられたのかも知れないが、然し、私は貧民窟に就いては、内部がよく片付いて掃除が屈いてゐると云ふ外に、次の二つの理由を擧げて、其美しい否、日本内地のそれに見る様なそんな汚いものでない事を云つておくことが出来る。其一は一番大きい根底の理由で、朝鮮の社會はまだ工業化した複雑な世相をなしてをらず、粗朴な時代に近かい生活相をなしてゐるが故に

貧乏人の生活も案外氣樂さうに見えるから家に就いてもさう感ぜられるのかと思ふ。——私は精確な朝鮮の事情は知らないが、私の推定から云つて置く。——其二はもつと特殊な事情で、而して又もつと専門上からの事實に屬する事件である。其は舊來からの朝鮮の大都市乃至都邑は、

平壤 万壽台の貧民窟の一部分



第三圖 貧民家の内部

天然の景勝の地に卜されたのであるが、町の周圍に城壁を築かなければならなかつた事から、山に圍れた凹狀の地が喜ばれた事に其遠因を發してゐる。

京城の敷域は、北漢山と漢江の山水に接近してゐるが、漢江をも北漢山をも離れた、それ等の周圍の山々や小流からの盆地に選ばれてゐる。開城は松嶽山及其麓に連つた山や丘に圍れた雲溪川の可

愛らしい流れを中心とした凹地に其地域を卜されたのである。——
 第二圖 地方の邑内金泉に於けるが如きも同様である。——
 第十一圖 これは本當の近代都市としての通有な特徴から離れた一種の特質であるが、それで此等の都邑には次の如き事が起つて来る。摺鉢狀の底の部分は、街の中樞區域を形成し、舊き宮殿は一方の山を脊負ふて、麓から底地を望む様に建てられ、計畫した街割は其

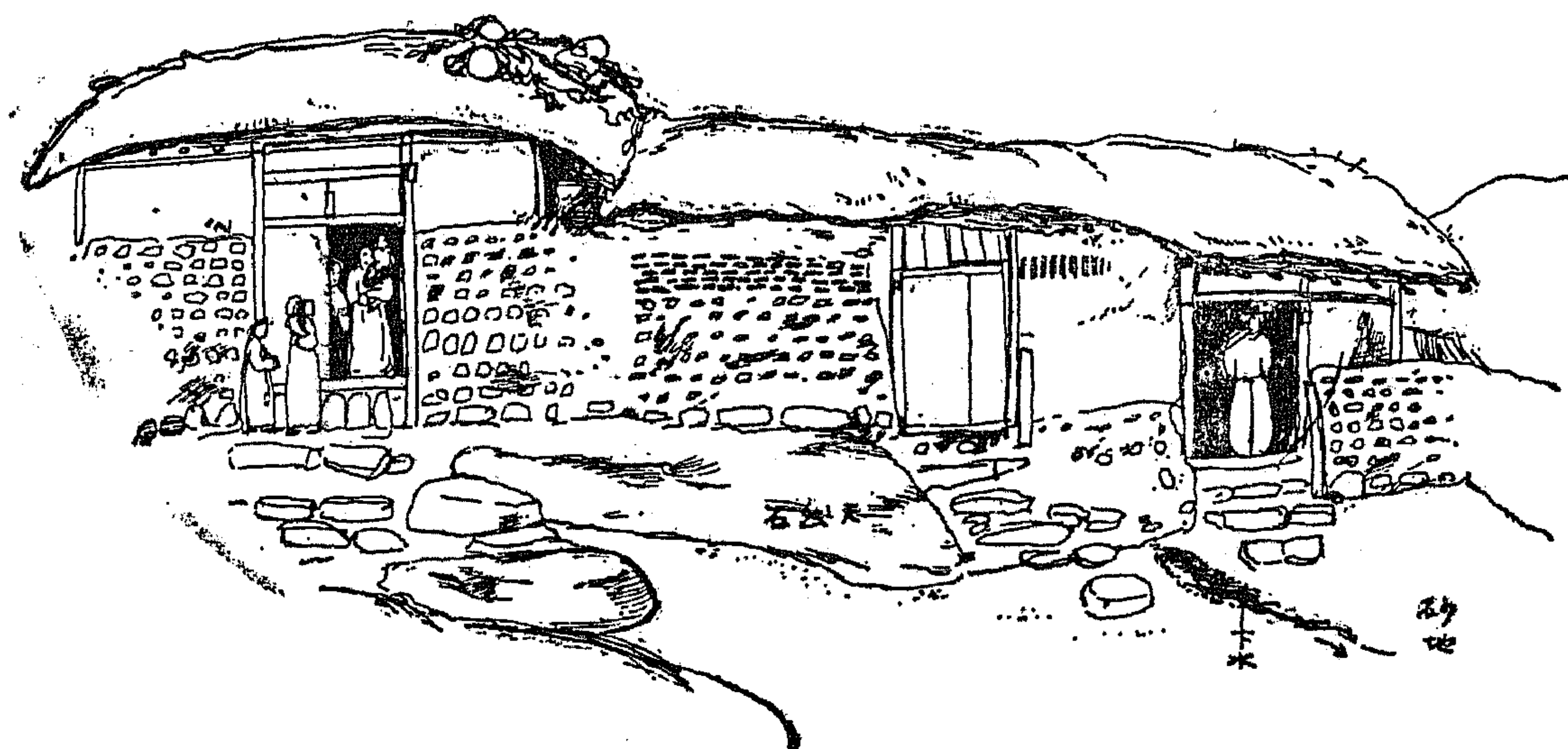
等を中心として延び、段々場末の山の中腹から頂上へかけて擴げられる事となる。所で、場末と云ふもの即ち落伍者達即ち貧乏人達の巢の出来る個所は、中腹から頂上へかけての地點に、其設定地域を見出さなければならなくなる。此事實は、普通の近代都市に就いての常識では一寸考へられない事であるが、朝鮮の都市の多數に於ては見られてゐる事實である。普通貧民窟は工場或は都市の活動地に接した低濕地に出來、從つて極めて汚ない環境の中に置かれるのが物質文明の世界に許されたる事實であり、都市生活者達總ての殘屑を其處で蒙つて、徹底的に不快、不健康な状態に置かれるのが殆んど通則とされてゐる所である。然るに我朝鮮のそれは貧民達の下水が中樞區の人達の屋敷の方へと注がれる關係の上に立つてゐる。而して皆、別莊の敷地にでも建てられたやうな、いゝ見晴しを持つてゐる。斯る實質的な健康美と、而して愉快な構想へと導かるゝ所の風景美とを持つてゐるが爲めに、茲に述べた様に、朝鮮の一般の都市に於ける貧民窟はさほど不安の感を起させない状態になつてゐるのだと、斷片的な解明として掲げて置く事が出来るやうである。私はたつた一人で言葉の通じない土地の貧民窟で數時間を過し、ゆつくりした氣持ちでスケッチしたりする事が出来たのであつた。其處の人達も笑つて私に挨拶してくれたりしたのであつた。

貴重な經驗

尙、多く、至つて多く、朝鮮の民家の色々の説明をやる前に、述べておきたい事があるけれど、此位で打ち切つて置く。たゞ最後に、私の旅の中で受けた印象の内で、最も深刻に感じた事件を一つ添へて置きたく思ふ。

それは、某地でゝあつた。郡の役所の朝鮮の通譯の人に案内をしてもらつて歩いてゐたと如

私は道々寫眞機を持つて、途上の家々を撮つて歩いてゐたら、案内をしてくれてゐた其本人は



第四圖 都邑の末場の家

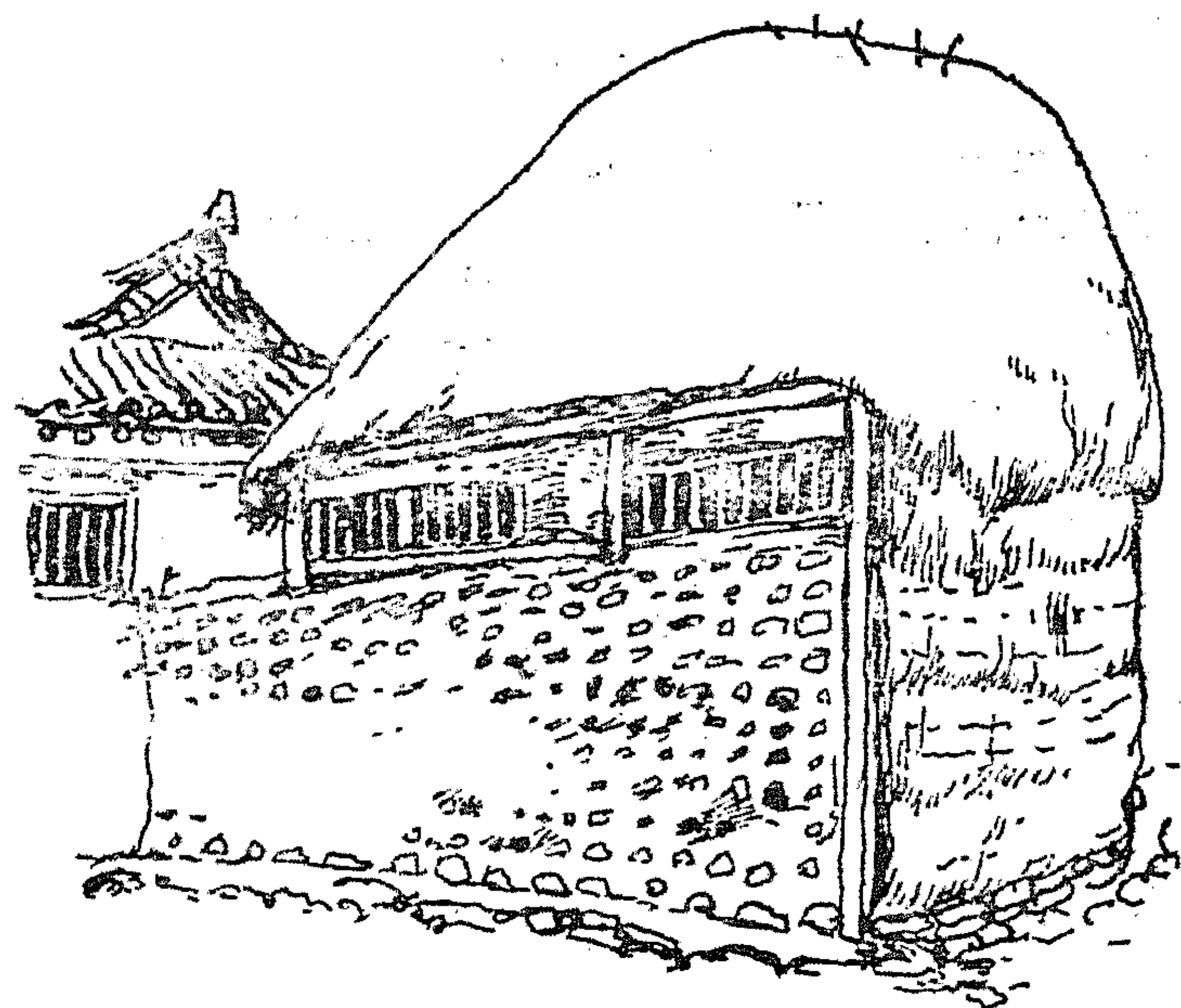
私の行爲に反感を持つてしまつた。私は仕事にこつてゐたのでそれに氣が付かず居た。とうとう彼は堪えられなくなつた叫び聲を擧げて、私をにらみ付けながらかう言つたのである。「どうして、汚ない家ばかり寫眞に撮るんですか」と、眞赤になつて、而して怒つた口吻で私に訊問したのである。私は仕事から離れた心で靜かに彼を見上げた、彼は若くてハイカラな身態をしてゐた、私は其處で素直に「私は貧乏人が好きだから」と言ふ事を差し控へた。「研究の爲めだ」なんて無論言ふ氣になれなかつた、靜かに私は反省の、ある部分を更らに眞實に私の心の上に刻印する機會を與へられたまゝ黙した。釜山へ上陸して以來決して離すまいとしてゐる反省のそれを更に堅めることが出来たのである。これまで日本内地のある部落に於ても私は斯る反省を與へらるゝ機會を持つてゐた。

茲に私は、私に調べものゝ對象を與へて呉れた多くの朝鮮の人達に大きい感謝の意を表して置く。

第一章 構造及それに就いての考察

第一節 一般構造

外觀



第五圖 蕁茸屋根

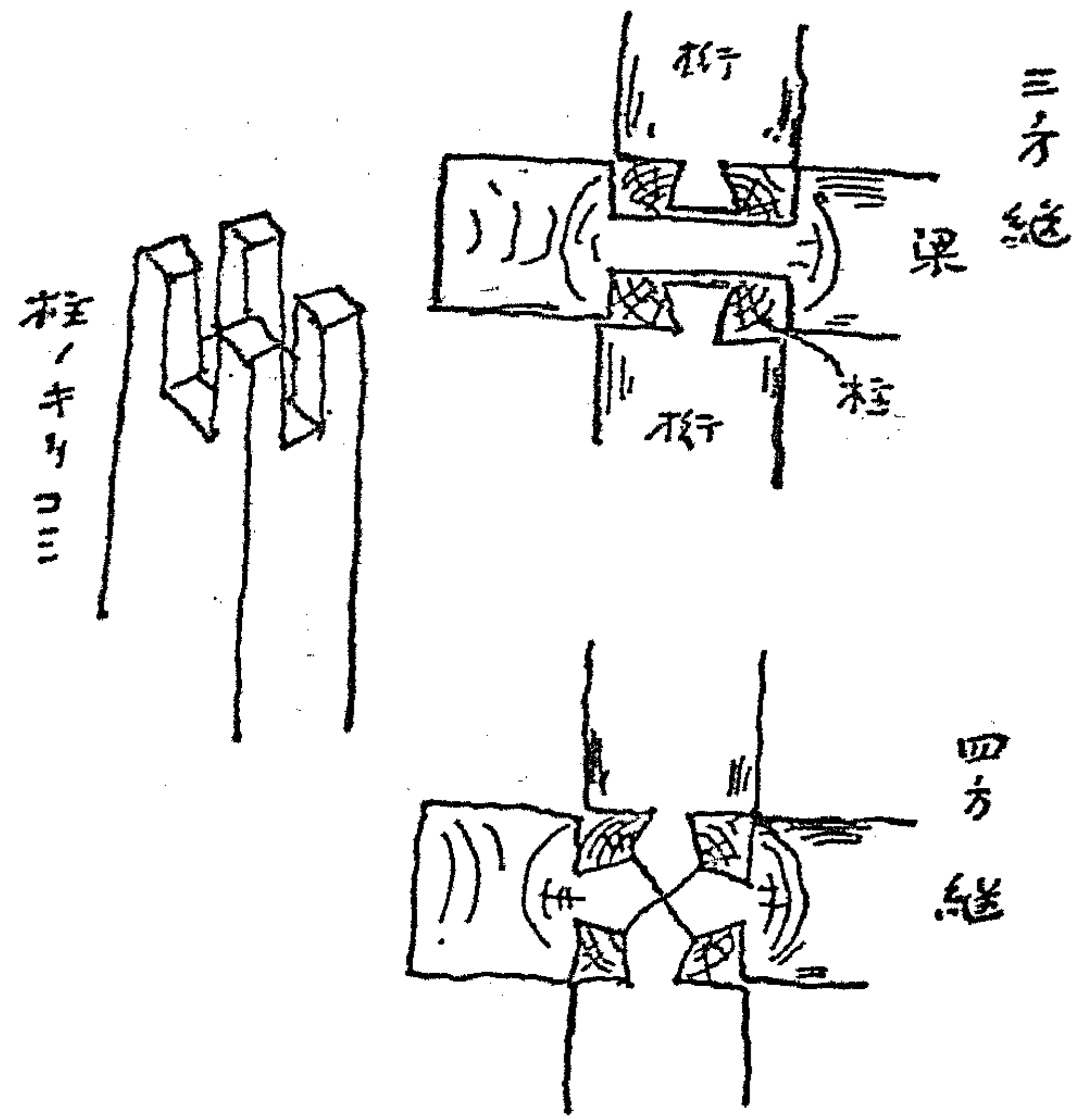
「朝鮮の家はスケッチをするのに極く樂でいゝ」とは、繪をかくアマチユア達からきける言葉だ。實際朝鮮の人達の家々には繪畫的な味ひが満ちて居る。蕁茸の屋根は、空から土へ垂れた一本の曲線を引けばいゝし、柱や椀などが不揃ひであるし、壁の土や、又其れにモザイクのやうに箆められた煉瓦や、瓦や、石等は極めて勝手に自由に仕事されて居るし、窓は小さく、而して小じんまりして美しく壁の所に額縁のかゝたやうに切られてあるし、温突の煙出しは又意匠に富んで居て、匍ひ出て来る煙で壁の所々が適當によごれて居るし、また赤黄色な土の上にそれらが亂雑に並んで居るし、垣根や、土塀の變化も氣樂であるしそれらの内にまた、風にゆられた柳やポプラが、空に、水邊に、枝や葉を動かしてゐる態を印象の全體とすればいゝのだ。それに白衣の單純な、形の明瞭で而してすつきりとした添景人物をも場合によつては添えられるのであるから、鉛筆や、ブラッシユで餘り

の柱の上の料が、交叉した肘木を噛み合ふ個所の切り込みの形をして居る。而して朝鮮には長い用材が容易に得られないので普通用ひられないから、桁も多くの場合柱の個所々々で繼がれて居ることとなる、つまり柱間々々は、丁度朝鮮の室一つ一つの幅になつてゐて、その長さは大抵八尺づつである。貫と貫との間には、窓を付ける個所に、丁度窓枠になる様に堅の貫が取り付けられ、而して、それらで區切られて壁の附せられる部分は、更に小丸太を堅にも横にも取りつけられ、それに更に粗末な家では黍稈、普通は小割りにした木材を縄で縛り付けるとそれで壁を塗る用意まで仕上つた事になるのである。

第六圖

屋根の骨組はどうなつて居るか云ふと、梁の中央に束を立て、それに棟木を載せ、棟木と桁とに丸太の榑を渡し、榑の端近くに廣小舞を打ち、更らに木舞を打ち付ける。ぞんざいな家々では、木舞の代りに黍稈を並べる。而して其上に土を載せて藁葺の

屋根



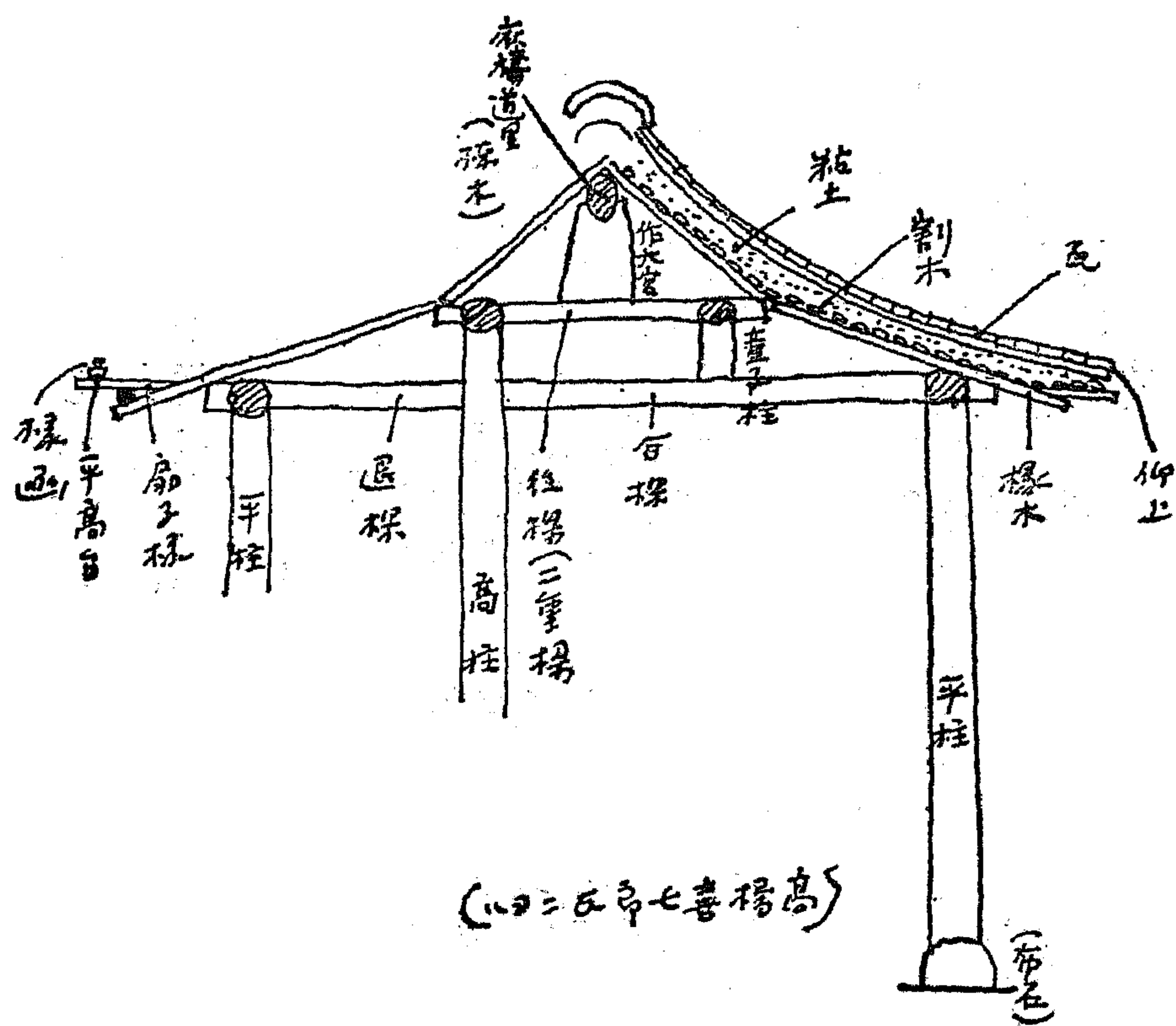
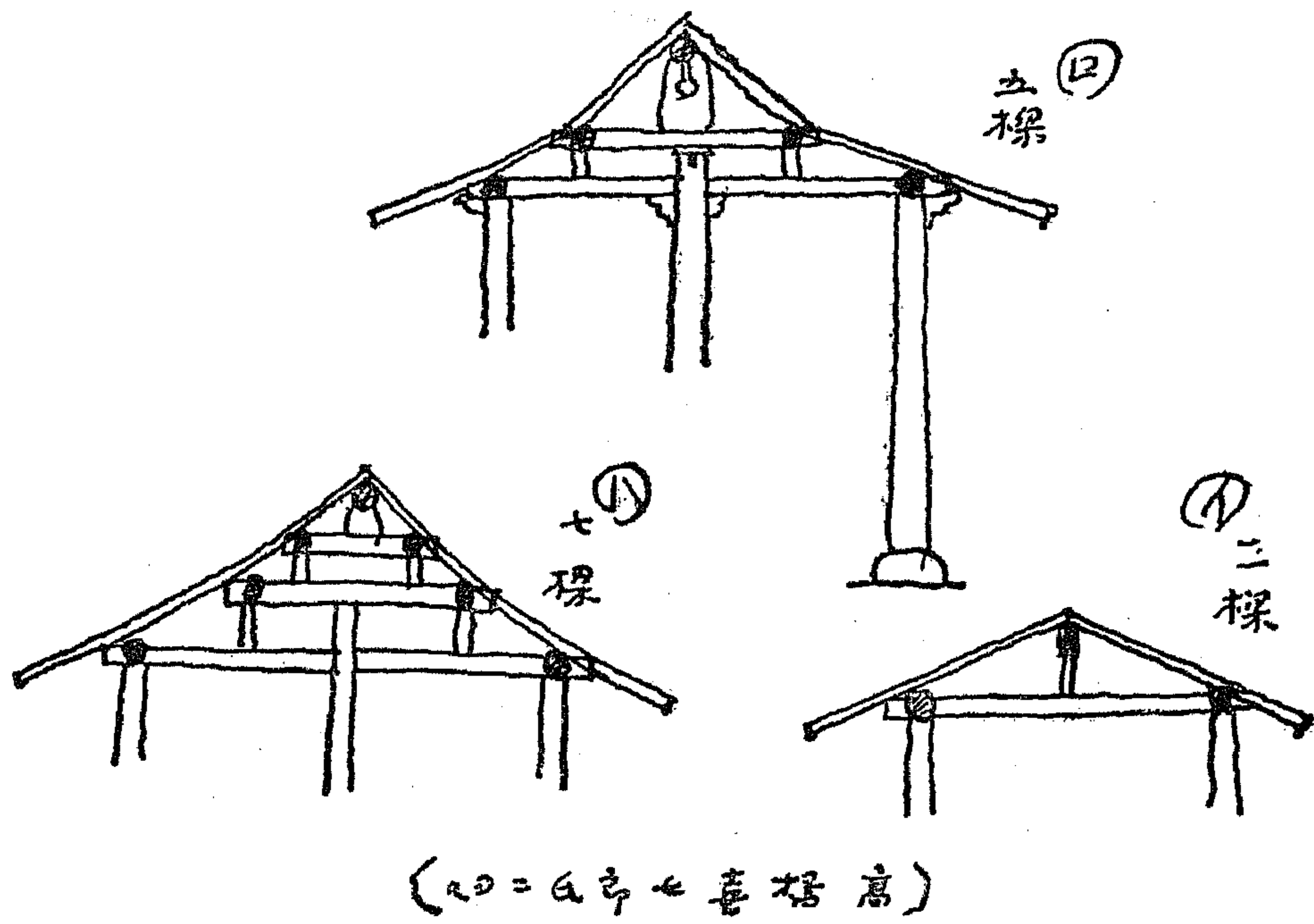
(高き榑と七厘の合工)

第七圖 柱と梁と桁との合工

場合には藁を葺いて行くのである。第八圖

朝鮮の藁葺屋根の厚さは實に一樣でない。一尺位軒端に厚さの見える居るものもあるし、一二寸位しか見えて居ないものもある。而して日本内地のものと違ふ點は、年々上へ上へと新たに編んだ藁を古い屋根の上に雨具の様に着せて行く事である。それから又其等は藁の根元を棟の方

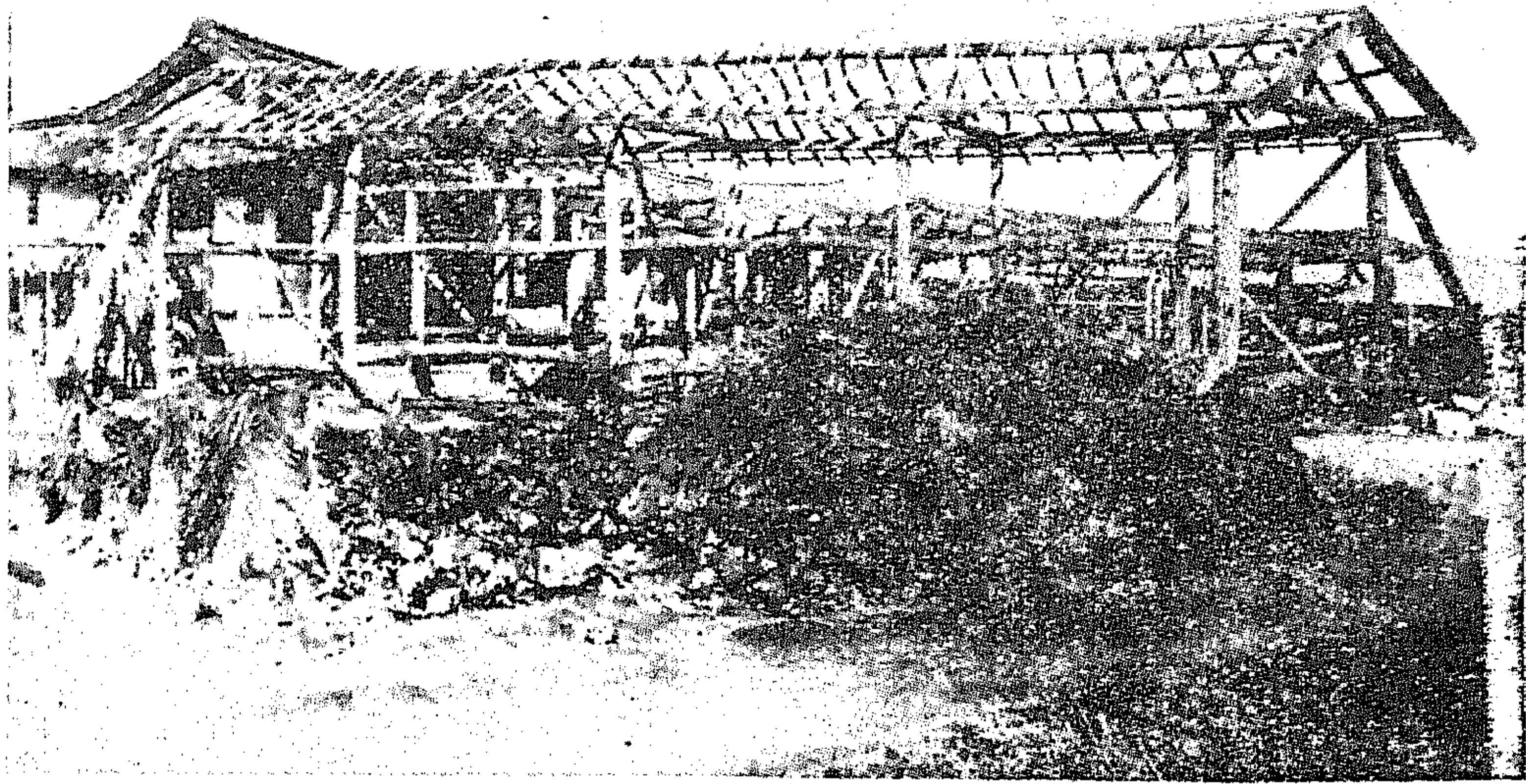
へ向け、下の方へは柔かい先端が垂れるやうになつて居る事である。棟の箇所は、百足の形に編まれた藁が、柔かい屋根の細い背飾りとして置かれるやうになつて居る。かくして装はれた屋根は、場合によつて、縄で縛られる、或は平行に幾條も屋根に縞を作り、或は網形に、或はもつと表現派風の張られ方で、色々な模様をなして居る。此等は日本内地では海岸の極く風の強い處でともなければ見られな



第八圖 小屋組構造

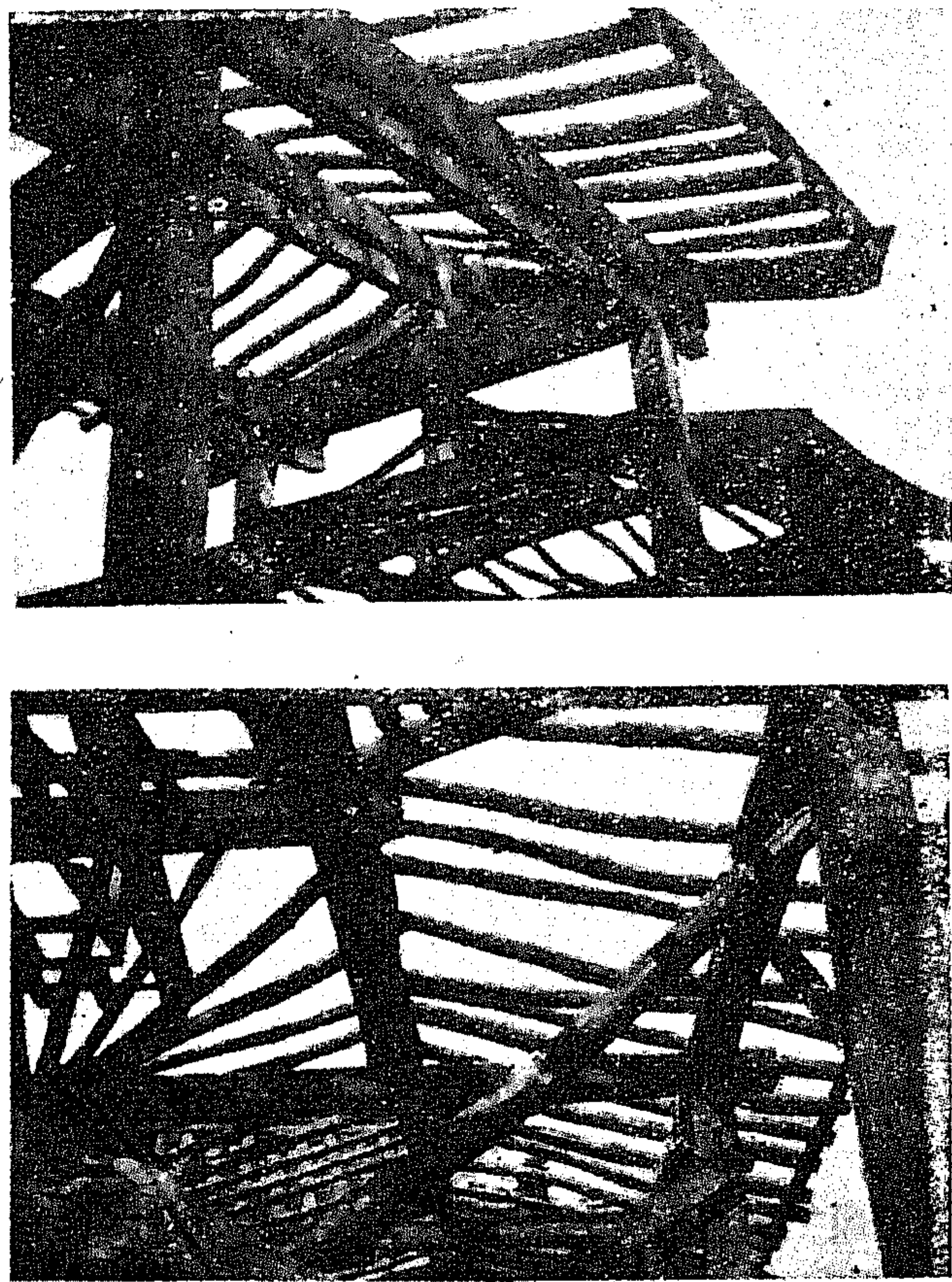
ある。その上、一つは屋根をよく縛り付ける爲め或は土地の一部の代用をせしめる爲めに、南瓜或は瓢の蔓をからますのである。それらの實が大きくなる季節には、大き

な石が屋根の上に載せられた形になるのである。第五圖
て急勾配に出來て 而して此等の藁葺の屋根は、物干場にも屢々使用される。物干場と云つても
ある例外である。



第九圖 新築中の家(軸部組立)

頗る可愛らしい使ひ方で、朝鮮の人達が喰べずに居られ
ないところからの實を干す場合其他に充てるのである。
私の旅行した時季に、丁度その干物で總ての朝鮮の家々



第十圖 新築中の家(小屋組)

は屋根の上
に血を散か
れてゐるの
かと思はれ
る位、どこ
の家でも盛
んに干して
をつたので
あつた。實

にその有様は、屋敷の庭に置かれてある澤山の醤油の甕
と對應して、朝鮮のいゝシンボルだと思はれた。

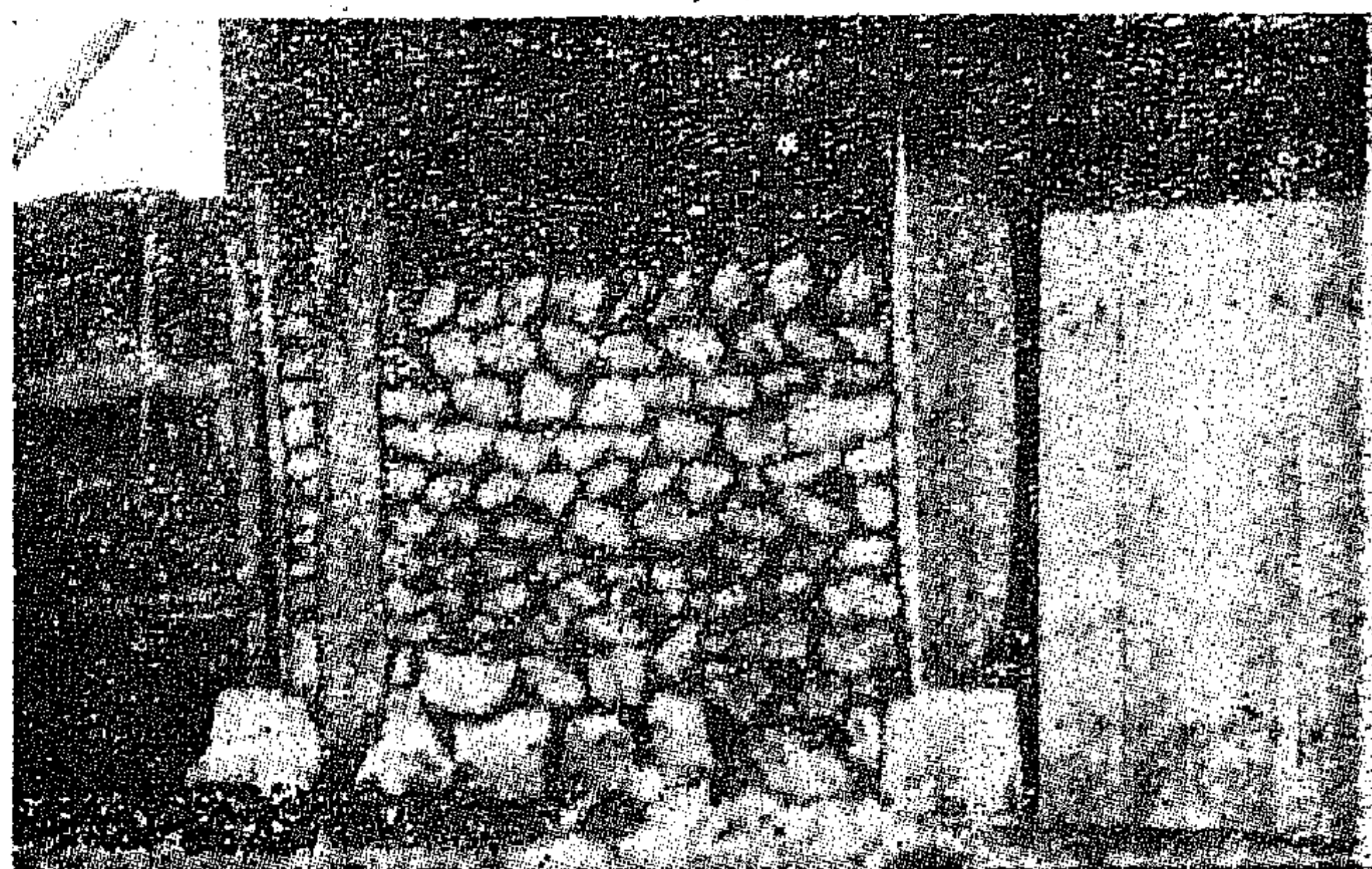
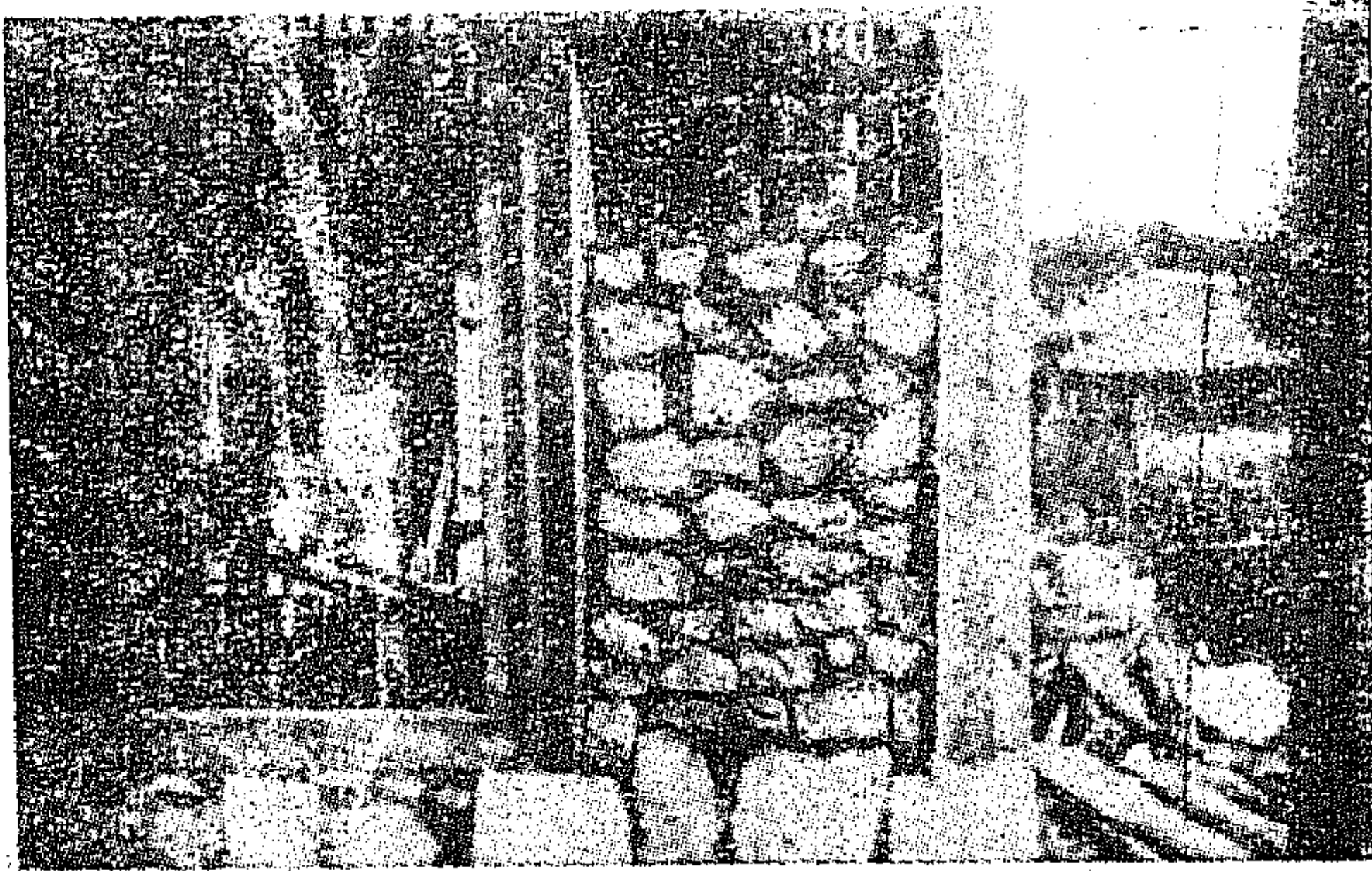
瓦葺の屋根は、田舎では兩斑の家に多いのであるが、木舞の上に土が厚く載せられ、その上
に瓦が葺かれるのである。而して葺方は本瓦葺である。瓦の屋根は、藁の屋根とは反對に、軒

端を上にはね上げた曲線になつてゐて、多くの藁屋根の間に一人威勢よく歌つてゐる姿を見るやうに感ぜられる形をしてゐる。圖版第一等 それらの屋根の端の椽の小口は特にきびくんと揃つて見え、建物全體が藁屋根のものとは全く變つた表現をもつてゐる。

而してそれらの屋根の小屋組は第八圖日本の古典建築のそれに見るやうな勇ましい組立になつてゐるのである。而して棟木を受ける束は全く板のものもある。それは同じく板墓股を思はする。

それから尙上等な家になる程、古典的な型に接近してゐる。線形のある肘木を加へられ、それから外側には立派な破風板も付け加へられる。

屋根の説明はこれ位にして置いて、次ぎに中止してをつた壁のはなしに移らねばならぬ。先

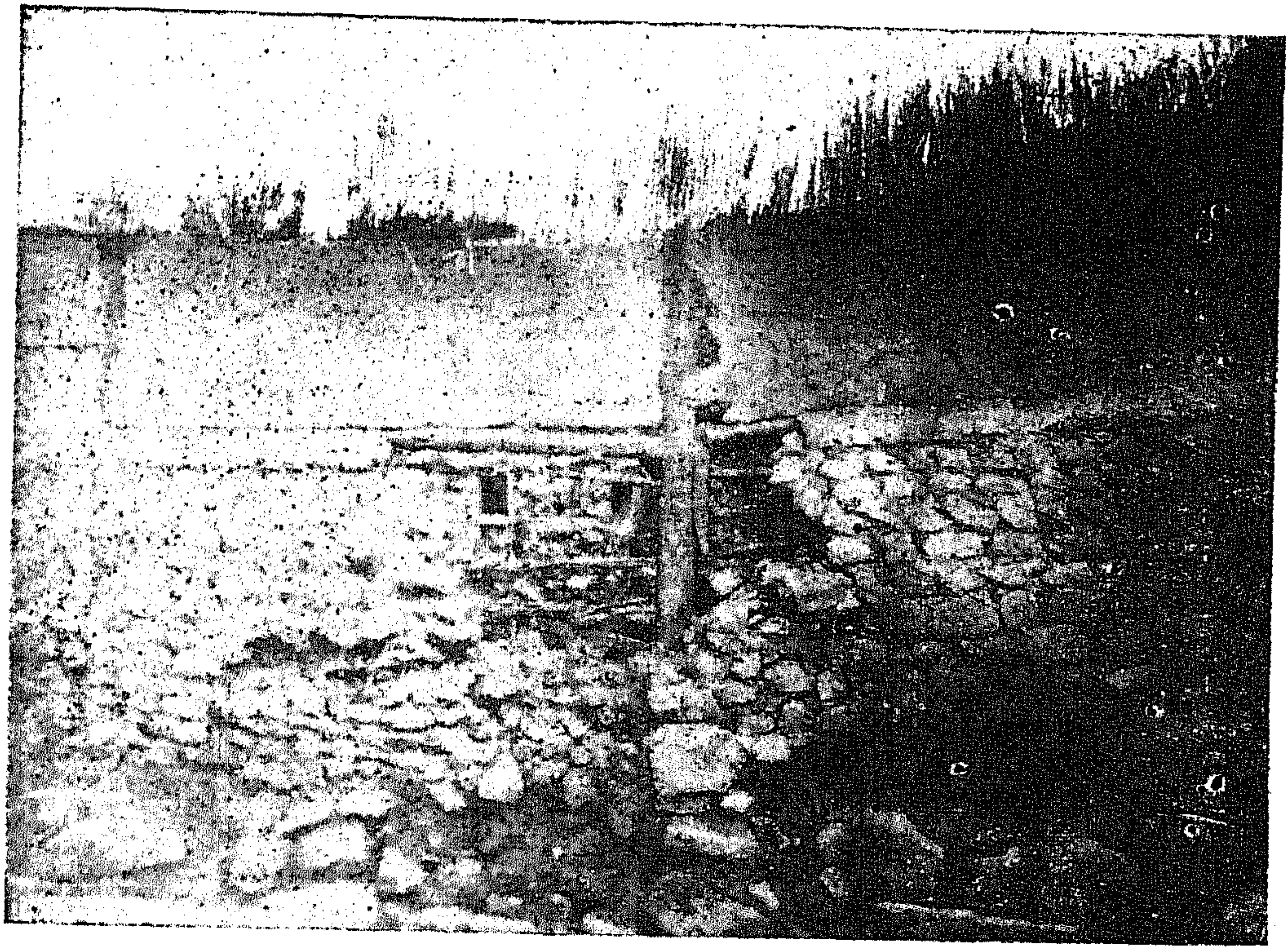


新築の中家(石積み) 第十一圖

きの骨組みが出来上つたとき、一番基底に一段石を並べる。而して石と壁の心との間に土をつめ、それから又、石を一段置き、それらの石をば縄で壁心の小割りの木材にしばり付け、土をつめてはまた、上へ上へと順次に仕事を進めて行くのである。圖版第六十一圖かくして適當の高さまで腰積みをやつて、それから普通の壁を残つた上部へ塗り上げて行く。腰積には、場合により煉瓦、或は瓦の段を狭み、或は特有な模様をそ

床

天井及窓



第二十圖 崩壊せる外壁

れで作り上げてゐる場合がある。仕事のやり方は總て自由に出來てゐるのが普通だから、素的に美しくチャームするものを作り上げたりしてゐる。而して上等なものは、石や煉瓦の目地を石灰或は漆喰で綺麗に塗り整えてゐる。床の事は温突の項にゆづつて置かねばならぬ。第一章 第三節 その外、屋敷の圍ひの土塀は、泥のまゝのものもあるが、上等のものは、壁の腰積みと同様な手法でやられてゐる。

天井、窓等に就いても温突の項にゆづつて置く。

上に説明したやうな構造は、京城を中心として、大體朝鮮全土にわたつてゐるものに就いてゐる。多少地方によつて、或は腰積の積み上げ方は軒まで達してゐたり開城に於ける一般の軒まで石を積み上げる。或は腰積みを一切やらないところがあつたりする。注意して置かねばならぬ

事は朝鮮の一般の家は石造でも煉瓦造でもない云ふ事である。外壁が一面に石を積み上げた様に見えるても、それらは木造の上へ張り付けたものであり、或はモザイクの様に泥壁の上へ石や煉瓦を嵌入したものである。

第七版(註)は今迄説明した全行程をよく説明してゐる模型圖で、順次に完成して行く有様をのみ

こむ爲に役立たしたかつたのである。これで一般記述を了へておいて、次ぎに私にとつてもつと興味のある事項へ移る事とする。

(註) 故船越欽哉氏の筐底に「韓國住宅建築」を云ふ精細な調査の稿本がしまわれてあつたのを、早大工學士三宅勤氏が手に入れてそれを整理し早稻田大學理工學部建築學研究室に寄贈された。その稿の中に日田嘉吉調査を署名されてある。それで船越欽哉氏、日田嘉吉氏調査稿本として保存してをる。實に朝鮮の一般住宅研究には貴重な資料である。

第二節 地方的觀察

民家の地
方的差異
性人間間

の住家に
對して有
する觀念
及工夫力

朝鮮の民家の一般の構造は上に説明したやうに、大體木材を骨として、それに土を着け、また壁の外側の腰部に石や、煉瓦で装ひを施した型のものである。

私は最近滿洲に行つて、純石材の構造の民家を見ることが出来た。また泥ばかりの家、日乾し煉瓦の家、煉瓦の普通の家も見ることが出来たのであつた。滿洲の人はもつと大陸的で、その土地の地理的條件に卒直に順應さして家々を作つてゐる。産業はより單調であり、社會が粗朴であるからかも知れない。然し一番大きい原因は、あの遼河の大平野の擴がりと云ふ大自然の地理的必然からさうなつてゐるのだと感ぜられる。人間が土の上に何んにも持たずに、空ら手で生れて來たんだ。そこへ畑を作り、高粱を作り、豆を作るんだ。土でまた家をも作るんだ。と平氣で滿洲の野に働いてゐる農夫達は叫んでゐるやうに見える。また遼東半島の同じく木のない而して石山ばかりの土地の農夫達は、家と云ふものは石を積み上げて作るんだと、生れるとからさう信ずるよりも仕方がないであらう。總ての國の人々は、同じやうに自分達の家に就いて、そんな風な、ある圍ひの中にでもつながれてゐるやうな考へをもつこととなつてゐるのである。

日本の農夫達は家を作るのには、木の骨組を作り、それに土壁を塗る。いや農夫達はかりではない、一般の日本内地人はそう無意識に習慣付けられてゐる。東京の人は家の外には下見板を張るものと考へるやうに習慣付けられてゐる。煉瓦で作ると西洋造りになり、石で作ると勿

論立派な西洋造りだと考へる。習慣は總ての新らしい工夫力を消してしまいたがるものである。建築師にまちがひのない西洋館を建て、もらひ、洋服屋に本當の洋服を作つてもらつて、イブセンが引き合ひに出してゐる人物のやうに生活してゐる人が多い。洋服を着るとカラーをつけねばならぬものと習慣がきめて、而して總ての紳士がさう思つてしまつてゐる。美しき昆虫達の翅の装ひ、眼玉の装ひと同じやうに、總ての工藝意識を缺いた人達は、家も服装も、習慣と云ふものに運命付けられてゐるのが現在の一つの現象である。

二重の事實を一つの平面上に並べた言ひ方をしてしまつたが、私は滿洲の農夫達のやうな着實な努力をしてゐる人達を貶してゐるのではない、彼等の運命は、粗朴時代の何人も荷はねばならぬ運命であり、それには決定的な充分な理由がある。たゞ後の場合の人達の運命を笑つたのである。石で作ると立派な西洋造りだと思ふ人達を笑つたのである。その運命こそ、永久に新らしく新らしく引き出される繩で縛られる立場に在るものの運命であるから。

地球上の
民家の系
統分類

さて、私は、此頃世界の民家に就いての研究の目標としての系統分類を、假りにかう作つて見てゐる。(一)アフリカの東北部からはじまつてゐる沙漠地帯は、大體に於て一直線に東洋の蒙古に來、滿洲の端まで續いて地球の上に蟠つてゐる。此の線の上にある家々は、不思議に全く同型だと言つていゝ各地のものを揃えることが出来る。私は假りに之を民家研究上の沙漠地帯と稱してゐる。それから、(二)我が日本内地から、南の方へ、南洋諸島にかけ、また一般に雨の多い海岸地方から、全く同じ型の民家の數々を揃へて並べることが出来る。私は之れを假りに海洋地帯と稱してゐる。更らに、(三)もつと北の方、寒帯地方へかけて、即ちシベリアからアラ

スカ及米大陸の最北部、グリーンランドへかけての一揃ひの類似型を揃へることが出来る。之れを私は寒帯地帯と稱してをる。(四) 飛び飛びに世界の各所に點在してゐる高山地帯に、同じく共通な型の家を蒐めることが出来るが、それらをば假りに高山地帯のものと名付けてゐる尙、別に、(五) メソポタミアで沙漠線と交叉して、そこから發して一方はペルシア、印度、それから支那本部へかけての或る共通な性質をもつた一揃ひの型の家々、それからメソポタミアから更らに地中海沿岸の諸國に互つた家々の型をも含めて一系となすことが出来ると思へてゐるそれをば假りに舊文化地帯と稱してゐる。更らに、(六) 北歐一帶に共通性をもつてゐる家々のグループを指摘することが出来ると思へ、それらを北歐文化地帯と稱しておきたいと思つてゐるその外にもう一つ、(七) アフリカ、南アメリカ其他飛び飛びに、複雑で、變化に富んで、纏りの付かないやうな部分が残るが、それらを假りに諸蠻民地帯とでもしておいたらいゝかとも思つてゐる。これは勿論、私の第一歩としての研究上の便宜から區別し分類して見たもので、精確にはつきりと言へる事でないとは自分でもわかつてゐる。であるが、かく假りでも考へて置く事は、大いに民家研究の上に足場が出来、而してまた、一般住宅の風土性、地方性を分類し客觀し、論議したりする上に便宜である事を感じて提出して見ずに居れなかつたのである。私は人類學や、地理學の貧弱な智識で、かゝる大袈裟な提出をすると云ふのは、無鐵砲なはなしであるけれど、私のそれを言ひたい意味だけでもくんでもらい、尙ほ、注意を與へてくれる人があると思つてゐる次第である。

で、私は今朝鮮の民家を考へる事に歸る。朝鮮の家の作り方は、私の今擧げたどの系統に屬

置 民家の位

してゐるかと言へば、言ふ迄もなく、舊文化地帯の一番東端に當るところのものだと言へる。間取に就いて説明をしなければ、はつきりそれを表はすことが出来ないのであるが、それらをぬきにしても、小さい窓をもつた閉ぢ込めた部屋々々を作つてゐる事、即ち、壁體を主としてゐること、屋根の形の特殊な事等の二三を擧げる事が出来やう。然し本當にそれを考究するには間取の項に譲らねばならぬ。

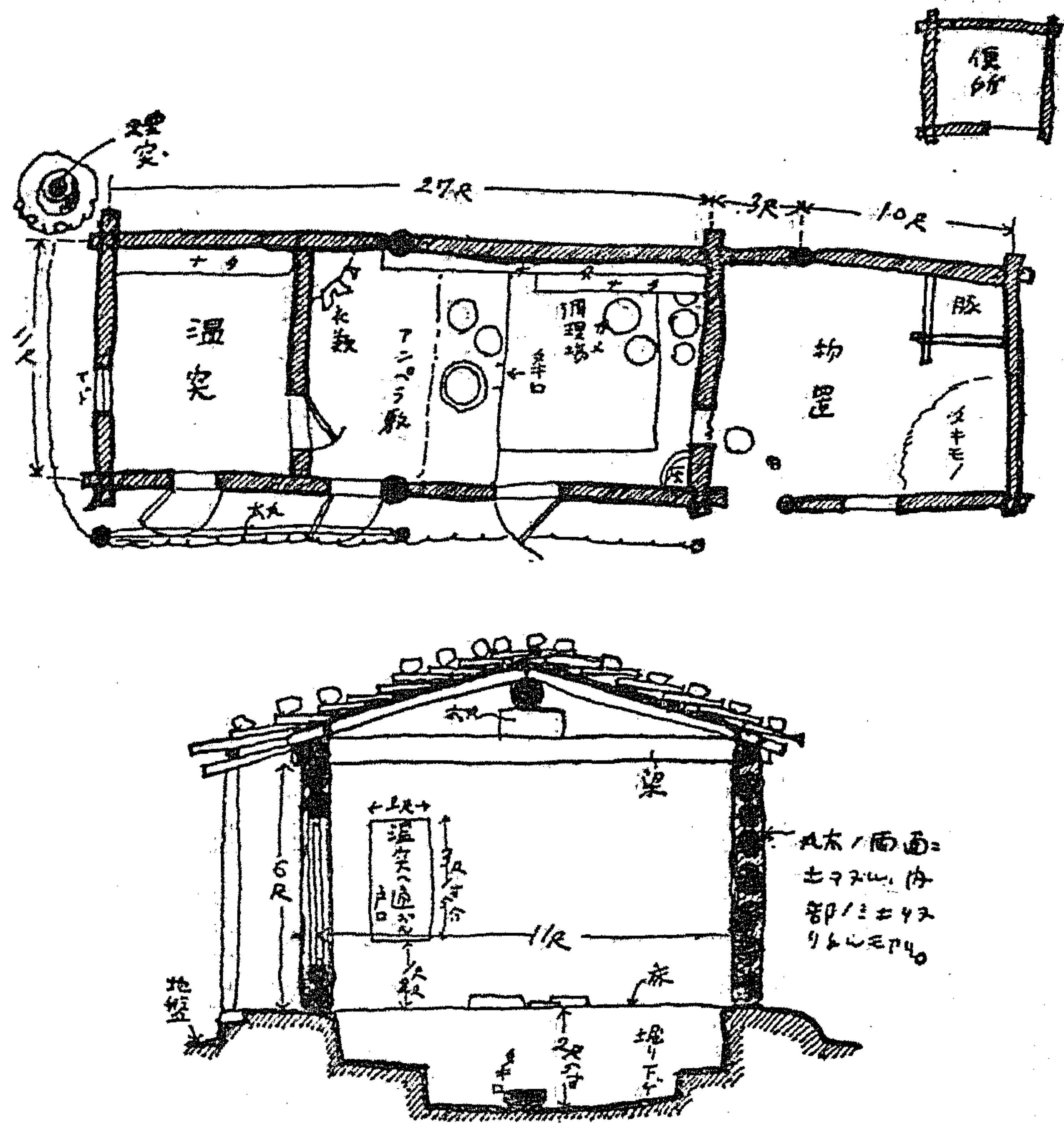
丸太造の家

たゞ、日本内地の海洋地帯に屬してゐるものとは餘程ちがつてゐると云ふ事を注意してもらはねばならぬ。海洋地帯の建物は、柱を立て、それに屋根を架しただけのものであつて、壁は極くわづかに用ひられ、出入口や開き口が大きい。而して床下をば吹きぬきにしてゐることが通例である。勿論各地帯に共通してゐる特徴があるから、それらの條件は必ずしも絶對でない事だけは考へておいてもらはねばならぬ。

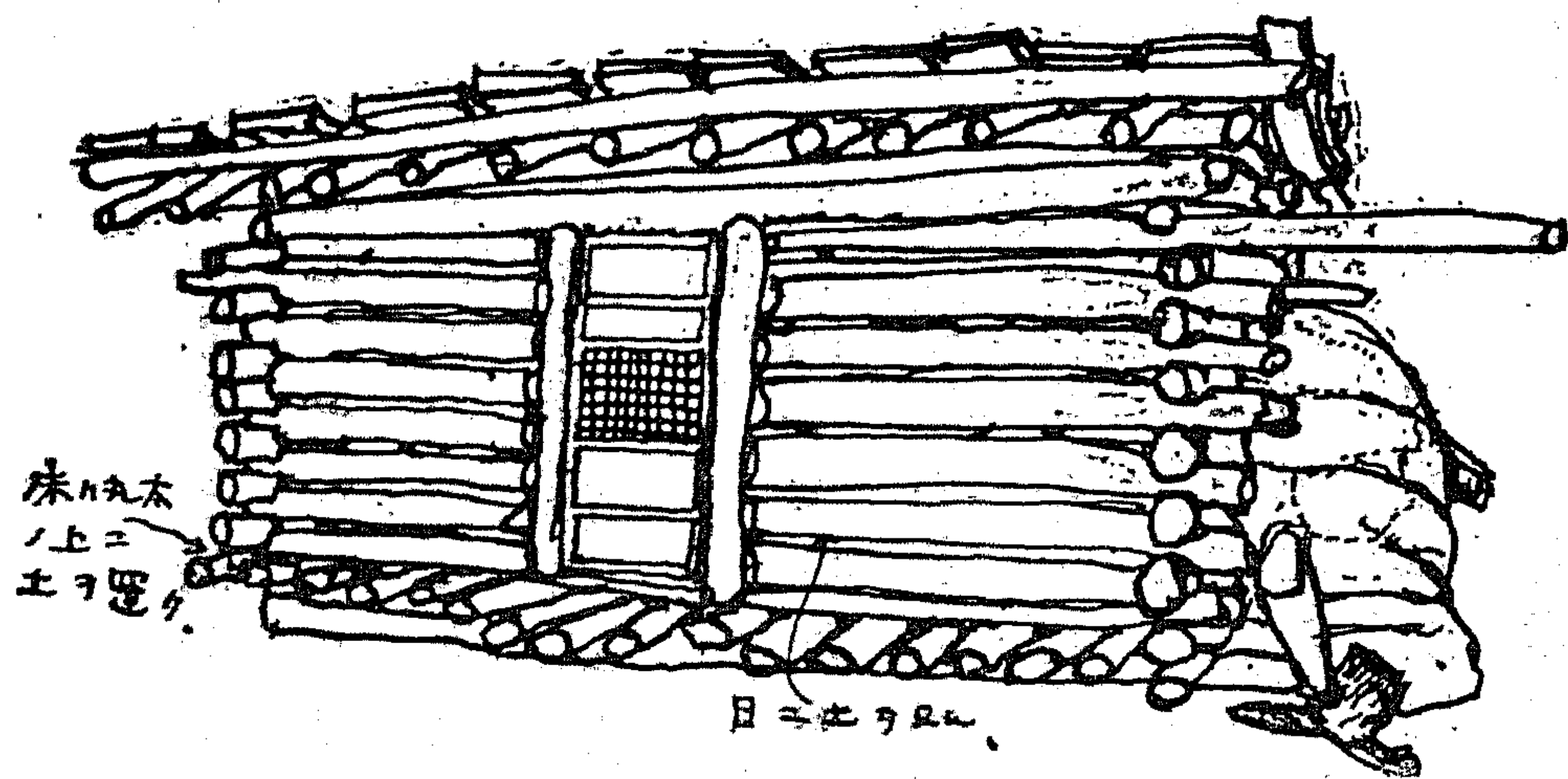
高山地帯の型に屬する家は、朝鮮に於ても見られるのである。然しそれは日本内地のものとはいくらか變つた考へ方を加へられなければならぬやうである。朝鮮の北部地方は高原地帯となつてゐる。それらの地方の家々は實に一面高山地帯の型に屬したものと見なければならぬ。同地方のものは丸太造りの型になつてゐる。

私は此型の家をば咸鏡南道の山間地方なる長津郡に於て見る事が出来たのである。第三十圖、第八、九、此型の民家に一般に適用されてゐる説明では、木材のあり餘る程ある土地に一般に出来るもので、然も寒い地帯に現はれる木造建築であるとされてゐるが、この朝鮮での例に於て、この説明にもう少し繼ぎ足して置かなければならぬことを感ずるのである。

之等の民家は板葺屋根の軒の出の比較的大きい石置屋根であることに於ては、一般の高山地



(郡津長道南鏡成) 面断及取間の家民の造太丸 圖二十第



(郡津長道南鏡成) 置物の造太丸 圖三十第

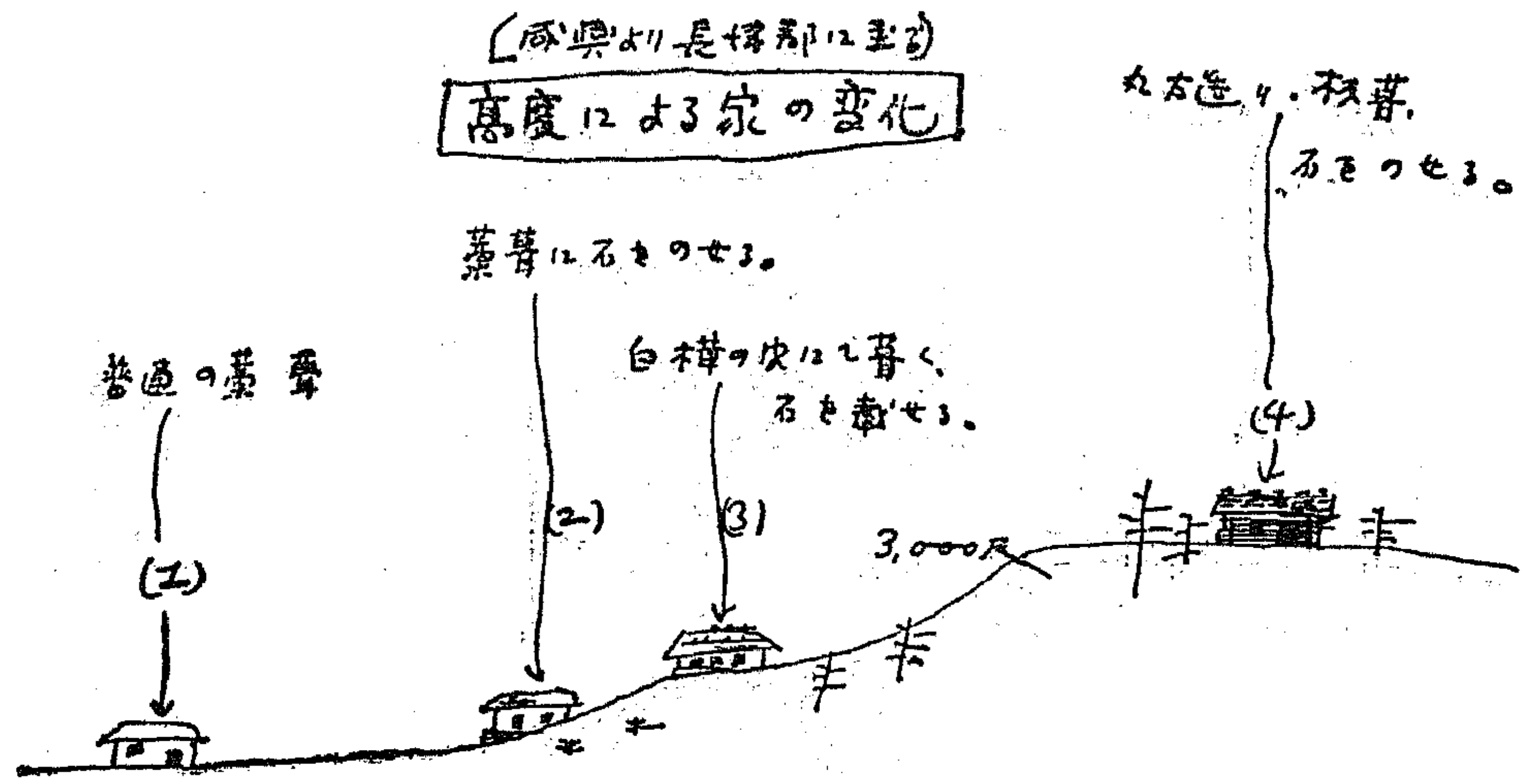
の多いことである。この事實は恐らく、一般の高山地帯の型のものには現はれにくい事だと想像したい。而してもつと、大陸的の氣候をもつた乾燥地の寒い土地に適應さして作つた家の系統が作用してはるまいかと思ひたいのである。シベリア地方の丸太造りの家に泥塗りのものがある。で、私は假りにこの地方の家々を純高山地帯の型のものとなせず、高山地帯の型と、

帯のもの
と區別を
立てられ
ないので
あるが、
こゝで注
意しなけ
ればなら
ぬのは、
丸太造の
壁の上に
泥を塗つ
てゐるも

寒帯地帯の型との合の子の家と考へて置きたいと思ふ。

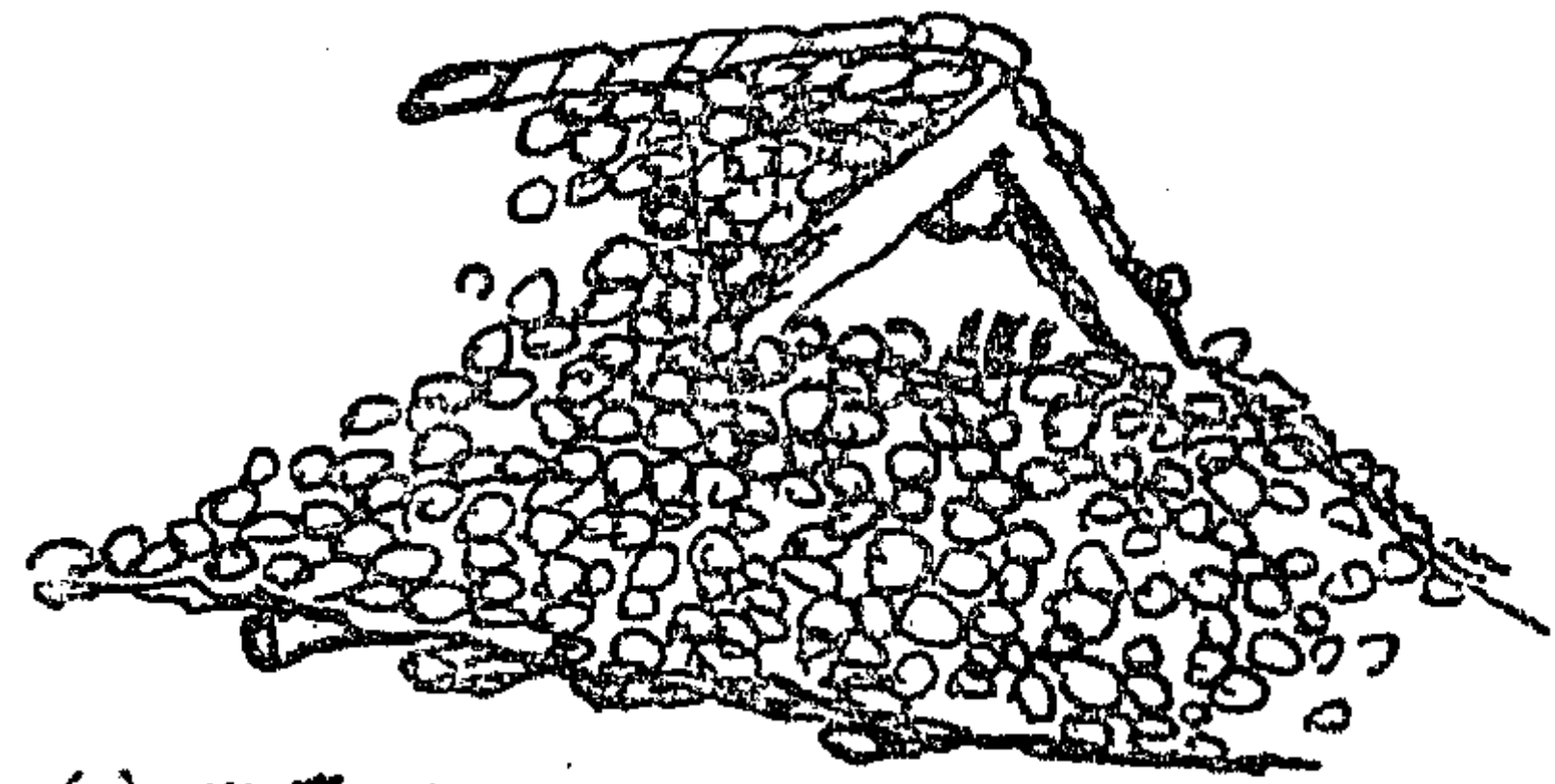
一般の朝鮮型の家々の並ぶ平野地から、漸次に第十四圖の如き順序を追ふて、かゝる丸太造りの建てられてゐる地方に達するのであるが、普通の朝鮮型の家のあるところから、山の傾斜を上りたる個所に白樺の皮葺の屋根の地帯が現はれてゐる。それらはまだ勿論普通の土壁である。而して白樺の皮葺の屋根には殆んど屋根根面が見えぬ程小石を載せられてゐる。第五圖から丸太造りまでの高度の差によりて起る家の變化の色々の經過に就いてはこの類の他の實例の研究をもつて起る家の變化の色々の經過に就いては力がない。

第十圖



この地方の丸太造りの家屋は既に關野博士によつても紹介せられてゐる。(註¹) 同地方は丁度我が北海道に比敵する有名な馬鈴薯と燕麥の産地で、氣候もそれに類似してゐるものと思へる。圖版第九の寫眞は同じく同附近の丸太造りの家であるが、家とその建つてゐる環境との關係を見るのに興味があるから揚げたのである。山の木が伐られて、それらでそこに建てる家の壁

體が組み立てられたと想像出来る。家の周圍には伐られた木の切り株が數多く見えてゐる。或は外の用途の爲に伐りたをした跡かも知れないが、兎に角、生えて居る樹木を必要に應じて勝手に伐り取つてゐる狀況の一斑が窺えるだらうと思ふ。朝鮮には現在尙、火田民と稱する移動して農業を營んで歩く原始的な特殊な種類に屬す



(か地青地) 葺屋の鼻の帯白

圖 五 十 第

煙出しの特殊なことである。丸太をくりぬいたのが家の側に煙出しと

それからもう一つ、此地方の家の事で言つて置きたいのは、温突の

た。星の形のものに、たし名残りだ。考へられた。跡

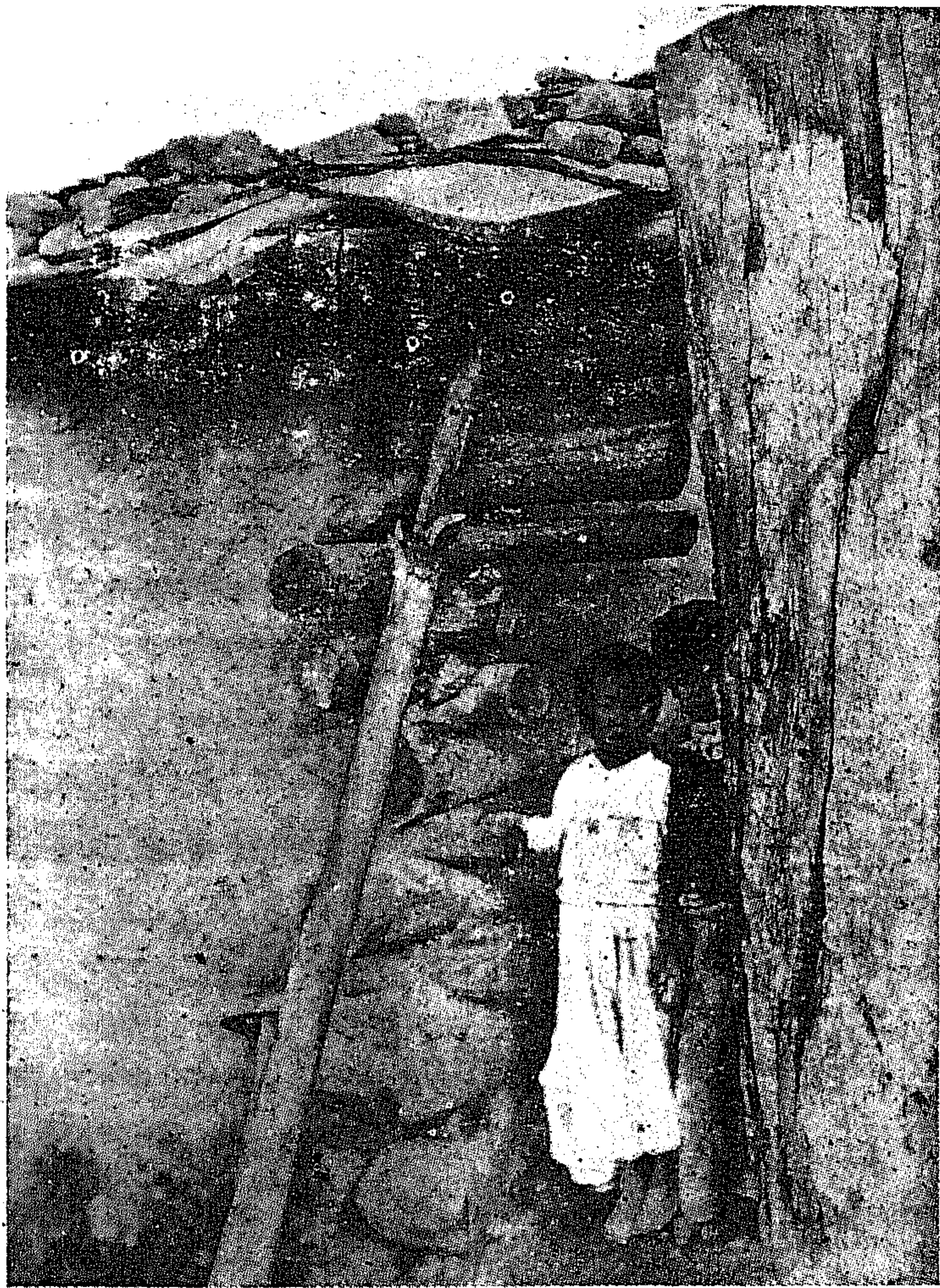
な。作てある。場合、少量の思ふ。土丸太造りの家の場合など、土地は火々々民の最も多い土

さ。う。で。あ。ら。う。じ。而。し。發。達。し。た。部。屋。の。久。家。的。乃。至。小。舎。が。私。の。頭。に。浮。ん。だ。さ。う。で。あ。る。温。突。が。丸。太。

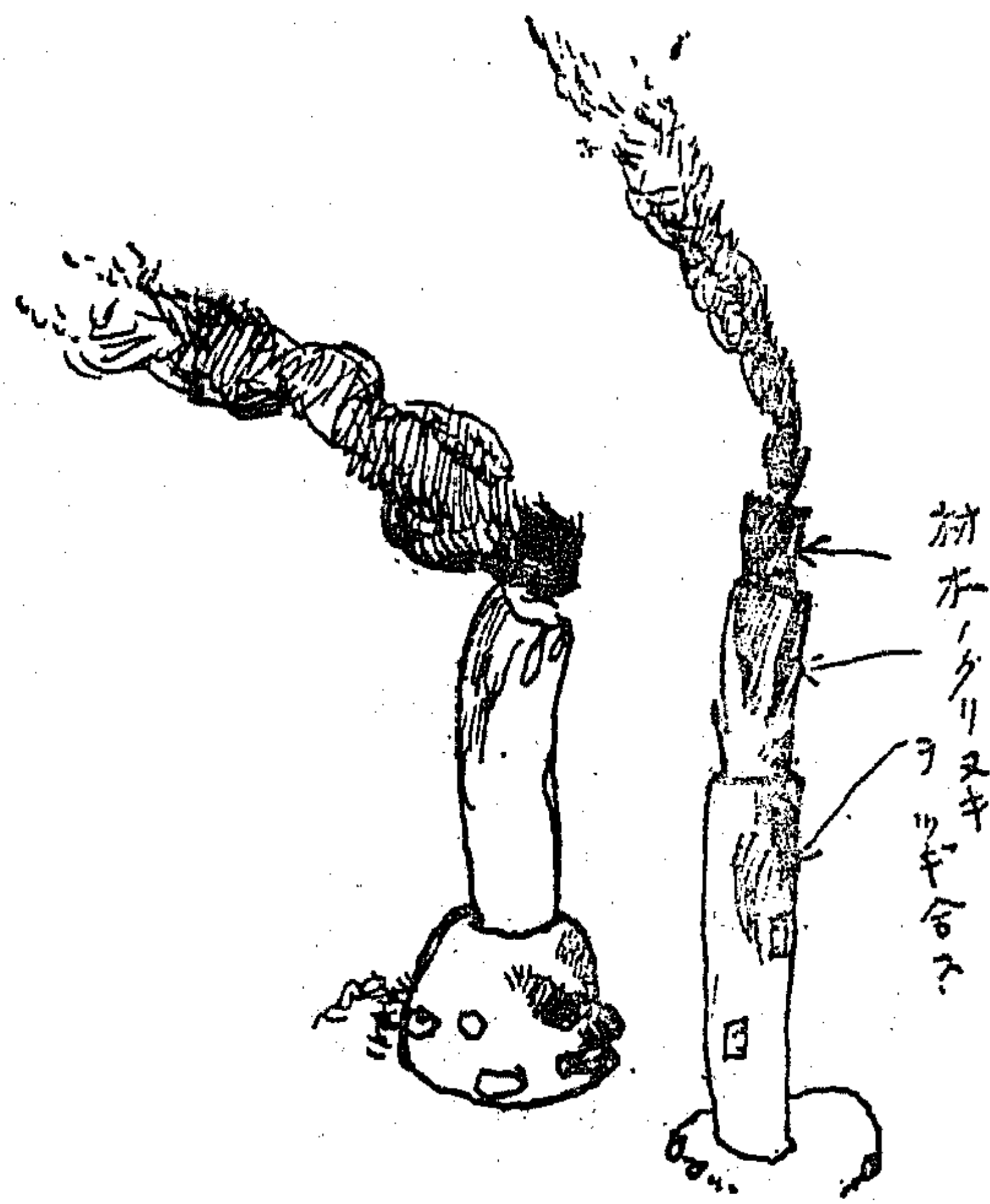
得。ら。ふ。や。な。か。つ。た。法。を。話。さ。で。つ。聞。い。た。さ。人。達。の。想。像。が。テ。ン。ト。の。家。を。私。は。見。る。機。會。を

云。ら。ぬ。な。か。つ。た。法。を。話。さ。で。つ。聞。い。た。さ。人。達。の。想。像。が。テ。ン。ト。の。家。を。私。は。見。る。機。會。を

し。る。數。人。達。が。こ。の。耕。作。し。か。ら。山。の。へ。地。が。た。り。歩。き。或。個。所。の。山。林。を。焼。き。而。し。て。ま。た。は。ぞ。じ。め。を。煙。さ



隅の家の造丸太 圖六十第



突煙たいぬりくを丸太 圖七十第

して立つて居る。時によつては棟よりも高く、そんなのが突立つてゐる。

六圖の子供のそれか、くれの二三を太い木は煙出しである。
第七圖はそれの二三をスケッチしたものである。

泥の家

北の方の寒い地方の特殊な構造の家^六に就いてはこれ位に止めておいて、南の方の全州附近で私の見た泥の家のはなしにうつる。

朝鮮には木が少ない。言ふのをわすれてゐたが實際朝鮮の一般の山には林らしい林を見ることが出来ない。その理由は色々敷へ上げられてゐる。——朝鮮の人達は冬温突を焚くので、その焚物に困難する。草でも、草の根をまでもとつて来て焚物の足しにするからだ。 第一章 第三節 参照

また朝鮮には在來山の所有關係がぼんやりしてゐたが爲に、どこからでも樹木を勝手に伐り採つていゝ事になつてゐたが爲に、植林をし保護することをしなかつたからだ。又、朝鮮の土地には元來木が餘り生育しないからだ等と云はれてゐる。——そのうちで最も大きい原因は、第二のどこに生えてゐる木でも伐り取れる習慣になつてゐることに基いてゐると考へられる。亂棒な状態を山地を歩いてゐるとよく見ることがある。折角植林をした松のほんの若木の眞上から、朝鮮の人達が切り出した悲惨な跡をよく見る。日露戦役以後、道路沿ひにポプラを植付けたのが、到るところ現在の朝鮮の風景の特色となつてゐるのであるが、それらのポプラをも幹の眞中から切り取つてゐるのを屢々見る。そう云ふ習慣が昔からあつたのだからたまらない、到底、樹木が大きく育つ事がゆるされなかつたのであらう。兎に角、朝鮮の山は大部分禿山ばかりで、木材をとつて來る山林に缺けて居る。漢江の上流其他に森林地帯があるさうだが私はそれらの地方を見ることが出来なかつた。

平野地の眞中と來たらたまらない。柱にする木も得られない。普通の村落には多少屋敷のう

ちに樹木を見られるけれど、その殆んど見られない所もある。小農などは、木を買ふと云ふ力もないから、そこで土ばかりの家が作られることとなる。勿論朝鮮の土の家は滿洲方面のとは違つて、屋根は普通の朝鮮式のものが架けられてゐる。圖版第一〇はその構土を練つて丁度鐵筋コンクリートの家を作る場合のやうに、一尺位づゝの高さに積み上げ、それが乾いて固まるのをまつて、その上へ上へと積上げて行くのである。而して壁の高さが完成した時に、小さい木材の梁を渡して屋根を作るのである。

所によつては、手で持ち上げ得らるゝたけの大きさの團子の土塊を作り、それを積み上げて壁體を作つてゐる所もある。それらをば、極く簡単な日乾し煉瓦と云へるかも知れない。

木を得ることの困難な朝鮮の田舎では、概して貧乏人程、土を利用して家を作らねばならなくなる。その面白い例を私が見たのは金泉の町で、圖版第一一はその町の模型圖である。金泉の町は此頃細工物を賣り出す町として榮えて來てゐる。それで急にそこに集まつて來た人達が自分達の住む家を作らなければならぬ。ところが金泉は古くからの町なので、山にかこまれて、高臺には物見臺などの備はつた町であるのだから、家を作る土地の餘裕がない。それで自然、墓場ばかり置かれてあつた山々へ、然も急勾配の、匍つて登らなければならぬやうな山々へ、それらの新移住者達が家を建てる事をはじめたのである。ところが家を建てるのに木も思ふやうに買へない。だが平氣で、山の土を掘つて、小さい敷地の地ならしをし、その土の一部で家の壁を築き上げ、また隣りとの境の塀をも作り上げてゐる。それらが順次に山の上へ上へと建てられてゐるがら、下の町の通りから望むと、見事な住居の陳列が出來てるやうで、實に研究をする

上からは、尊重していい特例の標本が出来てゐるのである。圖版第一〇、一一、一二はそれ。

以上、一般の朝鮮型の家の外に朝鮮に於て見らるゝ、丸太造りの家と、泥の家とのはなしをかいて、日本内地には見られない特例があることの紹介をし、色々の考察への参考資料として提出して置く。かゝる家が見られることは、日本内地よりも、氣候、自然及生活をしてゐる人達の氣風その他が、より大陸的である事から來てゐると考へられやう。

石盤葺屋
根

尙、屋根の特殊なものとしては石盤葺のものがある。それらを平壤に於て私は見ることが出來たのであるが、尙、陽徳、徳川、成川等にもそれらが行はれてゐるさうである。村上唯吉氏編朝鮮人の衣食住に平壤附近で見たものは、極めて不整形の石板でやつてあり、普通瓦葺よりも下等なものとせられてゐた。(註²)

(註¹) 工學博士關野貞氏「朝鮮の住宅」〔建築世界社編「住宅」〕参照
(註²) 民家の地理的分類に就いては、大矢信雄氏「建築の地理學的考察」〔早稻田建築學報〕第二號〕参照。

第三節 温突

朝鮮の家屋と云へば、温突と直ぐ考へる程、温突と朝鮮の住家とは關係の離るべからざる者となつてゐる。それは煖房設備の不完全な所謂海洋系の民家をもつてゐる日本内地人にとつては、當然興味を持つべきこと、研究慾をそゝられること、批評してみなければならぬところの事項である。

温突とは何か

朝鮮の民家では、日本内地の疊の部屋に相當する部屋々々は全部温突式になつてゐて、部屋そのものをも温突と呼んでゐる。温突と云ふのは床の下一面に火の煙がまわる仕組みになつてゐる部屋の事であり、またさう云ふ風になつてゐる部屋の煖房設備の名前の事でもある。

温突の構造

温突を作るには、はじめ家を建てる時、床下を掘つて、幾本も溝を堀り込み、その上に二、三寸の厚さの板石を載せ、一方に焚口を設け、一方に煙の吐け口を作り置き、焚口の個所で燃やした火の熱氣を、板石に全部吸ひ取らしてしまつて、煙だけを家の外壁にもうけた煙出しから吐き出さするやうに作るのである。それで板石の上をば、坐はるところの床の面となすのである。下流の家では、泥塗りの上をぢかに床とし、それにアンペラを敷いて住まつてゐる。

尙詳しいそれらの構造は、第八圖のやうに煙道となる溝の配置を床下全體に作り、受石をならべ、その上に板石或は蓋石を置き、その上に土を塗るのであるが、特に土の中には一般に馬糞を洗滌して干したものを混へる事になつてゐる。而して土を塗つて、下から火を焚き付け、しつかりそれが乾いてから、更らに仕上げの土を塗り、それが乾いてから、更らに數度の手敷を

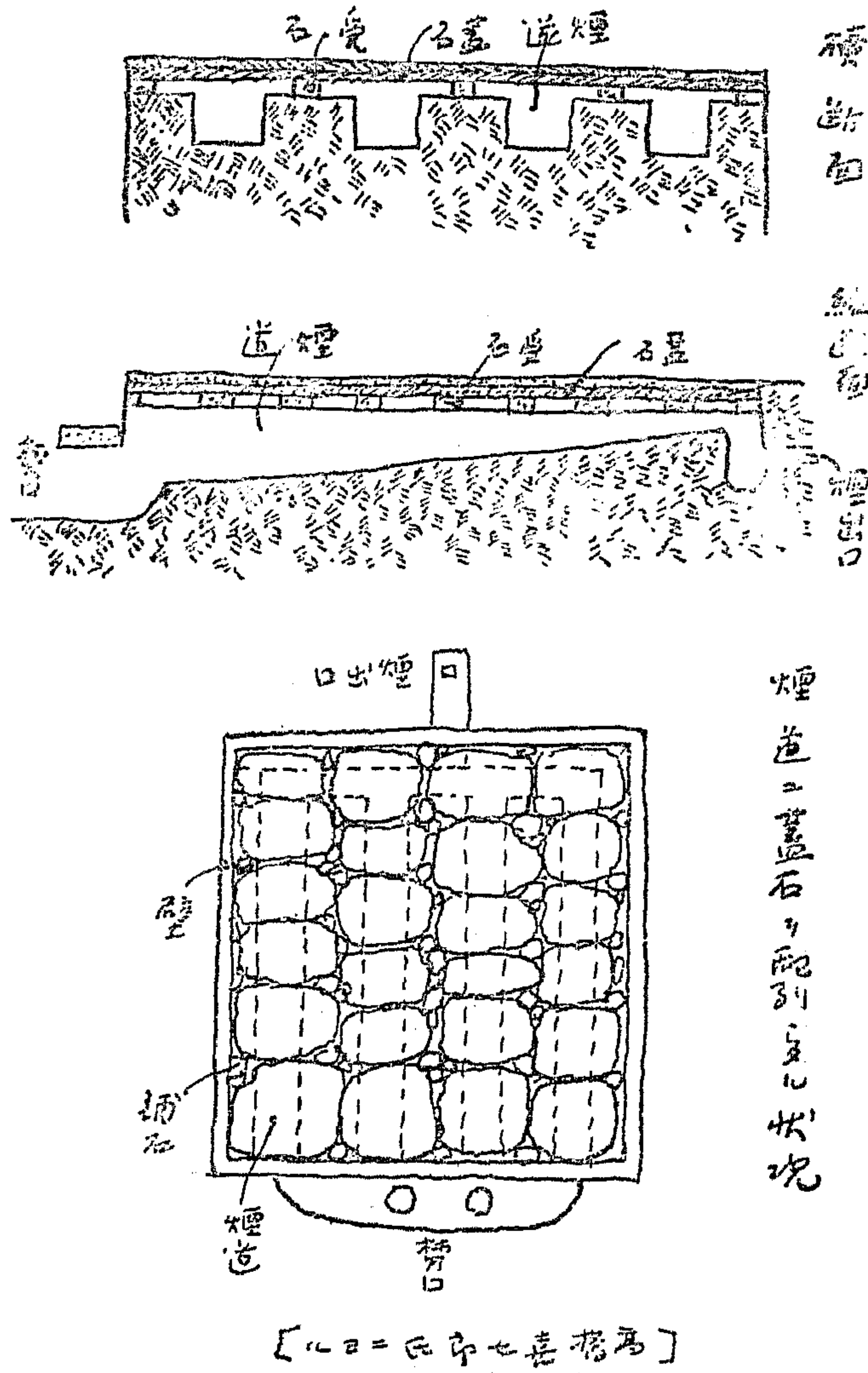
温突の内
部

かけて仕上げの油紙を貼るのである。(註1)

温突の部屋は實に一種異様な坐はり心地のするものである。周圍の壁も、天井も總て保温と

横断面
縦断面

床
天井、出
入口、窓
及建具



煙道ニ蓋石ヲ配列スル状況

[此口ニ石即七喜格馬]

造構の突温 圖八十第

云ふ事からのみ注意されてゐるから外氣を絶つ様に目張りをしたかたち
に泥や紙で仕上げられてゐる。良く貼られた床の油紙は、實に太鼓の革のやうに堅くて平盤になつてゐる。
而して油紙の床は普通に雑巾掛けをして掃除せられるから、黄色く美しく光つゐるのである。

天井は普通張られない場合が多い
小屋裏が露はれてゐて、棟木と椽と

が、丁度肋骨のやうに頭の上一面に懸かつて、泥や紙で装はれてゐる様は、見慣れない者には不思議に感ぜられ、美しいと思はしむるのである。而して部屋の標準の大きさは七尺乃至八尺角で、それに窓も小さく、出入口も極く小さく、そして部屋に出入りするには五六寸、出入口の下端をとび越えなければならなくなつてゐる。場合によつては一尺二三寸もとび越えなければならぬことがある。而して小型な紙障子が肘金物で開閉するやうになつてゐる、それをパターンと閉ぢて掛金を下ろす仕掛けで、恰も船室での水の防備のやうに、外氣の侵入の防備に苦心し

て形成せられてゐる。だからその中に入ると實際不思議な氣がする。空想的な世界に居るやうな氣持がしてしまふのである。窓は皆外開きの廻し障子で、上流の家では、二重の障子が工夫されてゐるが、内側のものは日本内地の障子のやうに引込み式になつてゐる。また極くぞんざいな小窓などでは、蔀戸式に上の方へ棒で差し上げておくものもある。建具は普通出來合で、市場に賣つてゐる。一つの部屋を、温突一間りつかんと稱し、その大きさは總ての朝鮮家屋の間取りの單位になつてゐ、温突何間かんの家と云ふ風に呼んで家の大きさを量る習慣になつてゐる。部屋は場合によつては二室うちぬきにして使つてゐることがある。が、大抵はこれらの一室づゝは獨立して完全なブライベーションが保たれるやうになつてゐ、主人の間も、夫人の間も、接客室も、雇員の居る室も、人の寢る場所、坐はつてゐる場所は總てさうなつてゐる。第二章第一節參照

焚口

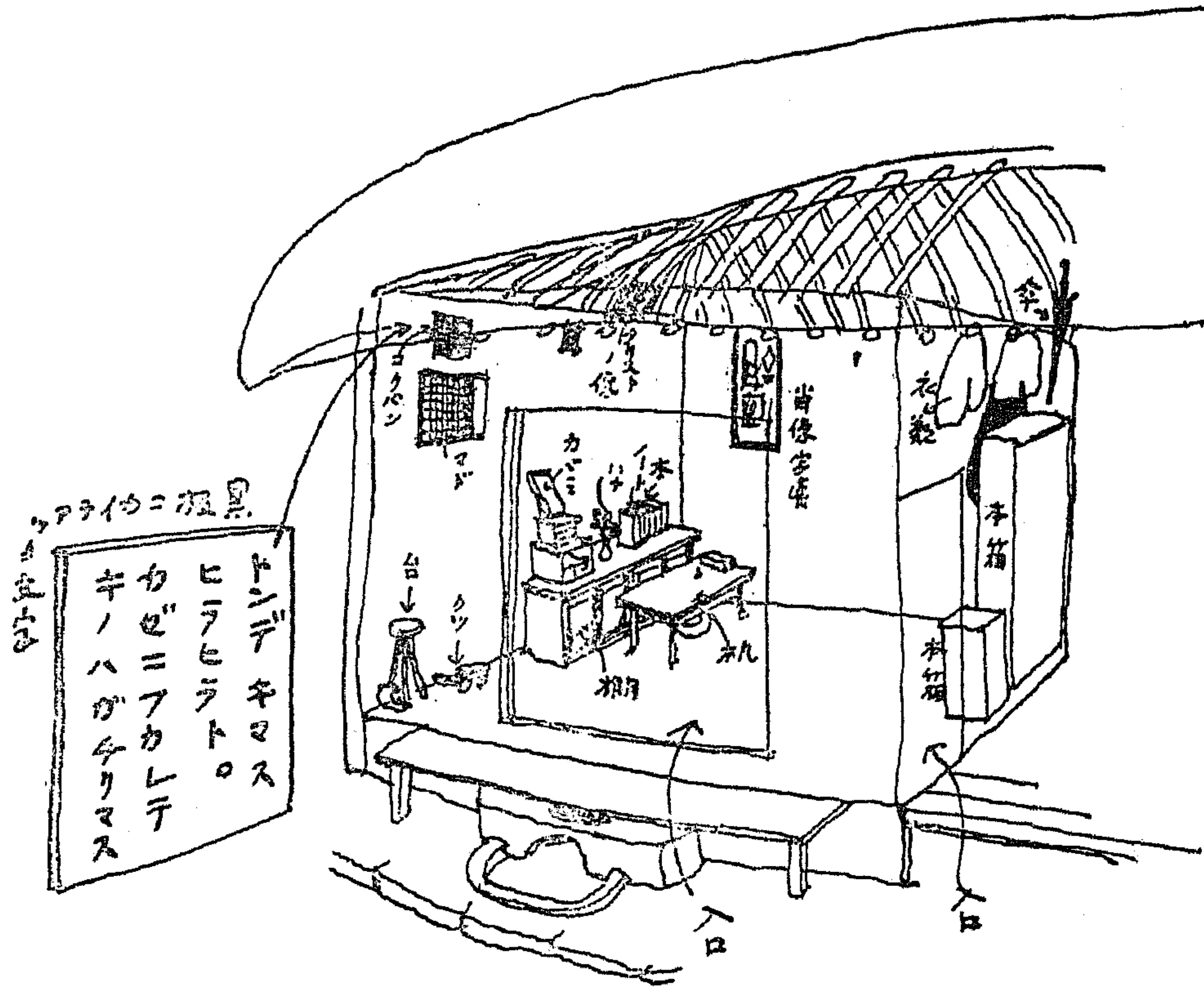
それらの部屋々々を暖めるのには、個々の部屋々々に別々に設けられてゐる焚口から火を焚くのである。場合により、二室位は共通に暖められるやうになつてゐるのがあるが、普通は一室づゝに焚口が獨立して設けられてゐる。第十九圖は可愛らしい一つの部屋のスケッチであるが——實にこのスケッチは慈んで見てもらわなければならぬ。——これでは入口の小椽の下に焚口が装はれてゐるのが見える。

暑熱と温突

臺所に近い部屋では、こゝには多く内房と云ふ部屋になるが(第二章第一節參照) 食事の調理のとき焚いた煙が直ぐ部屋の下を廻るやうになり。調理の度毎に暖るのが普通である。さうなつて居る部屋は夏の暑いときでも、床下に火氣がまわるから實にたまらない。間敷の少ない小さい家ではどうしてもさうなるから、夏は、戸外で寢る習慣が、都會でもさうだが、特に田舎では一般に行はれてゐる。田

温突の興
へる心理
的生理的
影響

舎の部落には大抵どこでも、よく枝の茂つた樹木が部落の所々に立つてゐるが、その下で、朝
方まで、土の上に直かに眠ることを朝鮮の人達がやつてゐる。朝鮮の人達の家は冬向きに出来



第十圖 温突の内部(子供室)

極く安んずる居心地がするだらうと想像出来るのである。

朝鮮民族は卑屈だと言はれてゐる。活氣に缺けてゐると言はれてゐる。理屈ばかり言つて働

くことをきらいな人達だと言はれてゐる。而してさう云ふことが總べて朝鮮の温突から來てゐるとも一般に言はれてゐるところである。どう言ふ影響が、生理的乃至心理的に、この恵み深き部屋が、これを所有してゐる民族に作用を與へつゝあるか。それを考へてみ、檢べてみなければならぬ事であらう。それは實に多方面に亘る調査事となる。而して朝鮮の家屋の調査としては最も中心的な問題としなければならぬところであらう。それに就いては色々な専門家の研究の調べに就いて聽いてみなければならぬのである。

私は京城の醫學専門學校で、温突の事を調べてゐる、衛生學の研究室に訊しに行つた。そこでは温突と健康状態との關係に就いていくらかを知るを得た。それに由ると、部屋の中の保温と云ふ事にかけては、實に理想的な結果を得てゐるさうだ。晩の食事のときと、それから寢就く前に一度適當な分量の焚物を與へて置くと、酷寒の季節でも、翌朝まで殆んど變化のないと云つていゝ六十度内外の熱度を保たし得るのださうである。(註²⁾ そこでたゞ換氣の全然ないと云つていゝ事が問題だが、つまり四百立方尺乃至五百立方尺の空間の中に閉ぢ込められてゐてそこにある人の呼吸による炭酸瓦斯の人體に及ぼす關係が考へらるべきだが、それを調べるのは中々困難である。でもかう云ふ事だけは明かに言つておく事が出來ると云ふのである。日本内地の家屋に於て、普通に室内を暖める方法なる、炭火をおこすことに比べると、炭火によつて、夜のあけ方まで不變の定溫度を外氣に對して保たせやうとした場合の室内の空氣の悪化の事から考へると、即ち炭火によつて作られる瓦斯體は人の體から出る何倍もの有害分子が含まれてゐるから、その人體に及ぼす影響が大變なものだと推定出來るのださうであるが、そ

れに比べると、温突に於ては、純粹に人の吐き出す瓦斯ばかりであり、その瓦斯は一般の豫想程人體への影響の程度の大きいものでないのだと専門的に考へられてゐるのだから、大した害はあるまいと考へられるのださうである。尙一般の朝鮮の人の健康と云ふ問題は食物その他にも關係することであつて、温突のみとの交渉でないのだから、結論を得るのは色々精細な研究を積みねばならぬと云ふ事であつた。而してこれらの研究は未だやりつゝある中途だと云ふので、詳しい事を得られなかつたのであつたが、これだけの着實な結果がきけただけでも、私は嬉しく思はずにはゐられなかつたのである。幾く多方面からの研究を聞いても、温突の問題は謎として残るやうな氣がしてゐるからである。朝鮮の民族心理の立ち入つた研究のやられてゐるのを私はまだきかない。朝鮮の家屋と朝鮮民族の心理の研究項目は、恐らく何人の研究者の腹案のうちにも入つてをらぬだらうと、想像してをる。それ等の方面の忠實な研究をもたないと、一片の感想に流れるばかりだから、私はそれに就いては此處で立ち入るのを止めなければならぬ。

焚物の問題

温突に關する經濟的方面、即ちその焚物の研究に就いては實に貴重な調査が最近發表せられてゐる。それは朝鮮總督府林業試験場の高橋氏の調査で、(註)氏の調査は家屋全般の事にも互つてゐる。が、温突の構造と焚物に就いての項は主要な部分で、それらに就いてはこれ以上徹底して考へる事はあるまいと思はれる位、総合的な調べをやつてくれたのである。朝鮮の當局もこの問題に關しては熱誠を盡してをる事が氏の引用してある事項々々によつて窺はれる。焚物としては薪、枝、葉、雜草、農作物の殻が主要なものとして擧げられてゐる。雜草を焚

物とすることは日本内地の人達には不思議なことに思へるであらう。實にその採取に就いては同氏によりかう云はれてゐる。「雑草の採取は秋季より翌春まで行はれ、其の繁つてゐる所を鎌で刈取るのであるが、年々濫採して生長の不良なる箇所や芝地に於ては熊手を以て地被を掻き集めて採取するが爲めに、次第に地被を破壊して土地の崩壊を誘致することが多い。之れは林野の荒廢してゐる南鮮地方に特に甚だしく、予は旅行中に彼等土民の一隊數十名が擔具を肩に熊手を持つて山へ山へと進撃する目醒ましい光景を屢々目撃した、夕刻彼等は芝草を山積して意氣揚々と歸路に就くのである、斯く秋より春までこの掠奪を繼續するのであるから、山は次第々々に外衣を剝奪せられ、遂に山骨のみを残すに至るのである、實に恐るべきものは地軸の搔探である。」と、實に驚くべき光景が想像に浮んで来る。朝鮮の人達を導く爲めに、朝鮮の國土を救ふ爲めに、全土に互つて活動してをる忠實な農業の技術者達、林業の技術者達は、私が旅行してをる間、何處の野に於ても見られ、その人達に對しては敬服してをつたのである。それらの忠實な人々の間からは、上の如き眞實な言葉が生れて来るのは不思議ではない。而して私はこゝに、建築家達に言つて置きたく思ふ事がある。朝鮮にゐる建築家で本當に朝鮮の民衆の爲めに働いてゐる人を數える事の出来なかつたことを私は残念なことだと言つて置きたく思ふ。而してそれはもつと一般に日本内地に於ける建築家達にとつても反省して見る價值のある事柄だと言つて置きたく思ふ。

尙、焚物の分量は、大體一戸一年に就き平均約二千貫費されると稱せられてゐる。日本内地特に北海道東北地方に於ける一戸平均の焚物の消費量を紹介することが出来ないが、しばらく

朝鮮の事だけでも擧げて置かふと思ふのである。而してそれに對して節約の方法は同氏により色々提案されてゐる。

大仕掛けな設備をして、乃至費用を幾倍にもして、完全な煖房設備をすることが出来るだろうが、朝鮮の家に見る如き、如何なる階級の人々にも大きな恩恵を與へると云ふことは、どう考へても不可能の事と思はなければなるまい。實際朝鮮の人達から溫突を取り去ると云ふことは不可能の事であると感ぜられる。

溫突と並べて考へて置かねばならぬことは、寢具の事であるが、朝鮮の人達の寢具は頗る簡單なもので、下流社會に於ては、殆んどないと云つていゝ状態で、單に白い布の一卷が備へられてゐるに過ぎない。夜はそれにくるまつて、溫突の中に眠るのである。上流の家でも極めて薄い蒲團が備へられてゐるに過ぎない。日本内地に於て、不便な山間の村などで、よく聞くところによれば、昔時蒲團を作る綿の得難かつた時代には、爐に焚火して、その周圍に寝る習慣だつたのが、近來蒲團を用意することが多くなつた爲めに、大變薪の經濟が出来るのだと云ふはなしであるが、朝鮮に於ても、寢具を今少し十分にすることによつて、焚物の經濟が出来るべき事だらうと思はれたのである。第三章 第二節 參照

溫突の起
源に就いて

最後に考へて置きたい問題は、いつ頃から朝鮮に溫突が行はれ、又、それは何處から輸入せられたものか、或は朝鮮に於て發明せられたものかと云ふ事に就いてである。

「今を距ること二百七十年前、肅宗大王の世領議政金子點の始むる所である」と村上唯吉氏編「朝鮮人の衣食住」(註⁴)と云ふ本に記されてゐる。文献をしらべる力のない私は、今の所其れ以上

の文献上の手がかりをもたないが、或はうさかとも自分だけでは考へてゐる。然しさうだとするもそれは宮廷に於て、或は大邸宅に於て採用した年代であつて、恐らく一般民衆の間には、それ以前に必要にせまられて既に用ひられてゐたものと考へたい。然し私はどうしても朝鮮の文物が、日本へ旺んに輸入せられた時代に、それは朝鮮にあつたものとは考へたくない。第二章第三節 第三章参照日本に於ける疊の發達と並べて考へると、興味のあることであるが、その發達は餘り古くなく而して日本のそれは上流の邸宅に於て行はれ、漸時に一般民衆の家にも擴まつたのであるが、朝鮮のそれは民衆の家にはじめ起つて、それを或る時代に上流邸宅で取り入れたものではないかと考へられるのである。朝鮮に於ては如何なるプリミチーブな家でも溫突式になつてゐないものがない。日本に於てはプリミチーブな家では疊をもつてゐないのである。而して日本のプリミチーブな家には、プリミチーブな家程爐が重要な役をなして居る。實に日本の爐と朝鮮の溫突とは並べて考へらるべき性質のものである。私の見た最も簡単な家はかうであつた、それは支那の苦力達の作つてゐたものであつたが、兎に角朝鮮に於て見た最も簡単なものである、勿論乞食の家を私に見たが、それは土へ穴を掘つて、たい簡單に屋根を架けてゐた。野原に穴が掘られ、その上に極くぞんざいに石や泥が掩はれて、それを床としてその上に天幕の様な屋根がかぶせられてあつた。而して漸く匍つて入れる位の隙しか床と屋根の間がない、そこへもぐり込んで、下の穴の中に火を焚付けて夜寝るらしいのである。それからまた、前にも言つた方々移動して歩く火田民と云ふ家の話を聞いた時にも、ほど同様な作り方だと言はれてゐた、つまり、寢床の部分は下から火を焚くやうになつてゐる式のものである。貧乏人になれはなる程、防寒の設備を必要とするのであるが、朝

鮮の貧乏人は皆温突式の防寒設備をその家にもつてゐる。そしてその構造は頗る手輕に出來てゐる。これだけの考へを私は述べて置いて、貴族が發明したものか、また貧乏人が始めたものかと云ふことをば尙考へる問題として残して置く。

煖房設備の發達工夫の事に就いてもう少し考へて見て置かねばならぬ。床下に熱い空氣をまはす煖房の工夫は、既に古く古代羅馬人が行つたことであり、そしてまた羅馬人は北歐に於てもそれを作つてゐる。ゲルマニ族の煖房の方法ははじめ現在のプリミチブな種屬の間に見られると同様な、部屋の中に爐を作つた方式のものであつたと研究されて居る。而して一般北歐諸國に於ては、それが漸次に部屋の壁側にもつて行かれて、普通の煖房装置となつたと見られてゐる。だがこのプリミチブな火氣に直接に温まる爐つまり火と同じ部屋の中に同居する方法から、一方に於てペチカの發達も起つたと想像出來る。而してそれが、獨逸、露西亞、シベリア地方に擴まつて來たと考へて見ることが出來る。いや兎に角ペチカは、普通の爐より發達したものとして、それらの各地に見られてゐると言ふことが出來る。尙露西亞の下層社會の住屋に於て既にペチカの上に寝るやうになつてゐる式のものがあることも知られてゐる。而して滿洲に於ては、家の部屋の一部分を炕即ち温突となしてゐる。而して朝鮮に於ては、殆ど全部の部屋々々を温突としてゐるのである。而して海を越えた我日本内地に於ては、最もプリミチブな採煖方法なる普通の爐が一般に行はれてゐるのである。

私は上に澤山の事實を連れ、並べて擧げたのであるが、これらの事實から次のやうに考へてみる事は、そんなに無理な事ではないと考へてもらへるであらう。即ち——(一)最も單純な直接

火氣に温まる煙突のない普通の爐から、(二)それを壁側にもつて行つて、壁に穴をあけ、またい
くらか工夫をして煙突の初歩のものを創り出したもの、(三)而してそれが現在の歐州の普通の煖
爐へと發達したものの、(四)煙突の初歩のものが創られた(二)が、更らに補壁の附け加へを多くされ
てペチカ乃至初歩の温突へ發達したものの、及(五)ペチカ乃至初歩の温突が、部屋と密接な關係を
保つて完全な温突の形をなしたもの——以上のやうに分類して、更らに工藝學的に考察を進め
て行く足場とすることが出來ると考へられるであらう。

而して更らに、それらの分布に就いての事に再び考へをもどして見る時は、それら各々の地
方のもの總ては各々孤立的に發達したものと云ひ切る勇氣がなくなるであらう。それら各々の地
交渉はどの點まであるか、各々の發達の年代はどうなつてあるか、またどの點まで各々の地方
はこれらの各種のものを固有に發達し得べき條件を備へてあるか、等の精細な困難な調査が伴
つて來ないと決定することの出來ない問題となる。で、假りに私は朝鮮の温突に就いては次ぎ
のやうな推定を提出して、こんがらかつたこれらの考へ事の結尾としてをきたい。

朝鮮の下層民は想像以上に移動性をもつてゐると云ふ事が、各種の調査に於て言はれてゐる
ところである。而してそれらの人達の住家は前にも述べた様に頗る簡単な家々で、然も、温突
をもつて居る。特にそれらは朝鮮の北部地方に於て多く見られるのである。尙、滿洲からもそ
れらの移動民は來、また滿洲へと出掛けて行くそれらもある。家財道具の頗る簡単な事、夜間
も平氣で旅行を續ける習慣であるなど、云ふ事實を考へると、それらの人達の媒介で朝鮮の温
突の種子が移植されたのぢやないかと考へて見たくなるのである。それから、朝鮮に於て最も

發達した十分な意味の温突の見らるゝのはどうしてかと云ふと、支那では、椅子式の形式であるが、朝鮮は坐式の形式をとつてゐるが爲に、さうなつたんだと考へていゝやであるう。

而して、日本内地には温突が少しも現在までは輸入されてゐない。その事はどう考へるべきであるか、それも他の問題としてのことつて來る。第二章第三節参照

最近に於て、我が内地に於ても、北海道その他に、實地に温突の作られた話を聞くが、未だそれらは試み中に屬するものと考へなければならぬもののやうである。或は内地は濕氣の多い爲め失敗に終ると云ふ話を聞てゐる。又仕事が難かしいからだとも聞いてゐる。果してどんなものであるか、まだまだ研究を積まなければならぬ事と思ふ。

温突に就いては考へなければならぬ事が實に澤山ある。謎の温突を謎のままに私はこゝに残して置く事にする。

(註₁) 林業試験所技手高橋喜七郎「温突の築き方と燃料」大正十二年四月朝鮮總督府参照。

(註₂) 焚き付けて温まり、また冷める時間の關係は圖表によつて高橋氏の調査にも出て居る。

(註₃) 註₁に同じ。

(註₄) 朝鮮總督府囑托村上唯吉氏「朝鮮の衣食住」大正五年七月

第二章 間取及それに就いての考察

第一節 一般型と北部型

間取構成
に影響す
る二由因
と朝鮮の
間取の二
大分類

私の民家の間取研究にとつてゐる方式では、(一) 家の間取が屋敷の制肘を受けて形成せられたるものと、(二) 家の間取が屋敷の制肘を受けずに獨立して形成せられたるものとの二つに別けて考へることにしてゐる。(註¹)

(一)のものは概して街狀の町乃至部落と密接な關係のあるもので、限られた密接した地割りの宅地の中に建てねはならぬ事から必然に起つたものと考へられる部類のもので、前に構造の地方的觀察の節で述べた民家の世界的系統のうちの所謂舊文化系に屬するものは大體に於て此の部類に屬する。而して(二)の部類に屬するものは屋敷の觀念の稀薄な地方に起るもので、屋敷と云ふものゝない遊牧民の家などは最もその發生的意味を顯著に示したもので、即ち全然屋敷と云ふ觀念に囚はれずに家それ自身が獨立して營まれてゐることから起つた部類のものである。そしてこれに屬するものは北歐その他の系統のものである。

日本内地に於ても、適確にはないが、大體に於てこの二つの部類のものが分布されてゐることが窺へるのである。即ち街狀の部落と散點狀のそれとに現はれてゐる家の間取の相違で、前者は主として關西地方に、後者は主として關東地方に普通であることは衆知の事であると思ふ。又、町屋と農家との相違も、一は宅地の制限から來る必然的な考案の跡を示し、他は家そ

のものがより一個獨立せるものとして宅地の中央に周圍と關係なく營まれたるものである。(註)
朝鮮の民家の觀察と研究とにこの方式を適用すると、もつと劃然とした、恐らくその發生の源を異にしてをると考へねばならぬ所の二つの部類を擧げねばならないのである。その一は京城を中心として、殆んど各地方に見られる型で、即ち朝鮮の一般型と見らるべき部類で、他は朝鮮の北部、殊に日本海岸地方に一般に見らるゝ特殊な型の部類である。前者を私は(一)の部類即ち屋敷の制肘を受けて形成せられたるものと考へ、後者をば(二)の部類即ち獨立して發生した型のものとして考へたく思つてゐる。それらに就いての考察は後の節にゆづり、こゝではそれらの各の形態の記述を先づやつておく。

一般型

(一)の型即ち朝鮮の民家の一般型と見らるべき間取はかうである。

先づ純粹に形態だけを分解的に説明した方がこの型の家に就いての觀念を作り上げてもらうのに都合がいゝ。今假りに四角い宅地が一個あると假定して、その上にある大さの家を朝鮮の人達が建てるのを想像すると、必要な部屋を一個づゝ宅地の縁りに沿うて並べ建て、而していつもそれを必要な數だけに止めて置くと思つて置くといふのである。建てられる部屋の數により、その並置せられたる跡は、宅地の大きさに制肘せられて、一の字型になつたり、L字型になつたり、コ字型になつたり、或は□の字型になつたり、又或は二の字型になつたりするのである。而して、宅地の周圍にはいつも土塀が繞らされるから、いかなる場合でも、部屋の並置された列と塀とで中庭がそれらの懷るに出来ることになる。圖版第一四の間取を集めた圖でこれら而してそれらの家々の實景は圖版第一五に見るが如き有様となるのである。

かゝる家々で擴がれる街全體が形成せられてゐるのである。であるから見晴らし場から眺めると、屋根に取り圍まれた穴が實に多數街に散布せられてゐる状を呈してゐる。而してそれらの穴即ち中庭への入口は通り或は路次に面した建物の一室をくりぬいて作られ、そこが門とせられるのである。

かく純粹に形態として考へた場合の説明は以上の如く極めて簡單に濟む。而してそれらの連ねられた部屋々々の持つ職能も、大體に於て一と部屋宛を使ひたい部屋に使つてゐるのであるが、朝鮮の人達の傳統としてもつてゐる生活は主要な部屋々々の配列の規約をその間にはつきりともつてゐる。重な部屋とは越房と、大廳或は盆と、内房と、而して厨房とで、之れらの用途に就いては後に述べるこれらは普通鈎の手になつて連続して一揃ひになつてゐるのである。四圖版第一而して大廳の部分が南に向いてゐる方角に家全體が置かれるのが普通である。であるから、宅地のどの方角に道路が接してゐるかの關係により、道路より中庭に入り來る開門なる大門の位置はそれらのどの部屋に接近するか普通きまつて來る。而して大門に接する一室を舍廊とし、その他の部屋々々を虛間、置物その他にするのである。

部屋々々の職能

而してそれらの部屋々々の用途は、越房は子供室乃至老人室で、大廳は板の間の廣間とも云ふべき開放的な主として夏使用する部屋で、内房は婦人の部屋で、而して舍廊は應接間である。朝鮮の風習は前にも既に述べた如く、男女の居間の區別が頗る嚴重に分離さるゝことになつてゐて、特に外來者をば絶対に内房を覗かしめぬやうにしてゐるのであるが、その爲めに外房と稱する別棟を設置することがある。その場合には婦人達の居る方の棟を之に對して内房と總

稱してゐる。

下層民の
家の間取

極く單純な田舎の家などでは、然しかゝる形式を守ることが不能で、單に臺所と溫突一室とのみのものが一棟建てられてゐるに過ぎないものも多い、又溫突室が二個或は三個並置せられてゐるのみのものなどもある。また普通の下層の人々の家では勿論一般の形式を守る譯に行かない。田舎では舍廊のあるのは中産階級以上殊に地主の家の特徴と言つてよい。

上流邸宅
の間取の
特徴

中流以上、上流の邸宅では際立つて内房と外房とを區別することが嚴格にされてゐる。屋敷内に其れ等を全く別棟に建て、其れ等の各々を更らに塀及廻廊狀の長屋で取圍み、僅かに簡単な廊下で互ひに接續さしてをるに過ぎないものもある。一圖 第六而してかゝる廻廊狀の長屋は一間毎に間仕切りが施されて、下人室及庫に充てられてゐる。また庭は外庭と内庭とに別かたれたりに外客の爲めに粧はれて作られたる邸宅にては、外庭をば植木鉢の並列で堂々と飾つてゐるのも見られたのである。

而して之等の邸宅の間取を通觀して感ずる事は、規劃を好む大陸支那の方式よりも、より日本内地の古來からの方式に近かいと云ふ事である。而して更らに京城昌德宮の祕園を散策して何人も感銘をうけるであらう、あの自然の懷るにあけつばなしのまゝ放任し、任せ切りにして少しも装つた風のなない一種の寂しい配置を作つてゐるのと一致してゐる事を思ふであらう。而してこれらから、如何に朝鮮民族の自然に對する心が素直であり、故意な整頓を嫌ひ、計劃せない偶然を何よりも賞美するかと云ふことを窺へるであらう。祕園の中の池や、建物や、小山や、森や、道などの有様は日本内地の古來からの美の規則を適用するわけに行かず、より徹底

したあるものを持つてゐると言はなければならぬ。而して又、それと丁度同じやうな現はれが、朝鮮の上流邸宅の家の作りにも現はれてゐて、縁側や、廊下や、その他の小さい部分々々に見られると言へやう。

六の版第一は地方の兩班の邸宅の間取りと構へである。六の版第一の都風なのに對して、これはより淳朴な方式になつてゐるが、内房と外房と、その他の附屬房との關係は前者と一般民衆の家との中間にあるものとしてその組成を考へて見ることの出来る例である。

さて次ぎに各部屋々々の内部の様子に就いて述べて置く。

大門

大門には木製の二枚開きの丈夫な扉が付いてゐる。而してその門扉には縁起のいゝ文字をかいた紙を貼つてゐる。所々の柱や、入口の上などにも同様な貼紙をする慣はしとなつてゐる。

一七の版第一 大門の内に普通の家では白を置いたりする。而してこゝに舍廊に入る戸口が開かれてゐる。

舍廊

舍廊の内部の備へは十八の版第一のやうになつてゐる。一それは中流の温突の油紙貼りの床の一方の壁に沿うて、寢臥べる長さの毛氈乃至蒲團が敷かれ、枕と四方枕肘を倚るもかなどが置かれ、而して中流以上の家では第二のやうな備へを持つてゐて、こゝに主人が立膝したり、胡坐したり横臥したりする。一八の版第一の寫真参照 一方の窓の下に机を置き、反對の方に書棚を置き、又筆硯その他の文具書籍の類をそれらの周圍に置き、落付いた一つの美しい備へを成してゐる。而してこの主人の座の前には、痰壺、煙草入、灰盆を備へ、長い煙管をも用意してゐる。客の座席は床蒲團が敷かれて作られる。而して主人が在宅のときはこゝを居間として使用するのであつて、主

内房

人が晝の間はこの部屋へ出張してゐて外客に接する用意をしてゐるのである。

内房即ち婦人の居間乃至寢室には、中流以上の家では衣裳を納れる簞笥が壁に沿うて積み重ねられてゐる。圖版第九 朝鮮の簞笥の作りは特有な美しさをもつてゐる、正面のパネルの割り方乃至金具の意匠が美しく、而してそれが塗りこめられ或は磨き立てられて手入りよく保存されてゐる。そのうちに無論朝鮮の婦人達にとつて特別な愛着をそゝがねばならぬ衣裳が収納されてゐるのである。

朝鮮婦人の晴着は實にめでやかな彩絹で作られてゐる。この簞笥のほかに、色々のものを納めて置く箱等が

積みかさねられてこれら總てが立派な裝飾物となつてゐる、尙簞笥の積み重ねの上に直かにか或は棚を高く作つて、そこへ蒲團を巻いて載せてゐる、また鏡臺がそれらの物の中に備へられる。

朝鮮の人達はきちんとした清楚な身じまひを好み、男子も鏡を備へて装ひを氣にかけ風がある。この部屋は炊事場と接してゐて、食事をばこの部屋でやることになつてゐる。而して炊事場の上天井は納戸になつてゐるのが普通で、内房より

これを使用する戸口をもつてゐる。この納戸乃至押入の事を高樓と稱する。中流以下の民家では勿論それらの多くの家具を見る事が出来ない、簡単な棚が作られ、又衣類は釘或は繩に掛けられてゐる。

大廳

大廳は開放された板の間で、多く夏季に色々の用に使用する所になつてゐる。普通の家ではこゝの壁に沿うて食器棚や米櫃その他餘分の器具類が置かれたりしてゐる。圖版第九 下の圖分離した内房の棟を別にもつてゐる上流の家ではこゝを應接用に使用する。

厨房

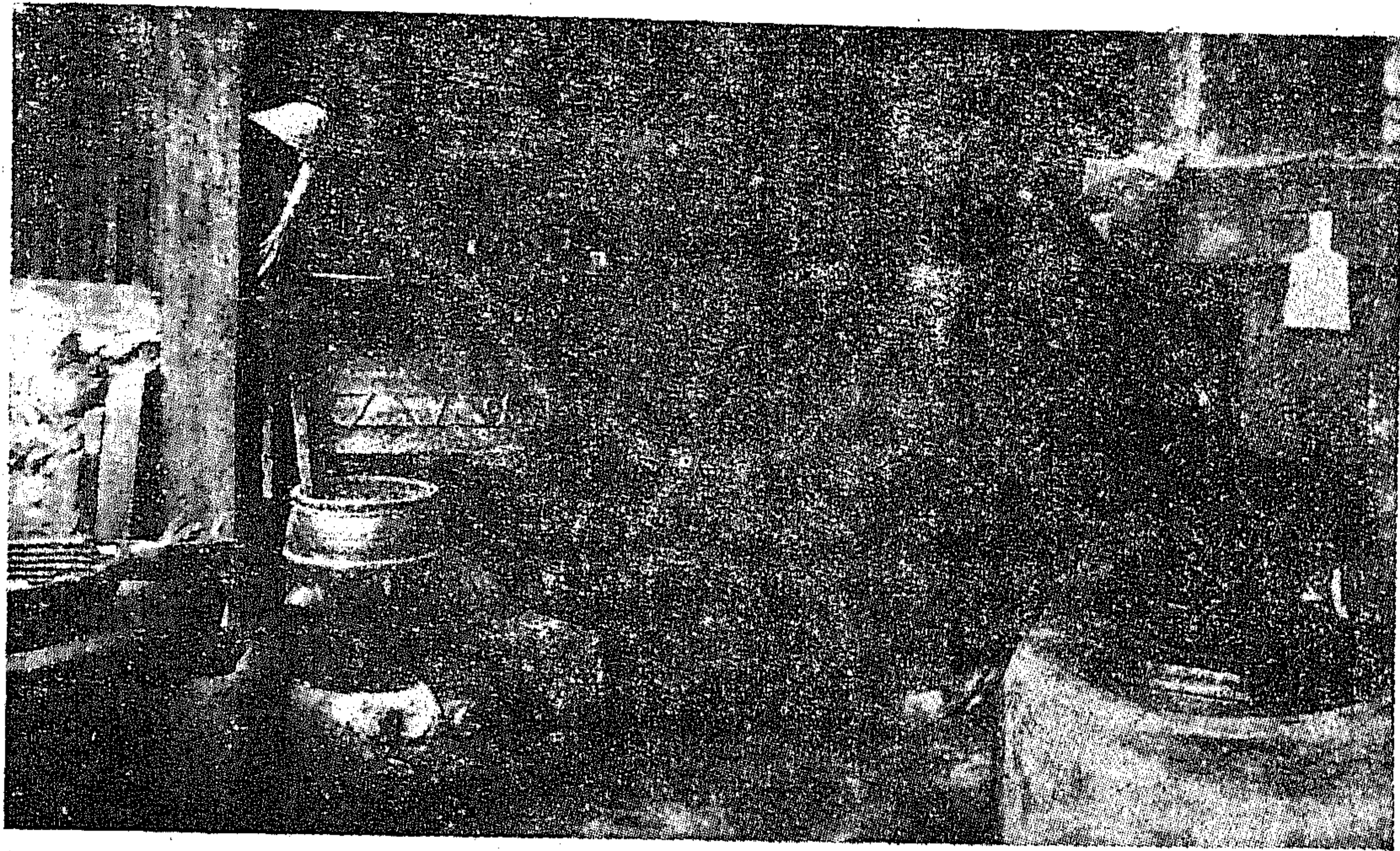
厨房即ち炊事場は、土間で、土塗の竈が數個連続したものが壁側に作り付けられてゐる。圖版第九 而して一方の壁には調理用の器具や食器類を載せる棚が設けられ、調理臺及流しは窓の設けられた一方の壁側に作られてゐる。竈は前に述べたやうに内房への温突の焚き口になつてゐる。

るのである。室内は概して暗く光線の射入が少ないが、そのうちに陶器と眞鍮器の食具が棚の

越房

厨房

醬甕台



第二 十 圖 厨 房

上に積み重ねられてゐるのが光つて見えることが外來者には珍らしい感じがする。尙、大きい水瓶が用意せられてゐることも目に付く特色である。第二 十圖

越房は大廳に接続してゐる温突室であるが、日本内地の離れに相當するものである。

厠間所便は虚間置物の側或は母屋から離して作られる。外房のある場合にはそれに附屬した別個のものも作られる。

以上の部屋々々の外 朝鮮の民家に見られるもので特色と見るべきは 中庭か或は後ろの庭に石で縁取つた土壇を築きその上に瓶を多數並べて置く備へである。これを醬甕台と稱する。圖版第一 朝鮮の家の屋内屋外には日本内地に見るやうな桶や、樽や、盥などが見られない、それらの代りに陶器のみ使はれる。水、酒、醬油、味噌、漬物は言ふに及ばず米その他の穀類も總て瓶に納めて貯へられるのである。物置乃至庫の内も一ぱい瓶が列んでゐるのが普通である。 瓶の胴には簡単な帯模様や、引搔いたタッチの

る。而して醬甕台に並べられてゐる瓶の中には、醬油、味噌の類が納められてあつて、そこで適當に陽に當てられて發酵を助けられてゐる。

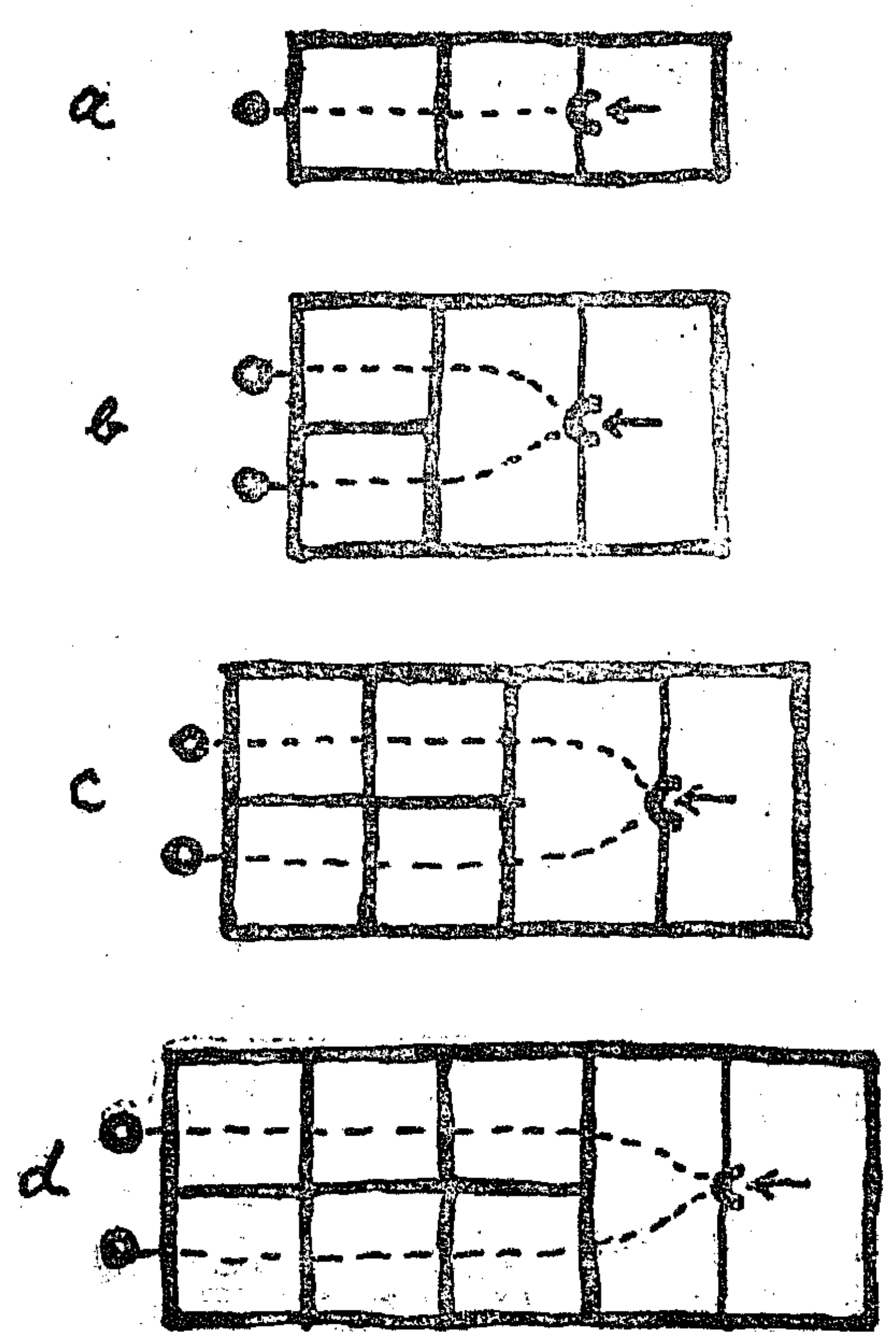
唐草の断片の粧ひが施されてゐる。而して貯藏物を納めてゐる瓶には摺鉢のやうな陶器の蓋がかぶせられる。

北部型

一般型の住家の間取り及それらの部屋々々の説明をこれ位にして、次ぎに朝鮮の北部地方の間取りの説明をしやう。(註³)

この種の間取りの分布はどれだけの地方に互るか明かではないが、その大體を指示すれば、平安北道、咸鏡南北道及江原道の日本海沿ひの地方であらう。(註⁴)

前に述べたやうに、この型の間取りは宅地の周圍に建て周す方式ではなく宅地の中央に建てる方式で、屋敷の周りには垣根乃至塀が簡單に取り繞され、而して門も長屋門式にならないのが普通である。



圖一十二第 北部民家の大小の異なる間取りの變化

母屋にあたる家の間取りの普通の方式は、四つ目型に温突室が四個配置され、其れに温突の間と土間とが附隨してゐる。而して生活程度に従つて必然起り来る家の大小の變化は第一圖のやうになつてゐる。

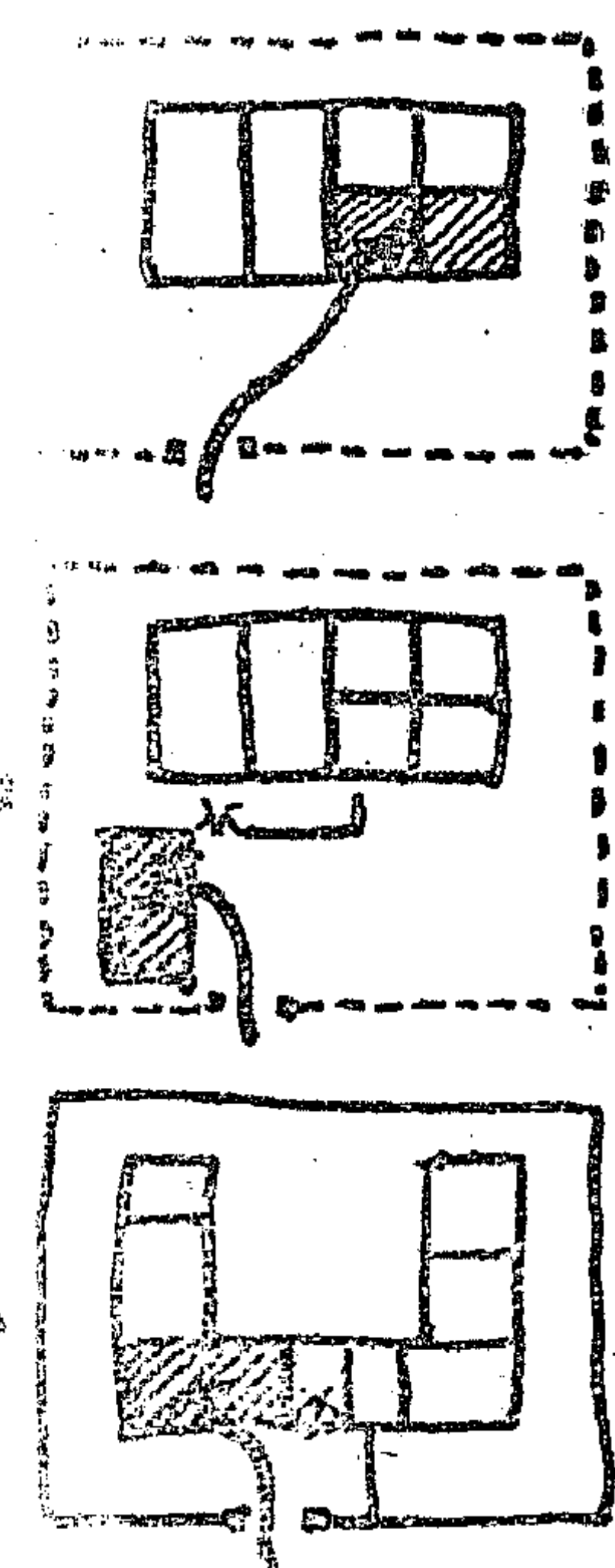
第二十の a は第十圖閉ぢ込めた温突室(即ち温突)一つと、廣間用の土間に開放された温突一つと、土間とから成つてゐる最も程度の低いものである。b は次ぎの程度のもので、温突が前後に二個並置されてゐる。第二十の次ぎ

に通すのである。而してそれらの部屋が全部開放されてゐるのみならず、内房にあたる他の部屋々々も半開放的である。而して一般型のものゝ如き大廳が北部型にはない。北部朝鮮では婦人風習全體が一般とは餘程相違してゐる。住家の特色は屋敷も家も開放的な事であり、母屋が屋敷の中央に建てられ、その他の建物、物置便所の類ひは極く簡単に散らばされて屋敷の所々に建てられてゐる。

接客室の
地方的差
異

咸興は、北部の勢力と、一般朝鮮の勢力とが永らく對峙した歴史をもつてゐる地ださうであるが、この事實は咸興の民家の間取の蒐集からも證據立てることが出来る事が興味がある。圖版

第三 咸興の民家の母屋の間取は北部地方一般の型であるけれど、家の入口の近かくに別棟の舎廊を建てゝゐる。而して母屋の舎廊もそのまま存してゐるが普通の接客は外舎廊ですることゝなつてゐる。而して外客に内房を見透されない爲めに小さい目隠しの扉をその戸口に立てることゝが一般となつてゐる。而して現在の咸興に見る風習は大體北部地方の特色をもつてゐて、家をば開放的にしてゐるのである。



圖二十二第
異差的地方の室客接

これらの關係を對比する爲めに圖を作つて見れば

第二十のやうである。(イ)は純北部型で接客室を母屋のみに取りたるもの、(ハ)は一般型で接客室と内房とを嚴重に隔離したるもの、而して(ロ)はこの二つの接

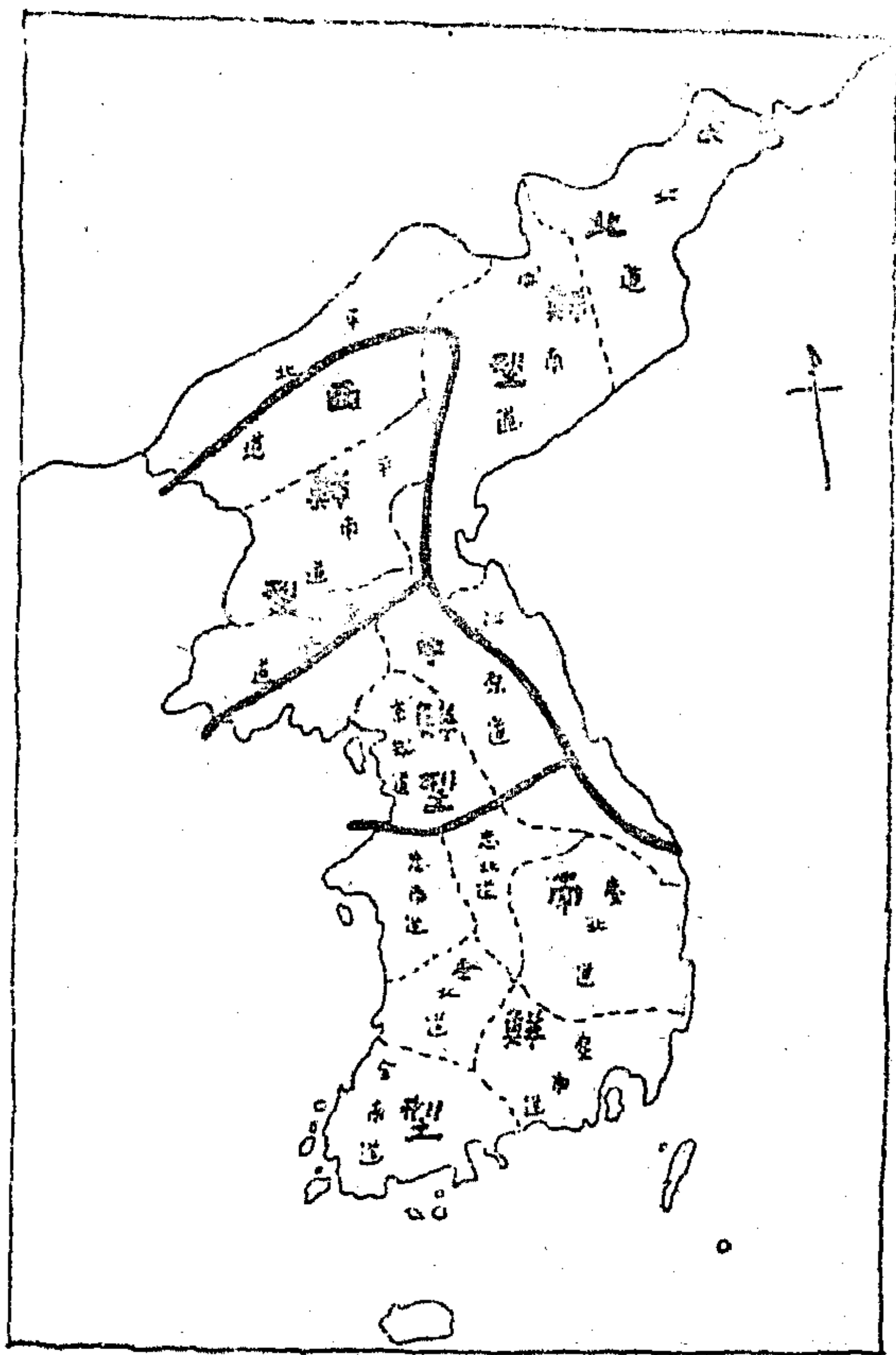
渉部にあたる咸興地方のもので外舎廊を設けたもの

である。

(註₁) 工學博士塚本靖氏は本年一月の考古學會の講演で原始的住家の發達に分割的・増加的の二途あると説かれたが、民家の研究にも適用出来る良分類だと思ふ。家屋そのものの發達の此の二途を屋敷の制肘的・非制肘的發達の分類に加へると一層豊富な考究が進められる。

(註₂) 拙著「日本の民家」參照。

(註₃) 岩槻善之氏が朴吉龍氏の調査の結果を雜誌「朝鮮と建築」(大正十三年二月號)に發表されたので、朝鮮の民家の間取の型の分類及分布が一層明瞭になつた。茲にその研究の大要を紹介して本節の缺陥を補い深く同氏に謝してをきたい。尙第二十三圖も同研究から借りたのである。氏の調査の結果によれば五種の型に分類し得、



第一 第二十三圖

一、北鮮型。二、西鮮型。三、中鮮型。四、南鮮型。五、京城型としてある。而して其の分布状態は第二十三圖の如くである。

一、北鮮型は私が本節で北部型と稱したものである。
 二、以下のものは大體一般型と稱したものの、範圍に屬するが夫々多少の特徴を持つてゐる。
 三、西鮮型は絶體に曲げた棟を作らず、別棟の家を平行若しくは直角に配置し、而して大邸宅にても大廳を設けることがない。

四、中鮮型は大體の配置は京城型に異ならない。たゞ小住宅では大廳を設けない、中流住宅では大廳を取ると南に設けず、南に内房を取る。

四、南鮮型は西鮮型と同じ配置であるが、大廳を重要な室として必ず南面せしめ、普通その大きさが二間或は三間である。

五、京城型は棟を必ず曲げて作る。三間以上の家では大廳を必ず取る。舍廊をば必ず別棟に取る。

(註₄) (註₃) 參照

第二節 開城邑内の民家

茲に述べることはいくらか特殊な研究に屬するから前節と別けて特に標題を設けたが、朝鮮の住家の間取に就いての考察にとつては重要な事柄であるから前節のデヴェロプメントとして見ていたゞきたい。

開城の調査

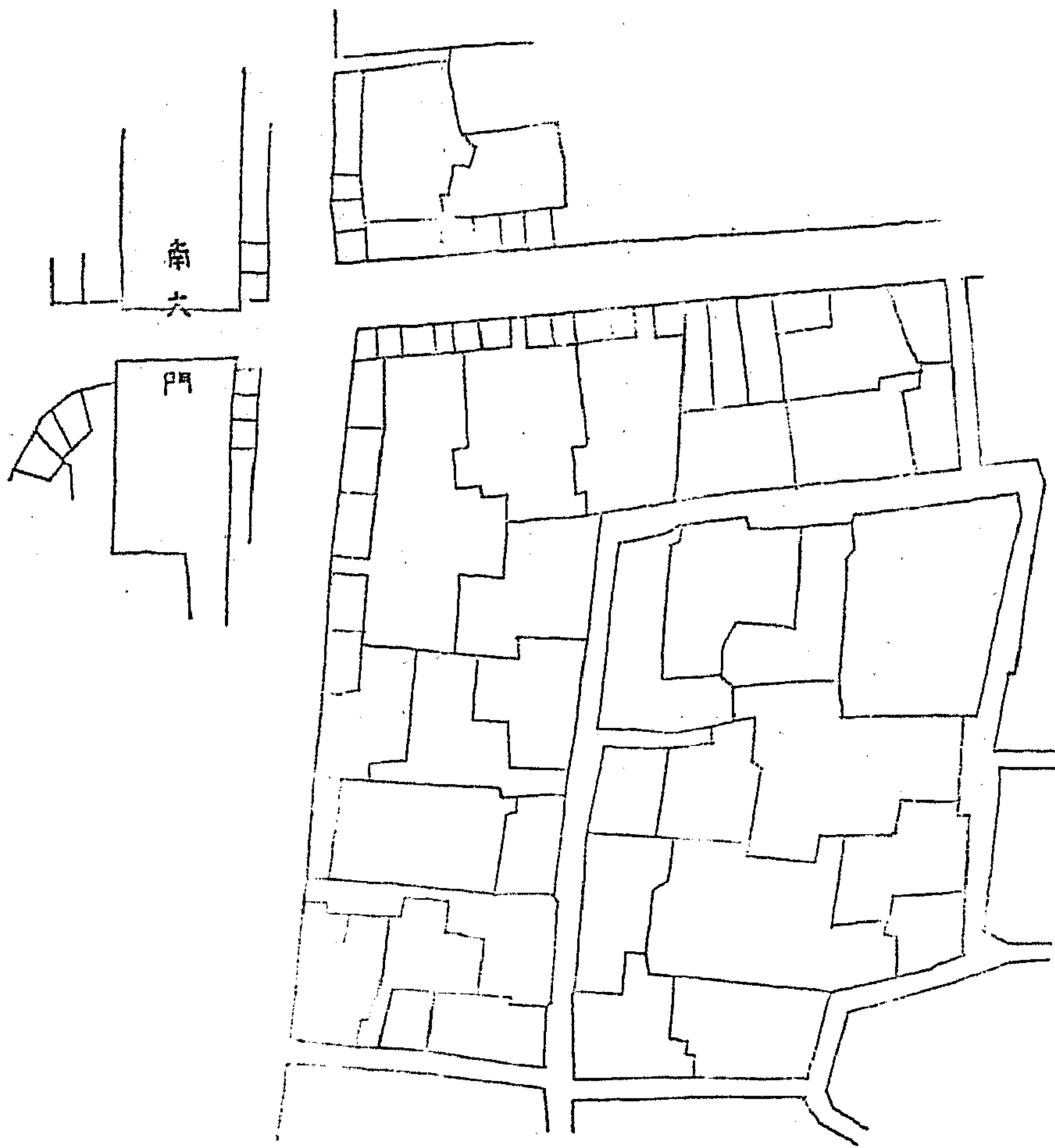
開城では丁度私が其處へ行つたとき、總督府の部落調査の人達がをつて、その方面の調査を進めてをられたのであつた。私もその中に臨時に加へてもらつて特殊な稍々精細な調査をやつて見る機會を與へられたのである。

前節に述べた私の朝鮮の一般型の民家の間取りから生ずる色々の疑問、即ちどれだけそれらが町の地割りと根深い交渉をもつてゐるか云ふこと、中庭はどれだけ家々にとつて生きて働きをしてゐるか云ふこと、更らに如何して朝鮮の一般の民家は中庭をとる式になつたか、それらの間にどれだけ古い傳統があるかを見ていゝかなど云ふことを考へる機會と資料とをなるとだけ澤山得たかつたのであつた。それで小田内囑託の下に社會課やその他の人達の合同でやつてゐる部落調査團に混つて、私は限られた時間に於て、私の研究野帳を手にしながら、この町の家々を見せてもらつたのであつた。而してこゝでは階級別と云ふよりも、職業別に重に注意して見たのである。他の町や村で調べたのとは違つて、上流、中流、下流と云ふやうな概念で調べたのとは違つて、こゝでやつた色々の職業者達の家々を研究的に注意することの出來たことから、一層親しい朝鮮の町の人達の生活の匂ひを感得することが出來たのを感謝してを

かなくてはならない。

開城の町は日本内地で言へば京都か奈良に比較されるゝ地で、高麗時代の都だつた地である。前にも既に寫真で紹介したやうに、澤山の丘に圍まれてゐて、中央を雲溪川の清流が砂の川原を作つて流れてゐて、家々の壁が皆軒端まで石積みにされてゐて、而して街路及路次も、また人々の風俗も舊のまゝな古風な美しさを味はして貰へるのである。

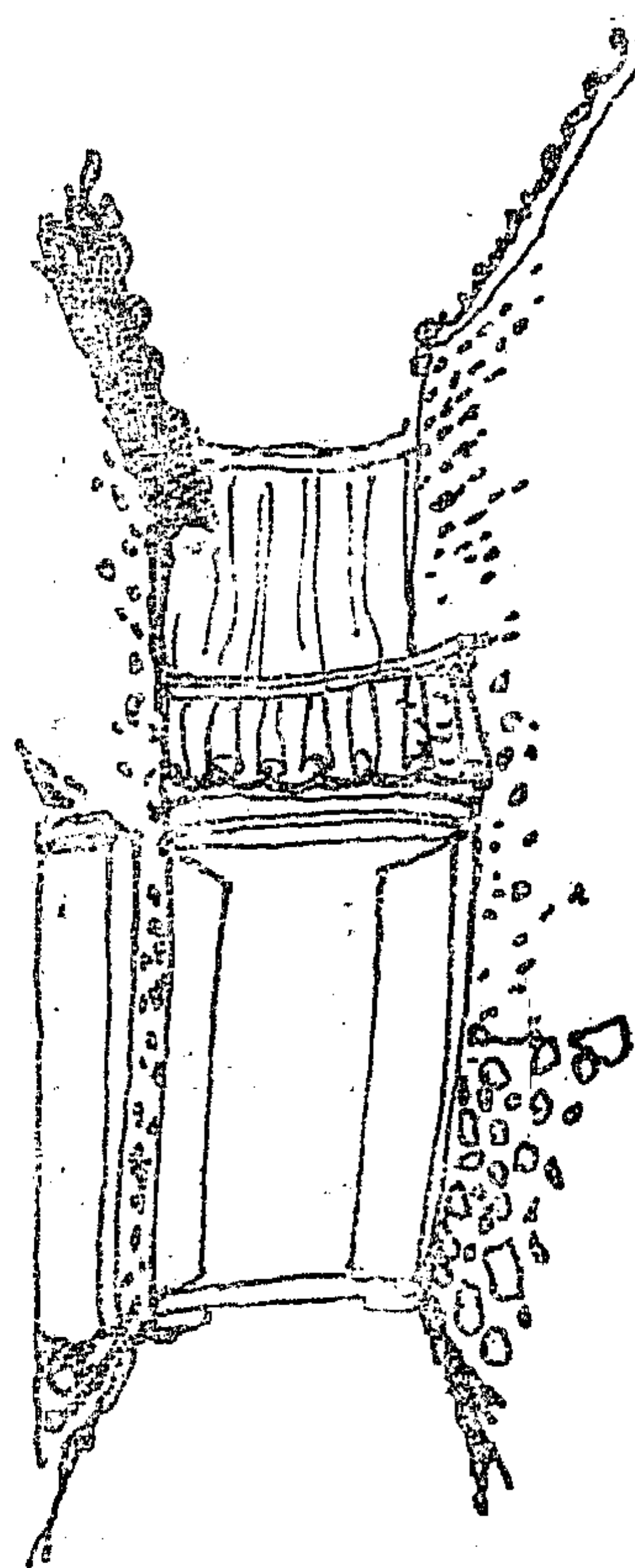
邑内の地
割



合四十二圖 開城邑内の地割

それで、この町の地割りは第二十に見るやうな特徴をもつたものである。この圖は南大門附近の個所で、大通りに接した家並の個所には小店舗が多數ならんでゐる態が窺へ、而してその他の大部分は普通の民家の敷地になつてゐるのである。先づこの圖を概観して、路次と宅地との結合の工合に特徴を感じなければならぬ。こゝには日本内地の都市に普通に見るやうな表店と裏店との關係は見られない。即ち一宅地内の自然的發達から來る所の偶發的路次 (Incidental alley) の混入と見るべきものが殆んどなく、總ての宅

地が兎に角道路乃至計画的路次 (Planned alley) と見らるべきものに接觸してゐて、而して宅地の結合の工合は細部に於て互ひに稻妻形の線をなして咬合してゐる。本來の地割りはもつと規則



第二十五圖 路次

的なものであり、各々の小凸凹は漸次變化を來たして出來たものであらうと想像出來るのであるが、何れも正方形に近い形狀を本來のものとして保つてゐると見ることが出來やう。而して路次の所々に、開城の町では堀井戸が設けられてゐる。

各種の職業者の家の踏査

初めに言つておかねばならぬ事は、色々の職業をもつた人々の家の間取りは大體に於て同じ方式で行はれてをり、社會組織の複雑でない時代の町に現はれる現象が見られたと云ふ事である。即ち普通の住宅、飲食店、商店、醫師の家、家内工業者の家等に何れも共通の間取りの形式が見られたと云ふことである。で、私はこの調査を不十分ながらやつたことによつて、朝鮮の町屋に就いての概念が一層はつきりしたことを悦んだわけである。

日本の町屋と比較して考へて見ることは次ぎの節でやるから、こゝでは開城の町屋の踏査からの記録を紹介してをくに止める。圖と對照して一應次ぎのことを讀んでもらう事とする。

醫生の家

圖版第五のAの家は開城に於ける最も古い建造に屬する民家の一として擧げられたものであるが、現在は舊式の醫生が住んでゐる。勿論年代は不明である。圖版第七はその入口で、表に面した部分だけ二階になつてゐる。入口に近い部分だけ一劃をなしてゐて、職業の爲めに使用さ

れる藥局と診察室とになつてゐる。普通の住宅ならばこゝは舍廊に相當する部分なのである。大門の扉の一つには「龍徳」と書かれた文字の貼紙が見え、診察所の看板が入口の上部に掲げられてゐる。大門を入ると速く左手に便所が設けられてゐる。職業の爲めに使用する部屋は二部屋だけで、それから奥へは中門を潜つて入ることになつてゐる。

中門を入ると、矢張り便所と、種々のものを納れて置く瓶と、焚物の松葉と、それから臼とが置かれてある。臼はどの地方でもここに置かれるのが普通である。そして右の方へ斜に入ると中庭に出るやうになる。

中庭の左手には臺所があり、そこには竈、流し、まな板、水瓶及棚が壁と窓に沿うて備へられてゐる。第十圖臺所の外壁に沿うて壁の細い隙間が出来てゐるのは、その外壁が隣家の壁になつてゐるから偶然出来たものである。臺所から續いて内房が二部屋設けられ、その壁には簞笥が並べられ、奥の方の壁には高窓を設けて明りとりとしてゐる。内房から續いて板の間の大廳が間取られてゐ、そしてその中庭に面した方は縁側をなしてゐる。そこから一段高く手摺りで装はされた縁側が出来てをり、その個所に越房京城型が設けられてゐる。圖版第七即ち臺所、内房、大廳越房は一と揃ひをなして、代表的な一般型京城型の間取を形成してゐるのである。中門の側に物置即ち庫が設けられ、そこには色々の物を貯藏する瓶が並べられてゐる。そして中庭の一方には石に縁取られた土壇即ち醬甕台が設けられて、その下には草花が植ゑられてゐる。

外來客は中門より内へ入れぬことになつてをり、舍廊即ち應接間は表の部屋が充てられてゐるのである。表の二階は物置きとして使用されてゐる。二階のある家は朝鮮では極く稀れなのであるが、舊き町なる開城にはかゝる造りを間々見るのである。而して建造年代の古い家は概

してまた使用してゐる木材も大きいやうである。

一貸家

二圖版第

のB、C、及Dの家は何れも現在借家になつてゐるものである。Bは路次から大門を入ると空地になつてゐるが、大門のところには矢張り便所がある。特に小便壺は丈高き瓶を用ひてゐるのが各地方一般である。更らに中門をくゞると中庭に入る。この家の間取りは少し變則になつてゐて、炊事場と、内房にあたる温突室が三つと、大廳と、それから越房とから出來てゐるが、この間取りはもと飲食店だつたことに原因してゐると言はれてゐる。現在は菓子屋をやつてゐて、大廳の個所を店としてゐるのである。

日傭取の家

Cの家はずつと小型な住家で温突二つと物置きと庇の土間から成つてゐる。この家には日傭取が住んでゐた。

家内工業者の家

更らにDは極めて纏り悪く出來てゐるが、細長く一列に部屋々々が並び、現在家内工業に従事する家族が住んでゐたが、中庭のない日當りの悪い家である。Bと、Cと、Dとは何れも複雑化せんとしつゝある過程にあるものとして興味をもたなければならぬ。

飲食店

二圖版第

のEは飲食店である。この家へ入る路次には、立派な石枠の井戸がある。二圖版第路次の隅が入口になつてゐて、それを入ると直ぐ中庭に出る。而して入口の直ぐ側に露臺が設けられてゐる、簡単な客はこゝで飲食をする。その左の方に温突の部屋が三つ設けられ、そこが客達に提供されるのである。臺所がそれに接して入口の近かくの方にあり、中庭の向ふ側には物置と便所とがある。

雜貨店

Fの家は普通の雜貨店で、大通りに面した一間通りだけは店舗になつてゐて、入口は路次に

面した方に設られてあり、而して家の中央に明取りの役をしてゐる小さい中庭が設けられ、それを中心にして物置や、温突や、臺所が設けられ、而して温突の前には小さい縁側が出来てゐる。中庭の一方の壁に沿ふて瓶が並べられてゐる。

醫師の家

二圖版第 G は醫師の家で、中庭が三個取られてゐる複合して出来たやゝ大型のものである。

初めからかう云ふ家だつたか、或は次第に隣家を取り容れてかうなつたのかは不明であるが、之等の三區劃は何れも別々の用途に使はれてゐる。入口を入ると直ぐ診察室と薬局とがあり、診察室の前に中庭がある。こゝは植木を植ゑて一寸日本内地の醫師の玄關をかたどつた備へにされてゐる中門を入ると住居の部分になつてゐて、炊事場から越房までの一と構へが連なつてゐる。九圖版はこの家のお嬢さんの部屋で、こゝの越房にあたる部屋の内部の光景である。更らに此家の第三の部分は、左方に突出してゐる一劃で、その中庭を取り圍んでゐる部屋々々は藥の製造場或はその貯藏場になつてゐるのである。而して井戸が住居の部分の中庭に一個所、最後の中庭に一個所ある。

餅屋

最後の H 二圖版第 は餅屋である。店と、小さい中庭と、温突その他の配置の工合は F その他と同様である。二圖版第 はその表に面した部分の寫真である。

やゝつこしい説明をこれで止める。前に掲げた特色をもつた宅地割りの上に形成せられてゐる各種の家々の間取の有様を以上の諸例で想像してもらふこととする。上の家々は開城の町の諸方から求めたので、四圖版第二十に符合するものでないが、宅地の形狀からそれらの一般を想像してもらはるだらう。即ち町の光景として屋根に取りかこまれた家々の中庭の穴が數多く眺めら

れ、そして家の中に生活してゐる町の人達が、その穴なる中庭に動いてゐることも想像して
らへるだらう。

尙、この地の大商業を營む爲めの特殊な區劃及建物開城は朝鮮に於ける有數な商業地地として認められてゐる。其他の紹介を
も含めると町全體の姿が一層明瞭になり、西洋古代都市の發掘の跡にも比すべき光景が思ひ浮
ばされる事であらう。これらの點は第二章に述べる所なのである。の住家の特徴させられてゐる。

第三節 日本の民家との交渉

日本の民家の歴史的乃至發生的の問題に就いて、日本内地の民家の研究に於て私は残してゐる色々の個所をもつてゐる。(註¹) ことに私は今朝鮮の民家に就いての一般の概略の調査乃至研究を紹介することを終へて、朝鮮の民家の研究に携つたことから、ふりかへつてこれまでの私のなした日本の民家の考察にいさゝかの付け加へをしておくことが義務だと感ぜられ、又それは一方に於て朝鮮の民家を私達に一層印象深く記憶に残すべき道であるとも考へる。

日本の民家と朝鮮の民家の類似に就いての考察

先づ日本の民家の研究にとつて一番大きい問題は、日本内地にあまねく行きわたつてゐる、殆んど基本の型だと云つていゝ四つ目の間取はどう云ふ起源をもつてゐるものであらうか、それは日本内地に於て創意的に成つたものであらうか、また外から渡來した系統をもつてゐるものだらうか、と云ふ事で、それに就いて私は疑問と興味をもたずにはゐられなかつたのである前に、私は假りにそれを出雲の大社造りまで溯らして、一方ではそれ以前を疑問とし、また一方に於ては一と先づ工藝學的にその成生過程の考察をなしておいたのであつた。それで一方の系統を考へる側の追求としては、我國の周圍の何處かの國に、四つ目の間取乃至それに類似した間取を持つた地方がないかと氣にかけてゐねばならなかつたのである。

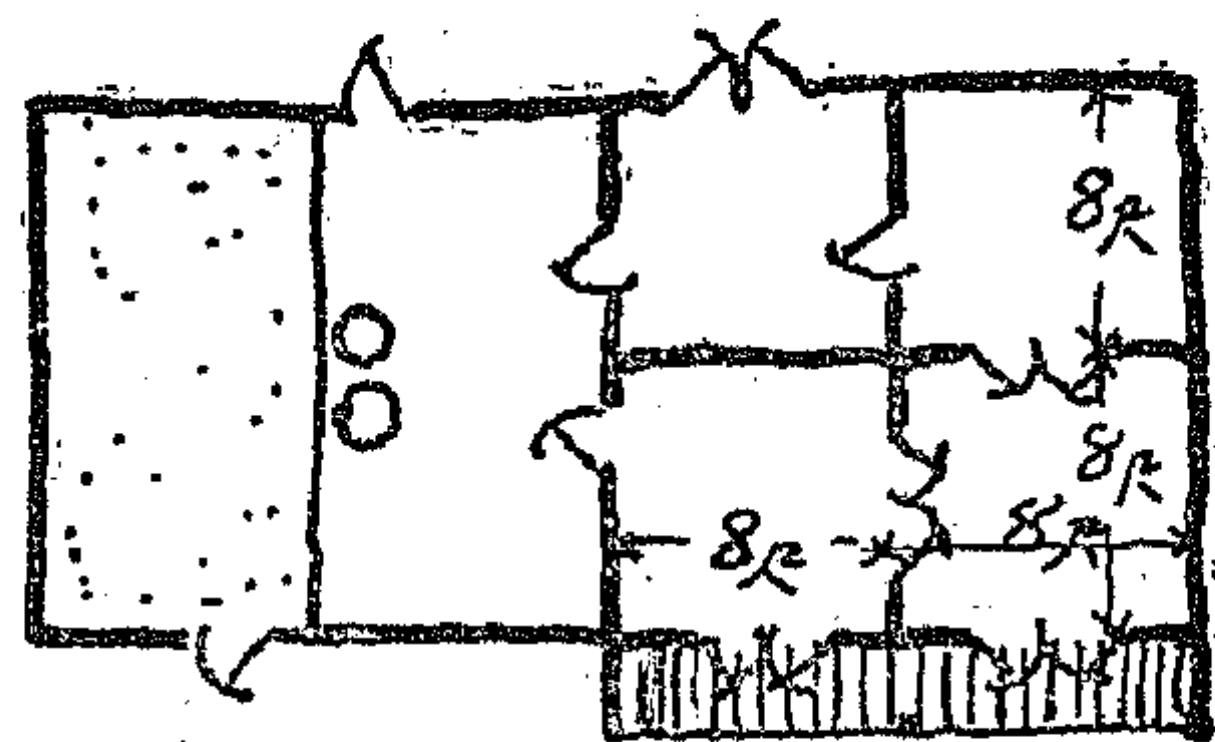
私は朝鮮に於て、前に述べた北部型^{北朝鮮}の間取りに就いて、日本の民家の標準となるべき型のものゝ極めて類似し、或る點では殆んど全く同じだと言つてしまはなければならぬものを紹介することが出來たのである。それは既に説明したところによつて一とまづ了解してもらへる

ところだと思ふ。第二章 母屋のみならず、屋敷の取り方、その他の諸種の建物の屋敷内に配置されてをる状況、及び一般朝鮮の風習とは相違して内房外房の關係ない、祕密を藏せない開放的な點、それからまた部屋々々の使用されてゐる状況に於ても全く同等だと考へられるのである。

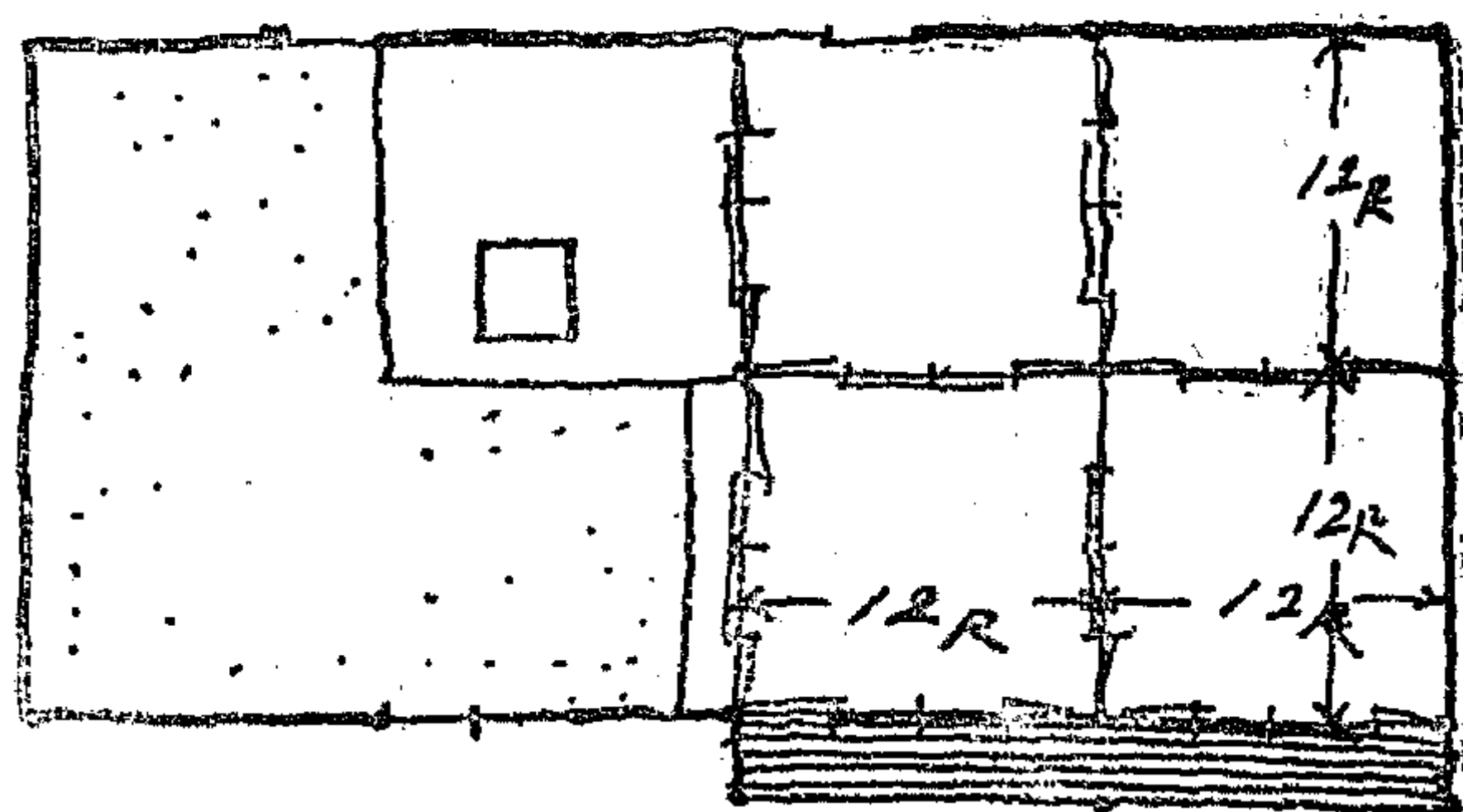
即ち第六圖二十は兩者の比較である。

然し單に外形上の類似と云ふことからのみでかゝる考察は切り上ぐべきものではない。次ぎに私は朝鮮に此の間取りの存在する理由に就いての工藝學的な若干の考察をやり、この問題に

標準間取比較



北部朝鮮
[四マハケン]



日本内地
[四マハケン]

圖六十二第

比較のさ家民の地内本日と家民(型鮮北)型都北

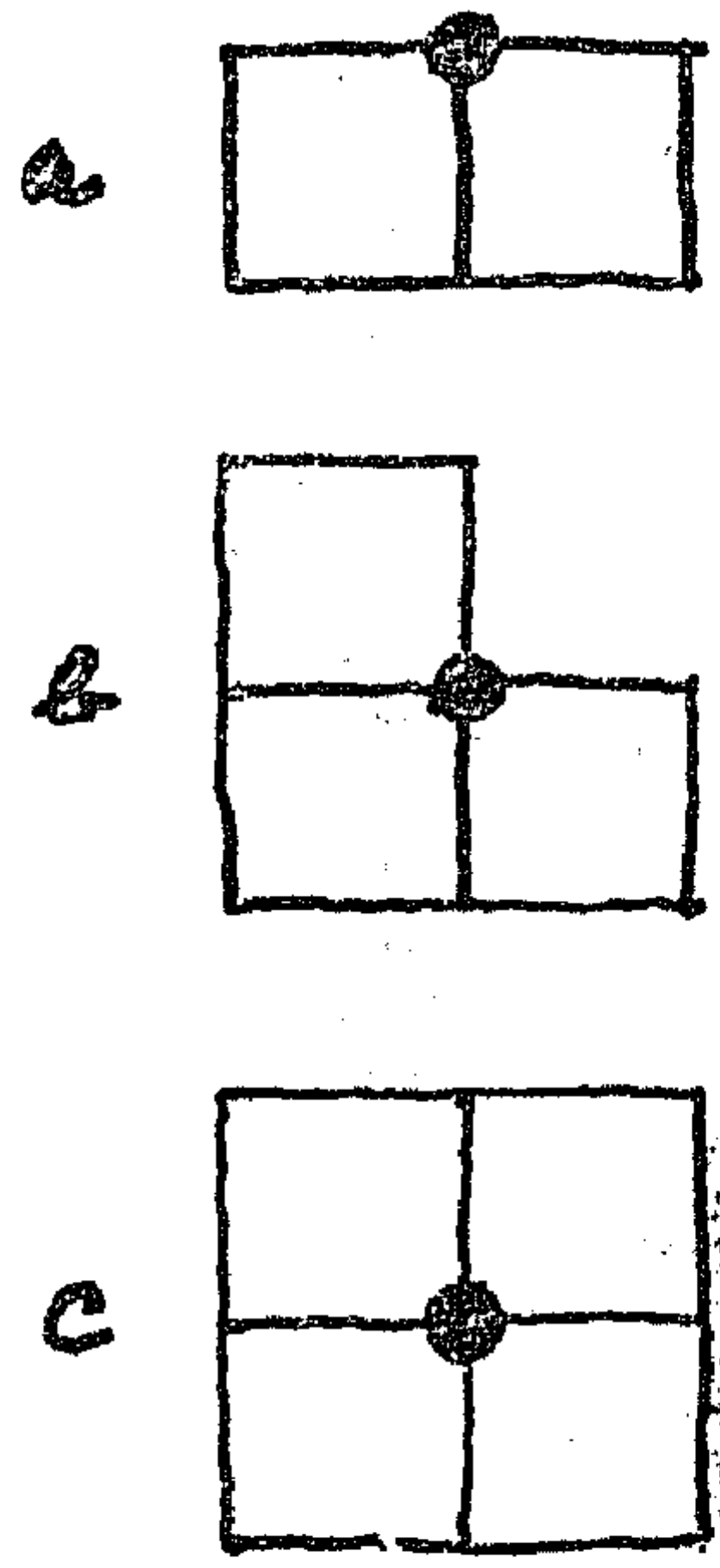
就いての私としての責を果して置きたく思ふ。

今、此の朝鮮北部型の間取りは温突制から必然に合理的に發達したものであらうとの想像し得べき一つの假定に就いて研究して見やう。前に説明した通り、一般型の朝鮮の民家に於ける温突の部屋々々の配置及焚き方と、北部に於けるそれらとを比較す

ると、一方は散漫であり、断片的であり、従つて不經濟で不便であるに反して、他方は全部の部屋々々は臺所の個所の一つの焚き口から焚き付けられる事で總べてがあたゝめられるやうな纏つた作りになつてをるのである。そしてまた實際北方の人達は、自分達の地方の温突こそ完

全な温突であり、南方の人は本當の温突の焚き方を知らぬと貶してをるのである。南部の温突に於ては、個々の部屋が各々獨立した焚き口をもつてゐる、而してそれらの焚口は多く中庭に面してゐるために戸また炊事場の焚口も、炊事場の多き爲めに焚き付けた後、焚き口の穴から外の寒冷な空氣が床下の煙道に侵入して部屋の温度をさまし易い缺陷があるのである。焚き口一般に蓋をそのこゝに實行は出は來がたい言。北部のものに於ては、焚き口自身が閉ぢこめられた屋内の土間の中に開かれてをるから、決して寒冷な外氣を直接外界から誘ふ憂がないのである。

尙ほこゝで、別な方面の觀察を少しく試みてみねばならぬ。それはペチカを使用してゐる滿洲シベリア地方に於て、ペチカを備へる爲めには部屋の配列をどうしてゐるか云ふことに就いてある。それは第二十の圖表のやうになる。即ち二部屋の場合には、部屋と部屋との境ひ



第二十七圖

の一方の外壁に接した個所にペチカを置き、三部屋の場合には部屋をL字狀に配列してペチカをそれら三室の壁の交はる點におき、そして四部屋の場合には部屋を四つ目狀に配列して、而してペチカを家の中心におくことになるのである。従つて最後の場合には無駄な熱の放散さるゝことな

く、最も經濟的な合理的な備へとなることになるのである。(註)

北部朝鮮の間取りの型は、小さい家から大きな家に至るまで、第二十に見るやうに何れも一個所の焚き口からの火氣で無駄なく部屋々々が煖まるやうに出來てゐる。故に上のペチカを採用する家の場合のやうに四つ目の間取こそ最も合理的であるとは云へないことになる。然るに

北部朝鮮に於て四つ目の間取の家がいつも標準になつてゐると云ふ事は、四部屋は一家族の住む家として最も標準の室數に相當するからだと云ふことに過ぎなくなるのである。而して四部屋の家を作る場合には、ペチカ制でも温突制でも四つ目の間取が合理的だと云ふことだけは言へることとなるのである。

朝鮮の四つ目の間取は温突制から來たかどうかと云ふ事は上のやうな考へに結着する。然らば何時から朝鮮に温突が起つたかと云ふことを次ぎに考へに入れて見なければならぬのであるが、これは既に述べたやうに第三章 第一節不明である。それでその發生年代を、(一)古代に屬するか或は(二)近代に屬するか何れかに假定して、これを取り入れて、更らに前の假定間取りが温突制から出たものとの假定を働かして見ると、(一)の箇條を採用した場合には日本内地との交渉が或はあるかも知れず、(二)の箇條を採用した場合には交渉が絶たれることになる。歴史に徴して而して若しも(一)の箇條を採用せねばならぬとすると、どうして日本内地に温突が輸入されなかつたかと云ふ疑問が残る。それでもう一つの推測が起つて來ねばならぬ。即ち温突の有無に關せず、朝鮮の北部或は現在朝鮮の北部に占居する種族の祖先は四つ目の間取の傾向の家をもつてゐたのではないかと云ふ推測である。

建築學的立場からこれ以上かゝる問題に立ち入ることは他の専門研究者達に對して不遜になる。私はこれだけの資料を提供することで今のところ満足せねばならぬ。ツングース族と日本の太古との交渉の問題は他の専門家にゆづつて置かねばならぬ。(註)

次ぎに拙著「日本の民家」に於て私は問題として残しておいた事柄の一つは、奈良大阪附近

家と朝鮮
(一般型)
の民家

一般に瀬戸内海沿ひの地方に、著しい特徴として現はれてゐる屋敷の取り方及び屋敷の中の建物の配置の方式の由來に就いての疑問である。あの整頓方法は何時の時代にか大陸文明の影響を受けて形成せられたものに相違ないと考へぬわけに行かなかつたのである。それらの地方の民家は土塀を造ること多く、屋敷の外壁に庇を作つて中央に中庭を取り、庇の個所をば物置や便所や、納舎等に使つてゐる。母屋は然し日本内地の各地方に一般であるところの四つ目の間取になつてゐるが、その全體の建物の配置は前に述べた朝鮮の一般型の屋敷の内の構へと同じ方式が行はれてあると云つてよい。それらの地方の集團狀をなした部落のブロックの路次及び宅地割りを見ても前述の朝鮮の町のそれと全く同様であると云へるのである。

それでそれらの外形からのみ言へば、日本内地の瀬戸内海沿ひの地方に於ける民家は、朝鮮の北部型の間取と一般型南鮮の屋敷の取り方とが合致して形成されたものと見られるのである。此事實からは、兎に角ある時代に於て、瀬戸内海沿ひの地方に特に或種の文化朝鮮にあつた文化と同系のものが輸入された跡を残したのでないかとの疑ひを持つておいてもいゝであらう。

朝鮮の上
流邸宅と
日本の古
代貴族住
宅

なほ更らに詳な事の研究にうつつて見やう。朝鮮の上流の人達の邸宅の事を述べたときは次ぎの事を特に注意しておいた。即ち婦人の座所なる内房と、一般外來者に接する個所なる舎廊とは各々別棟に建てはなされてゐて、そしてそれらの各々が廻廊狀の長屋にて取り圍まれてゐたと云ふ事である。この事實は日本内地の平安朝以前の住宅の考察に何かの資料となるものではないだらうか。即ち日本の平安朝時代の貴族の邸宅の方式として擧げられてゐる所の寢殿造の各建物の配置の様子と比較する材料とはならないであらうか、そしてまた日本の平安朝

時代に女子と男子との間の懸隔が現在の朝鮮のそれと同一だとも考へられないし、また現在の朝鮮の制度なる男女の間の嚴格なる隔壁は果して何時頃から一般となつたかも不明であるに^り今は、かゝる色々の點から嚴密なる比較は不可能で、そして絶對的の意味をなさない事だと考へらるゝけれど、寢殿造に於ける外客に接する寢殿と朝鮮の外客に接する舍廊と、そして廊下にて連ねられたる北の對の屋其他と朝鮮に於ける内房と、更らに寢殿の前の構へである中門及び表門と朝鮮の邸宅の大門との關係、これらの比較はあまりに空想的な並べ方であるけれども一應考へて置かなければならぬ事項だと思はれるのである。

更らに、溯つて飛鳥朝以來三韓を通して日本内地へ輸入された伽藍の作り方は、現在考古學的研究的對象としても明かに存してゐるところであり、伽藍の堂宇にはそれらを取り圍んだ廻廊が建てまわされてゐるのが一般であるが、それらの廻廊と關係して考へなければならぬ事を少しく述べて置く。

朝鮮の民
家の伽藍
の廻廊

私の朝鮮の民家を見て歩いて驚いたことの一つは、朝鮮の一般の民家の構造及び間取は日本内地の伽藍に見る、かの廻廊と同一手法であることを見たことである。即ち朝鮮の民家の部屋々々の取りかたは、柱間一つ宛が部屋の單位になつてゐて、桁や梁や小屋組の方式も殆んど廻廊のそれと變りがないと言つていゝのである。即ち丁度伽藍の廻廊の柱間へ隔壁を設けて作られる一劃づゝを一部屋にした事になつてゐるのである。建物の奥行も普通一間づゝである。伽藍の廻廊は伽藍の壯嚴を作り出す爲めの裝飾的な意味で發達し附け加へられたものだと考へねばならぬであらう。たとへ堂から堂へ通ふ爲めの廊下となり、また法會の際の行列の爲め、

乃至それに參加する人々の便宜の爲めに設けたと言つても、その本質的意味は裝飾的なものと考へぬわけに行かぬ。

然るに朝鮮に於ては、上流の家でも、一般民衆の家でもこれと同等な作りのものを全然實用として作つてゐて、伽藍の廻廊に於ける如く空虚にしてはゐないのである。

廣い考證を要する事であるが、抑も伽藍の廻廊の起源乃至それを作る手法が何に由來したかと云ふ事にも觸れて見て置かねはならぬ。

私はこれまで奈良の伽藍を見學に歩いて不思議だと思つて氣にかゝつてゐたことがある。現在東大寺の參籠所其他に見らるゝ堂宇の作り方は、全く廻廊へ壁を付したのみの建て方であると云ふことを不思議に考へてゐたのである。つまりそれ等の建物は一つの獨立したものと見えずに、廻廊の斷片のやうに考へられたのである。しかるに朝鮮に於てはこの參籠所に見るが如きは一般の家の建て方であつたのである。

それで次ぎの考へ事に私は進んで見たくなる。

我が日本内地の古代の建築史上に缺陷として残されてをる問題なる平城京その他の計畫されたる都の一般民家の作りがどうであつたのだらうかと云ふ問題である。都の街割りは明確に研究されてをるのに、それらのブロックに住家乃至宅地が如何なる手法で、また如何なる有様に作られたのかと云ふ問題である。この問題に對して私は上の事實から、私としての研究の二三の手掛りを得たやうな氣がするのである。

今はたゞその方法だけを言つておくよりほかないが、その一つは、現在の奈良附近に見らる

村落の地割り及びそれらの屋敷に建てられてをる民家の特別な精細な調査研究である。(註4)
その二は前節に述べた開城の宅地割及家屋の研究の如き朝鮮の街乃至村落に於ける一層精細な調査研究である。而してその三はそれら二つの比較研究に、伽藍其他の考古學的材料を加へて研究に努めることである。私は機會を得ればこれらの純學術的な研究を尙ほ進めて見たいと思ふ。

日本の町
屋の發達
に關する
考察

以上で、日本内地の民家の考察に、今回の朝鮮の民家研究から與へられた、直接の諸々の暗示を連ねたのであるが、更らに最後に、今回の研究により間接に日本内地の民家の考察に資せらるべき氣の付いた點に就いて述べて置かなければならない。それは我日本内地の舊來からの町屋の發達に就いてある。

最初に言つておきたいが、日本内地の町屋は大陸よりの影響を受けたものでなく、何時の時代にか日本内地に於て獨特に發達したものでなければならぬと云ふことである。朝鮮に於てはそれに類似した少しのものも見られなかつたし、また全然それに似たものがないと言ひ切つても誤ではないやうである。

日本内地の歴史に就いて、町屋の形成せられ、發達した有様をたどつて想像してみると、戰國時代以後諸方に封侯が盛んに城を築くに至つて、そこに城下町が形成せられるやうになつたとき以來盛んに起つたのであらうと考へねばなるまい。

日本内地の町屋の間取及構造は、その敷地の地割りから必然に生れて來たものだらうと私は考へてゐる。その町の地割りは先づ通りを作つて、その兩側に、間口を切りつめて制限したが

爲めに細長い短冊型の宅地が並列し、そしてそれらの狭長な奥行の深い宅地の上に間取りを造らなければならなかつた事から、在來の民家の傳統から新たな町屋が發達したものと考へてゐる。而して漸次繁榮におもむいた町にあつては、家々の後ろの空地を利用してそこへ更らに家が建てられて、その裏の家々に通ずる爲めに偶發的路次 (Incidental alley) も出來て、單純な街相を見られざるに至つたものであると私は説明したく思つてゐる。(註¹)

ところが不思議なことに、北方歐洲の中世封建制度以後の町には、日本内地に於けると非常に類似した間取及地割りが見られるのである。この事は偶然だらうか、又其れ等の間に互に關係があるだらうか不明であるけれど東西相通じて中世以後の發達に屬してゐると云ふ事は興味のあることとしなければならぬ。(註²) さうして前章に私は世界の民家の系統を述べた時に觸れた所謂舊文化系の國々に於ては概してより密集した集團的な起源から町及村落の發達がはじまつてゐる故に、概して中庭をもつた、周壁を繞らした方式が一般となつてゐる。これを時代に換へて言ふならば、古代に於ては、或は古代に於て榮えた國々に於ては、西洋に於ても、東洋に於ても、概してほゞ同様な地割りで、而して民家の間取もほゞ同系統のものであつたと言へるのである。

この節に於ては頗る各種の研究上の問題に觸れたが爲めに、錯雜した述べかたになつたのを許していただきたい。

(註¹) 拙著「日本の民家」參照。

(註²) 工學博士佐藤功一氏の談話による。

(註) 此問題は近來我國の學界で注目されてゐるもののやうであるが、特に建築に關した研究として私の見るを得たものでは梅原末治氏著「佐味田及新山古噴研究」第三章第一節の論究がある。

(註₄) 拙著「日本の民家」の「奈良郊外の農家」の項はそれらのうちの簡単な一斷片である。が特殊な方法を以て數個の部落の精細な研究を必要とする。

(註₅) 拙著「日本の民家」の「地割と家との關係」の項参照。

(註₆) 日本の城廓の築造法が歐洲より學びたりと説かれてゐるやうであるが、それに伴つて地割の法も輸入せられたかどうかとも考へて見ればならぬ。

第三章 内地人と交渉を持てる民家

第一節 朝鮮の人達の改良住家

改良住家の大勢

改良と云ふ言葉は不適當かも知れないが、兎に角新らしい時勢の影響を受けて、上に説明したやうな古來の固有の住家に満足することが出来なくなつた朝鮮の人達は、どう自分達の住家を新らしく工夫しつゝあるかと云ふことをこゝで述べて見たいのである。

然し、私の接し得たこの方面の範圍は極めて僅少だつたから、偶然觸れることの出来た實例を紹介しておいて、而してそれらに就いて丁寧な考へて見ることに止めたいと思ふ。

住家の改良を試みてゐる人達は、活氣のある智識階級者達であり、生活の向上を願ひ、日常生活をばより良くしたいと望んでゐる人達であることは言ふまでもない。然し、朝鮮に於てはかかる方向へと實行してゐる人達は、尙未だ、將來の新らしい時代への先驅者達として孤立してゐる状態にあると感ぜぬわけに行かなかつた。

在來の住家の造りに各々特徴をもつてゐる、北部の人達と、一般朝鮮の人達との間には、一般の習慣に對して精神的差異を持つてゐる事實が、各々の改良住家に於て際立つて明瞭に現はれてゐたことを感ぜしめられた。

北部の人達は思想的で素朴で露骨であり、南部の人達は情味的で繊細で調和的である。北部の人達のものから説明して見やう。

二 圖版第九は咸興の洪聖淵と云ふ人の家であるが、この家は廣く咸興の街を見渡せる丘の中段に建つてゐるのである。在來の北部の普通の型の間取の家に、新らたに純内地風に近かい四部屋を建て増した點が、この家の特徴である。内地風の四部屋の列べ方は如何にも朝鮮風に取り扱かつてゐるが、その構造は、疊敷襖建の純内地風の造りである。そして、この建て増しは來客及息子さん達の爲めにしたのである。即ち前に述べた舍廊を簡單に門の側に便宜に建てる咸興の風習に従つたのであるが、かく内地風をそのまま採用したのが、北部の人達の氣風が素朴であると考えられるわけに行かぬのである。外觀の寫真圖版第九の寫真は、その内房の部分である、門の傍に建てられてゐる建物は附屬的のもので、傭人及物置に充てたものである。要するに此の住家は内地ならば、東京の山の手方面の在來の内地風の住家へ、應接間を建て増した折衷式に相當するもので、こゝではそれは鮮和折衷式である。

三 圖版第十は、同じく咸興の韓洛用と云ふ人の住家である。この家は全體の間取りの組織が、より多く内地風になつてゐてこなされて作られてゐる。玄關の取り方、客間居間の備へなどの方は内地風にかたどられてゐる。外觀に至つては圖版第十の寫真全然内地の家そのままである。客間の備への床の間、違ひ棚、押入等まで全部純内地風である。然し内部に、北部朝鮮に一般であるところの四つ目の間取の溫突の備へをば右半分と、奥へと二た揃ひ取り入れて、こゝをば純朝鮮式の溫突としてゐる。内部は全然開放的で、前の溫突の部分は居間兼客間であり、後の溫突は子供室になつてゐる。尙、廊下で接續して煉瓦造りの倉庫を建て、浴室をも内地風に構築してゐる、内地風の客間の縁先には、池を設けた庭園をも造つてゐるのである。この家は前者

鮮和洋折衷の例

より一層内地風を多くとり入れた折衷式と見なければならぬ。

次に咸興で見せてもらった家は、三圖版第一の中錫定と云ふ人のもので、この家は更らに特殊

で、鮮和洋の折衷である。この家の間取の大體の方式は接客の部分と住居の部分とを區別して

その接客への部分は應接間を洋風にし、これに隣る書生部屋を温突室とし、主人は辯護士なるため、こゝを調べた

し部屋にも。而して純内地風の便所をも備へてゐる。住居の部分は内地式の部屋敷一つと、四つ目

の四個の温突室及炊事場の土間と温突とより成つてゐる。炊事場をかゝる取り方にする事は温

突を二方に焚けるやうになり、一段と便宜であるが、かゝる方式も在來から北部に於て變つた

取り方として存してゐるもののやうである。かゝる取り方をした場合には鍵の手で連ねられ、この

家の温突の煙道を假りに印して見ると、圖中の點線のやうになり、家の後方に立てた一つの煙

突から全部の煙が出る仕掛けになつてゐる。屋敷の内部には、門を入つた所に池のある小庭園

が作られ、南向きの部分に花壇が愉快に作られてゐるが、この家も見晴らしのいゝ高臺に建て

られてゐるのである。一圖版第三は温突室の部分を南庭から見たとこである。

北鮮の改良住家概察

以上の諸例で考へれば、北部地方に於ける新住家は、願ふ大膽に新らしい生活への渴望から形成さるゝに至つたものと思はぬわけに行かぬ。温突では不活潑に流れるから日本間を作つて

見たのだとこれらの人々は言つてゐた。而して希望してゐる所のものは、寧ろ思想的な刺戟を

受けて生活と住家との改變を望んでゐるのだと感ぜられ、その爲めに先づ内地のもの、西洋

のものを、着實に受け容れやうと努力してゐる状態の現はれだと考へぬわけに行かぬ。

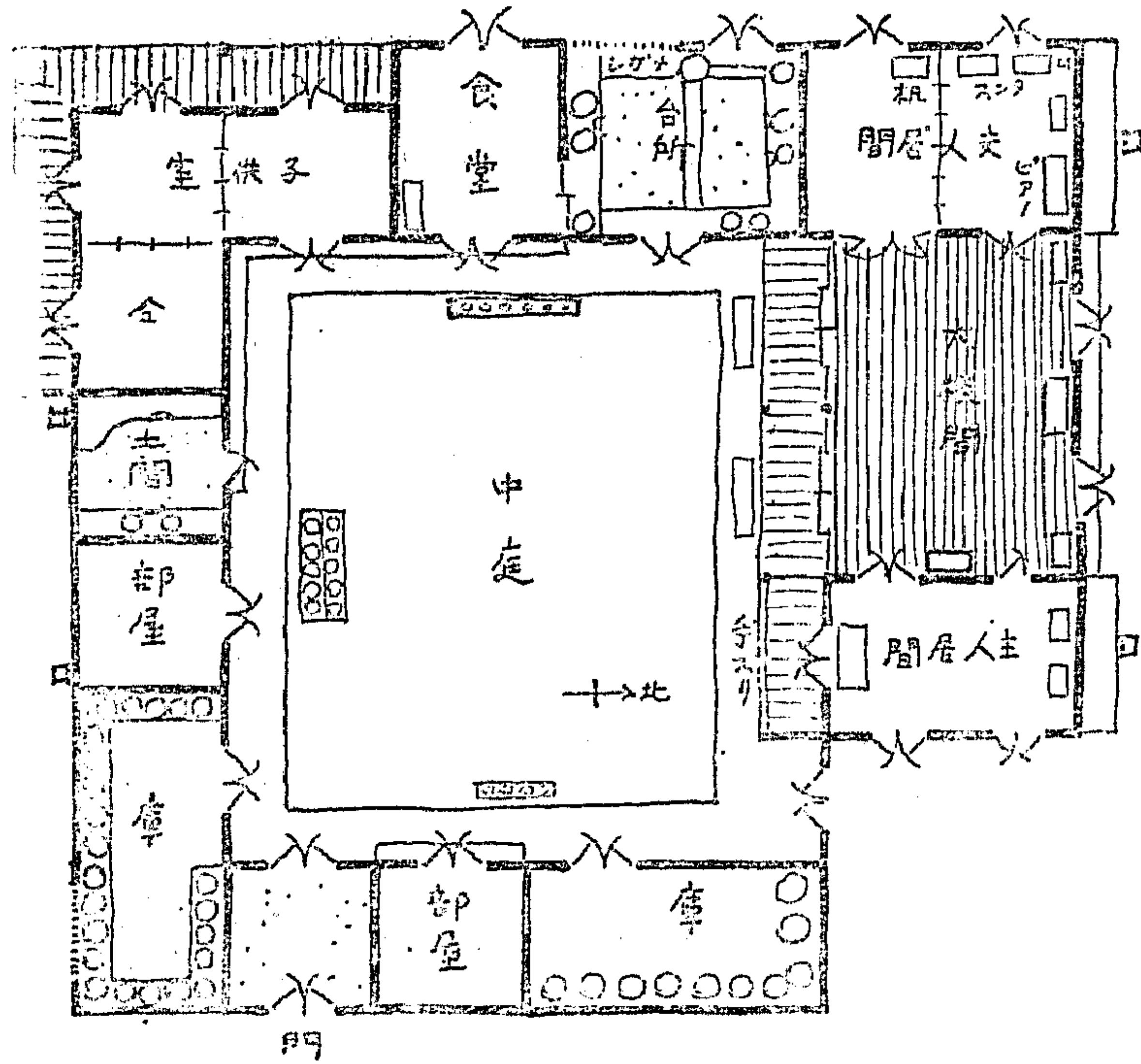
咸興の地は、前章に述べたやうに、その住家の構成は北部と一般朝鮮との交渉地に在來から

純朝鮮式
を改善せ
る例

なつてゐたと考へなければならぬ特殊な地なのであるから、この地のほかに尙ほ北部朝鮮の改良住家の實例を見たかつたのであるが、それを果さなかつたのは遺憾である。

次に、開城で見ることの出來た改良住家に就いて述べやう。開城は既に度々述べたるが如く、極めて保守的な風習をもつてゐる地である。

第二十圖は開城の金基臺と云ふ人の新築住家の間取である。一見して、この間取は一般朝鮮型の方式がそのまま用ゐられてゐることが解るであらう。即ち中庭を中央にとつてその周圍に部



第二十八圖 開城に見たる改良住家

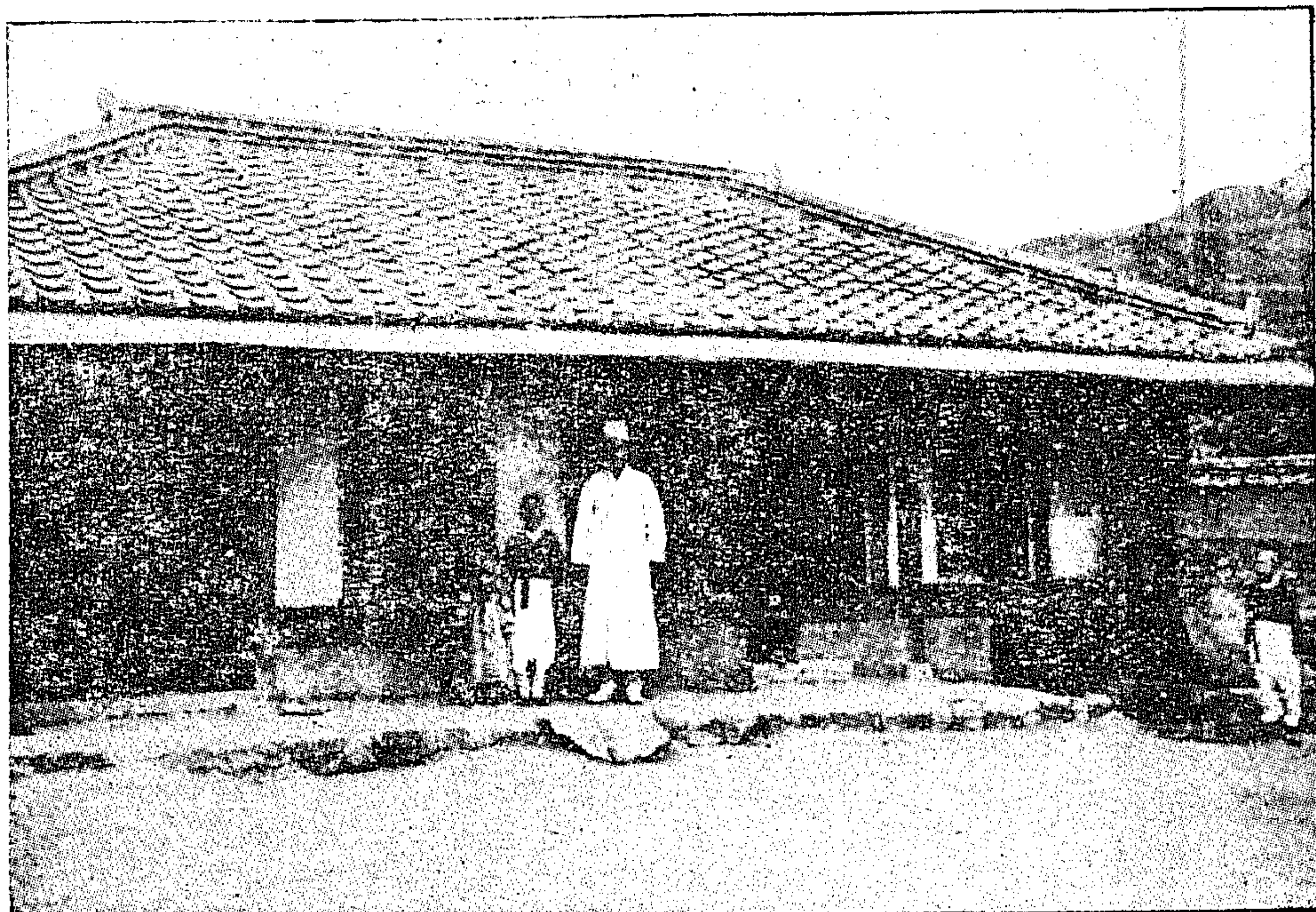
屋々々を連ね、その各部屋々々を色々な用途に供してあるやり方である。然しこの家では在來の風習をしつかり破つた部屋々々の使ひ方をしてゐる。この家の主婦なる金夫人は教養を積まれてゐる所から、夫人の考案で改革することにしたのださうである。實にこの家は一般型の朝鮮住家の改良の完全な指針であるとしても言ひたい程。總てが新しく合理的に出來てゐる。中庭に南面して在來のやうに板の間の大廳即ち廣間がとられてゐるが、こゝを客間として、然も椅子式にしてゐる。で全然西洋式の部屋の感じになつてしまつてゐる。天井は化粧小屋組が見上げられ、窓も入口も朝鮮式そのまゝの美しさをば、少しもいためられずに存して、然も其の儘洋式の部屋のいゝ備へとなつ

てゐる。其れに隣る越房は主人の部屋で、それも椅子式になり、反對の内房なる夫人の居間も椅子式になつてゐる。夫人の居間及中庭の光景は圖版三二である。如何に整家具の類をも純朝鮮の

味ひをそのまま生かしながら洋風に作り變へてゐるのである。この夫人の居間の次ぎは炊事場になるが、こゝは兩側の部屋へ温突の焚き口を設けて炊事用の竈にしてゐる。こゝに接してゐる部屋は食堂である。在來の朝鮮の家には特別な食事の部屋がない。内地でも内房即ち夫人の部屋か、板の間かにて食事をする風なのである。食堂を別に切り離して設けたことは實に大きい改良を果たしたものだと言ふべきであらう。且つ、これらの部屋々の配置は、在來の傳統を正しく存しながら、整頓し改善したる意味を盡してゐるのであるから驚かされるのである。それから子供部屋が三個その部屋に連なつて、そこには陽當りのいゝ縁側を作つてゐる。食堂及子供室は在來の坐式のまゝのものである。其の他の部屋々々をば各種の用に充てゐる。このほかにうらの門をぬけたところに便所や物置に充てられた別棟の建物が附屬してゐるのである。以上はその大要の説明であるが、この家こそ在來の美しい朝鮮風を存した然も改善の意味を徹底させた傑作のやうに思へる。

内地の住家参考として改良したる例

南方に於て私はもう一つ改良された住宅を見ることが出来た。それは金泉の秋應天と云ふ人の家である。この家の間取を詳細にさがつたノートが不幸にして紛失したので紹介することが出来ないのが残念である。九圖 はその家の寫真であるが改良されてゐるのは住居に使用してゐる母屋だけで、別に舍廊が設けられてゐる。この家は部屋の間取を細かく工夫してあつて、内地の家の作り方の手法を各所に取り入れたもので、屋根も内地に普通見るやうな瓦を用ひ、屋根へ土を厚く載せて朝鮮特有の反りを付してはゐない。



第 九 十 二 圖 金 泉 に見て改る良住家

以上は數個の例の研究に過ぎないが、これ等によつて北方の人達の家の改良が露骨な折衷であり、南方の人達の家の改良が細部にわたつた研究をそのうちに含めてゐることを可成り一般的な事實だとして考へていゝやうである。北方の人達の改良は、無邪氣な、質朴な、進取的な精神から來てゐるけれど、南方の人達のものは、住家としての研究から來てゐて、綿密で而して眞實味をもつてゐる。これらの捨つることの出來ない何れものいゝ美しさは、果して將來に、朝鮮の人達の住家をばどう開發さして行くであらうか、私達は期待をもつてそれらを注目し、而して本當の朝鮮の人達の朝鮮に於ける生活が動かすべからざる力まで早く成長せんことを祈らずにゐられない。

第二節 農業移民者の住家

最後に紹介して置きたいのは内地の農業移民者達の住家の状況の事である。勿論この標題の下に詳細な調査を進むる時日を持たなかつたから、私のなし得た範囲に於てしなければならぬのを遺憾とする。

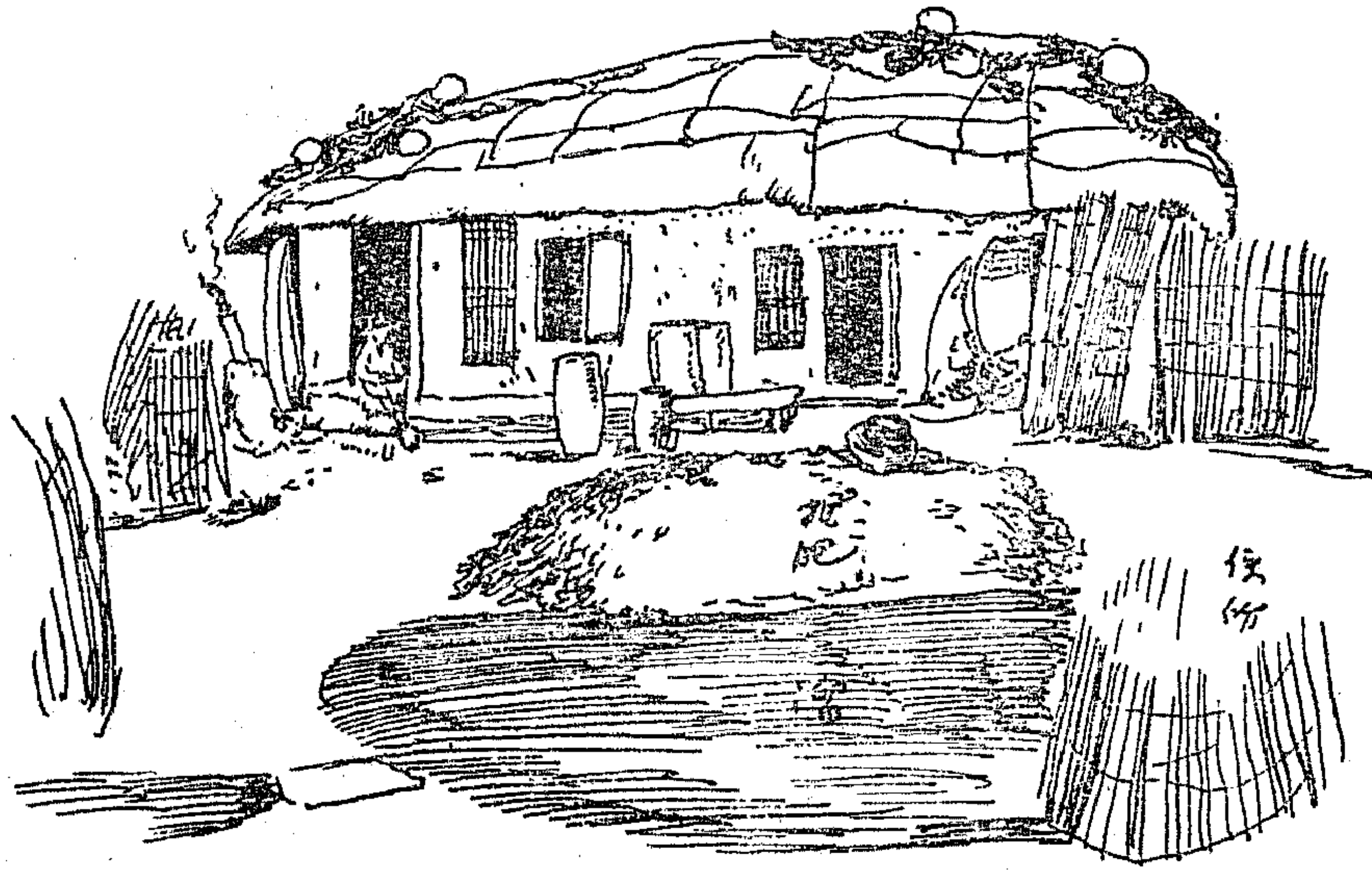
朝鮮の農家

それを述べる前に、私は朝鮮の農民の住家に就いて一と通り紹介して置きたい。各地に散點してゐる移民者達の居住を定めた土地に固着した背景を形成してゐる村落の家居の一般を知つてもらう必要があると感ずるからである。

前に既に述べた如く、朝鮮の村落は多く、家々が裸かのみかたまつてゐる。屋敷の中に樹木をもつことが少ない。藁葺屋根の母屋や附屬舎が、田圃や畑のそこそこにかたまりをなして部落が形成せられてゐる。一般の家屋の間取り及構造に就いては既に第二章及第三章に於て説明してしまつたのであるが、農家としての特殊な説明をやつて、部落の内部の氣持ちを尙よく知つてもらはねばと思ふのである。

農家の母屋と附屬舎との關係はどうなつてゐるかと云ふと、一般の朝鮮の民家の間取りで説明した様になつてゐて、やはり北方と南方との間には差異が出来てゐる。圖版第三三三と第三三五を比較して見ていたゞく。圖版第三三三は平安南道江西郡三三三は江西面三墓里郡のもので、普通の大きさの農家から極く小さい農家までの研究をやる爲めにしたのである。これによつて、極小農から普通農までの家居の發達生長の有様をも考へることが出来るであらう。

この家のある部落は比較的農業に熱心なところだと言はれてゐる。而してAの農家は水田三反歩。田(畑)一町五反歩の自作農である。家屋の配置は、母屋と牛舎物置を含む附屬舎とを二の字型に置いた方式になつてゐるが、第二章第一節参照その棟々の構成されてゐる區域の外に、南方に向いた廣場を設け、そこを圓形に作り穀物の乾燥場としてゐる。北方のものに於ては、その干場をば母屋の前に設けてゐる。圖版第三而してこの個所は土を叩き固めて作り、場合によつては砂と粘土を以て固めたものもある。

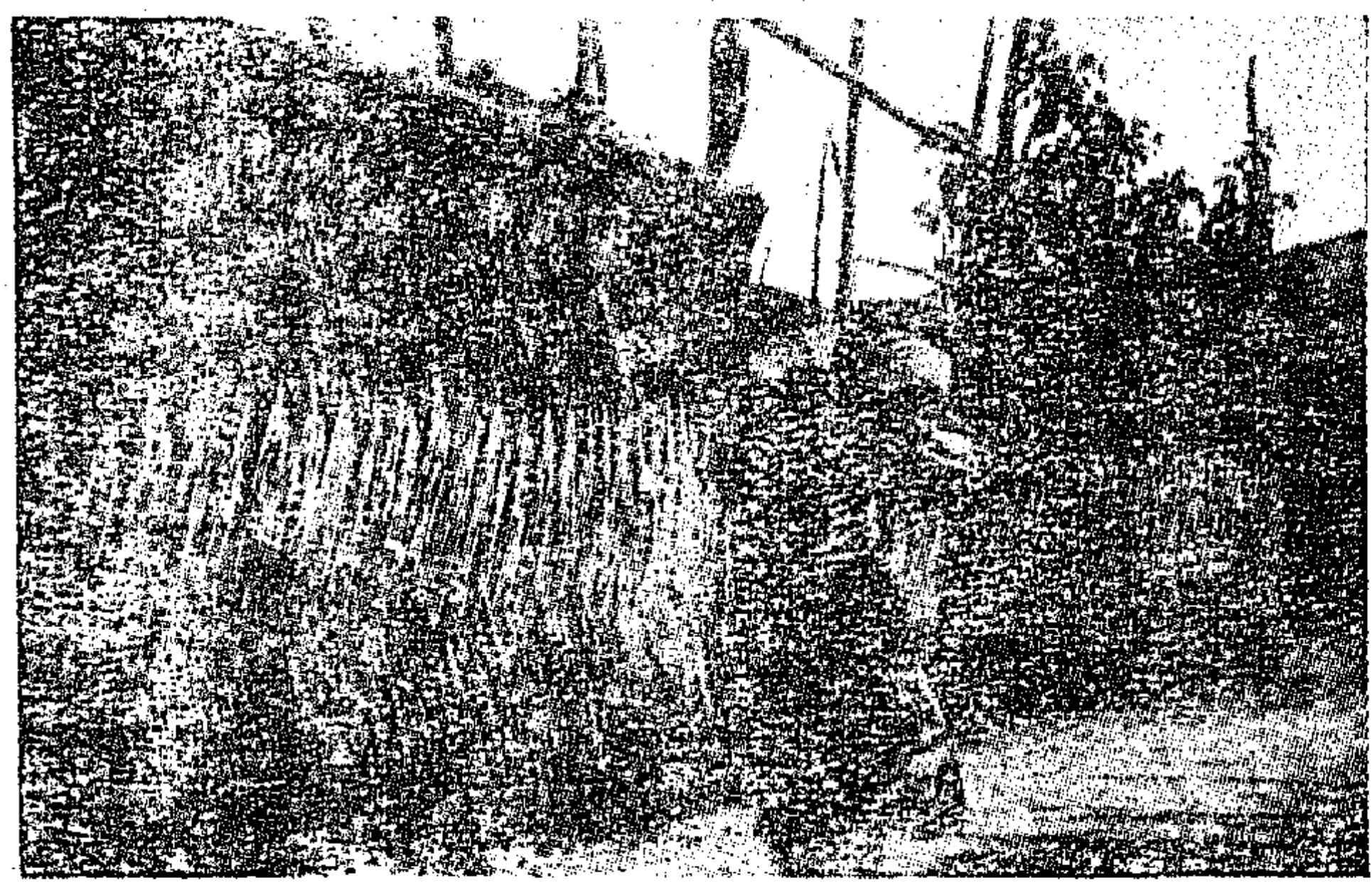


第 十三 圖 小 農 の 家

而して穀物を扱ふのにこの地面の上をぢかに使ひ、内地に於けるが如く藁を敷かないのが一般である。これらの家々で注意しなければならぬのは、堆肥の製造に就いてゐる。即ち牛舎乃至豚舎と下水溜めと堆肥を積む場所の關係は、どの家の場合でも密接な交渉が保たれてゐて、きまつた方式になつてゐるかのやうになつてゐる事である。露骨にこれらが屋敷の主要部に位置を占めてゐるから、衛生上にはとんでもない缺陷をなしてゐるであらうが、肥料の製造に意を用ひてゐることが窺へる點からは、特殊な興味をそゝられねばならない。それでこの始末をばどうしたらいかと云ふことは、良く考へた上でその方針を定むる必要があらうかと思ふ。

第三十圖即ち圖版第三三のCに於けるが如きはぎり／＼の小農家である。而して部落は殆んど隣家通しの區別が付かないやうに互

北青の例



第三十一圖 高粱の垣根

ひに混み合つて 不規則に宅地が不整形をなして
 るのである。各戸の垣根も不規則でところ
 高粱の垣根が作られてゐる。第一十
 農家の納舎と見らるべき仕事場の光景は三版第
 の如くで、一般に内地に於けるよりも不整備であ
 る。

圖版第三五、咸鏡
 南道、北青の農家

は北方のものであるが興味のあることはこの母屋の間取りが、日本内地の諸方に見る鍵の手の型の農家の間取と全く同様であること

とである。内地の東北地方に於て、厩を母屋の土間のうちに取り入れることが衛生上や飼養の上から議論があるが、かゝる農家にはその議論が同様に適用されなければならぬであらう。
牛舎を啜養この地方では夏の暑い夜美しく叩き固めた干場の中央に火を焚いて、その周囲に人が集まり、焚火の明りで女達が麻を割り、男達が草鞋や縄綱ひの仕事をするさうである。この干場を使用してゐる状況は三版第で、寢間に當る温突の内部は同圖である。而して此農家は田(畑)三町五反歩、水田二町歩を耕作してゐる普通以上の格のものである。

朝鮮の農
 家と養蠶

尙、こゝで、朝鮮の農家に於ける養蠶と家屋との交渉を述べて置くと、養蠶は近年朝鮮の農家にも奨励されてゐるが、朝鮮の住家はその爲めには極めて不適合である。小規模のものは在來の温突室内や土間の一隅が充てられてゐるが、頗る不利な状態である。それをやるのにはど

うしても建物の坪數を増加しなればなるまいと思はれる。その方法としては母屋でなく納屋乃至物置兼帯のものでもいゝであらう。平安南道江西郡里江西面三墓で見られた大規模に養蠶を行ひつゝある家では、三間に八間の建物二棟を新築してこれに充てゝゐたが、かく大規模なものを奨励することは出来なだらうけれど、現今のまゝの家屋では、養蠶を發展させることは不能だと思へる。

内地移民の家

さて次ぎに、内地からの移民の住家に就いて私の散見し得たところを述べて置かふ。全羅北道の全州及裡里附近でそれを見ることが出来たのである。

朝鮮式の例

全州郡伊東面鋸岩里で見えたものは、在來の朝鮮の部落の中に、飛びくゝに混合してゐたものだ。而して家屋の作り方は、内地式のものゝが極く少なく、朝鮮式のものゝが多かつた。これは恐らく、この地のは個人的な移民なるが故に朝鮮の大工に家を建てさせたか、または在來の家を買取つたかによるやうである。

圖版第七 第三はその朝鮮式の住家の一例である。この家は温突三間室三を設け、其の二室の前には土壇の代りに縁を作り出してゐる。土間の部分は多少内地風を加味し、土間の裏口を出たところに井戸や調理場を作り、而して母屋に接して庇を下ろして煙草の乾燥場とした建て増しを最近に作つたのである。後方の物置も朝鮮式の構造である。外觀もほゞ朝鮮式であるが、屋敷のとり方は全然内地風であると言はなければならぬ。この程度の住家を作る費用は最近に於て、一坪四十圓見當ださうだから、約十二坪として四百八十圓かゝる計算になる。而してこの家では東拓會社の規定になる水田二町歩の耕作に従事してゐる。

この家の主人に朝鮮式の家に住んでゐる経験を聞いたならば、温突内に臥すると、はじめのうちには氣持ちが悪かつたが、漸次に温突の方がよくなり、また夜具蒲團は内地にゐるときと變りなく着、而して温突をば朝鮮の人達程は焚かないさうである。この家は大正四年
岐阜縣より移住

純内地式の例

圖版第八は同面に於ける純内地風の住家である。この家に就いては特に説明する個所をもたないが奥の板間の部分を温突に變更出来るやうにしてゐ、その前の板張りの部分をば穀物の収納及扱ひ場としてゐる。而して住居の部分の部屋を全然他と區劃してあることが、内地の農家の作り方にも参考とせられていゝと考へられる點である。また物置及炊事場兼帯の庇を利用した狭長な土間の取り方も参考となる。この家の外観は全然内地風である。また屋敷内の様子も全然内地風で庭木や草花が美しく見られる。この家は大正三年、
山口縣より移住

次ぎに見たのは全羅北道益山郡五山面の移住民の家屋圖版第四〇である。この家は長屋式の三戸建である。而してこの家はその二戸分を現在占有してゐる爲めに、間取りが混亂してゐる。家はもと東拓會社の所有に屬して十五年の家賃
だつたのだが現在は買ひ取つてしまつてある。主なる部屋は六疊一室で、それに温突を一間作つてをるが、之れは後で作つたので、冬季間は温突がなければ過されず、特に子供のある家では温突が必要物であると主人が語つてゐた。その温突の内部は内地人の温突としての特徴が窺へる土間及炊事場の様子は圖版第四〇の如く、また幾分の特徴を持つてゐる。大きい水瓶は、この地は飲用水の不便な爲め川から汲み置く爲めである。而してこの家の外観は圖版第四一のやうである。要するに、農業移住者達の住家は私の見た範圍まだ纏つた形式を存するに至らず、各自勝手なやり方をしてゐると言へる。勿論十年以上を経た人に接せないから、無理もない事

移民者の家屋と温突

であるが。而してこれらの地の移住者達は多く、關西、中國及九州地方の人で、内地に於て寒氣に慣れない人々である。溫突と炬燵とはどつちが良いかも東北地方の移住者の經驗を聞かなければ解らない。而してこれ等移民者達の住家の大きさは、十坪内外の平均と見らるべく、主要な部屋は普通六疊一間で、それに溫突一間だけは、大抵附せられてゐると見なければならぬ。

結 言

色々なことを可成りごつちやに述べてしまつた。緒言に於て全般的な感想乃至印象を述べ、第一章に於て朝鮮の民家に於ける構造の紹介乃至論究をなし、第二章に於て間取に就いての記述乃至論究をやり、而して第三章に於て現在の動きつゝある事項にいくらか觸れて見たのである。

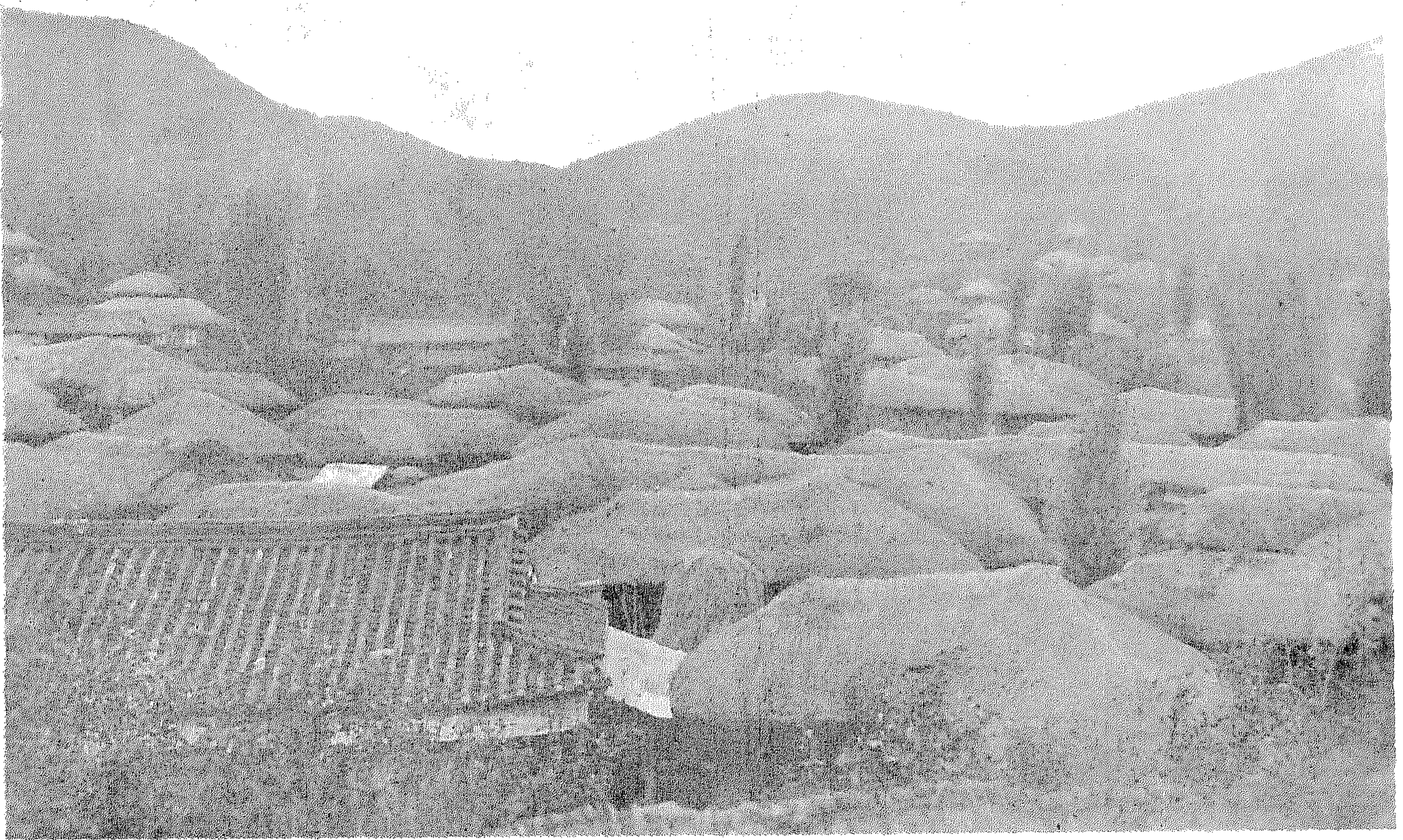
第一章及第二章は私の最も力を注いだ所で、なるだけ各種の問題に觸れやうと努めたのである。而してこの種の純粹研究では朝鮮の住家と云ふことを考へる上の基本となる各種の分析が行はるゝにより、自らそれは現在の朝鮮の住家の批評にもなる。たゞ時日の興へられなかつた爲めに多くの數字的・統計的資料を蒐むることの出来なかつたことはことわつて置かねばならぬ。また、更らに詳細な部分的研究に突入することの出来なかつたこともことわつて置かねばならぬ。

而して第三章に於ては、更らに廣き調査を必要とする事項なので、たゞ私の觸れ得た範圍に於ける觀察の紹介に止むものである。

不備ながら、これで私の一と月間で得たところになる記述並びに研究を終へて置く。

圖

版



景 概 落 村
(院 分 郡 州 廣 道 畿 京)



景 概 街 市
(城 關)



開城雲溪川沿岸の景



開城丘陵の建にたれらる民家



(城 開) 家 民 の 末 場



(城 開) 庭 中 の 家 民



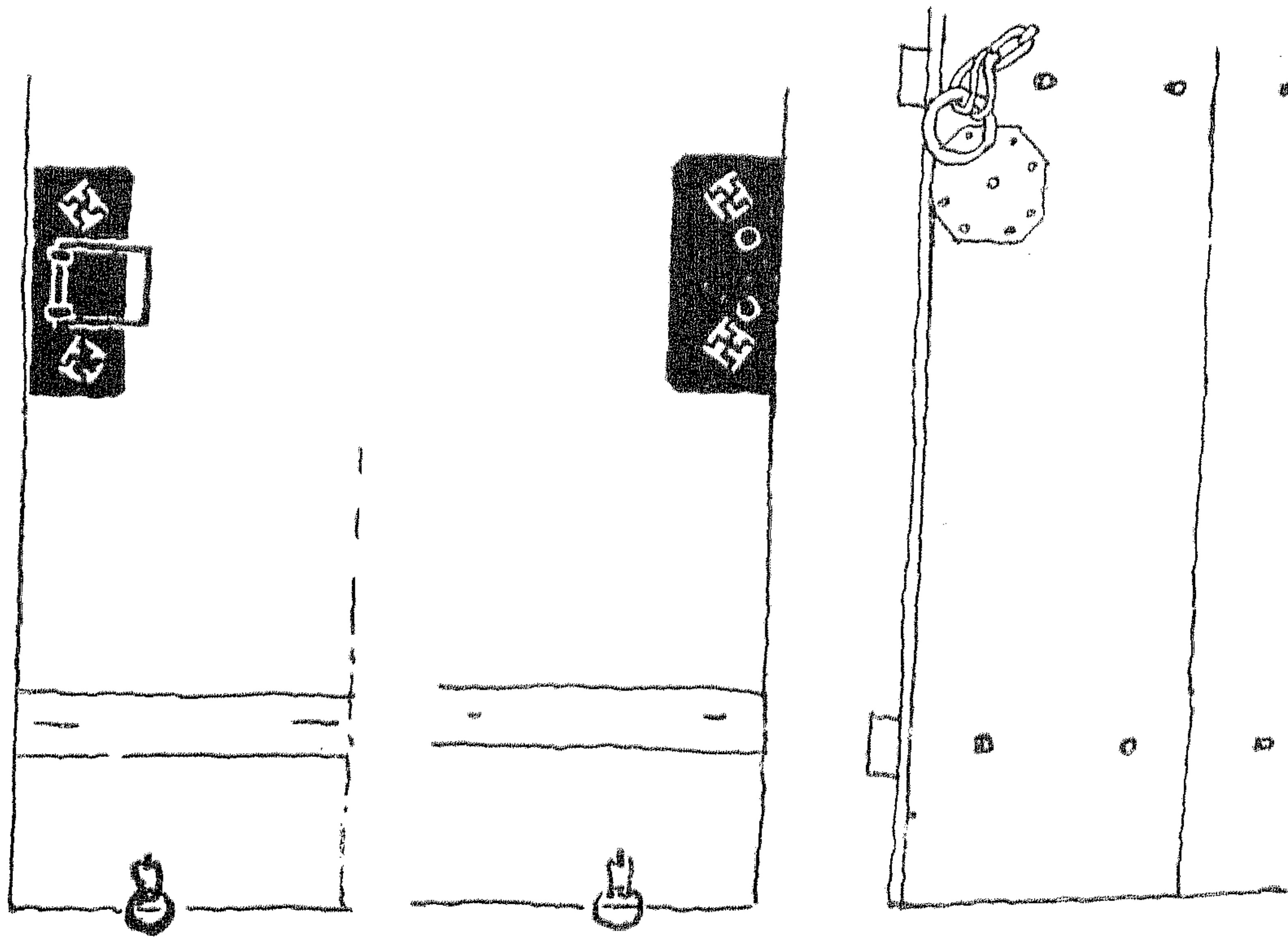
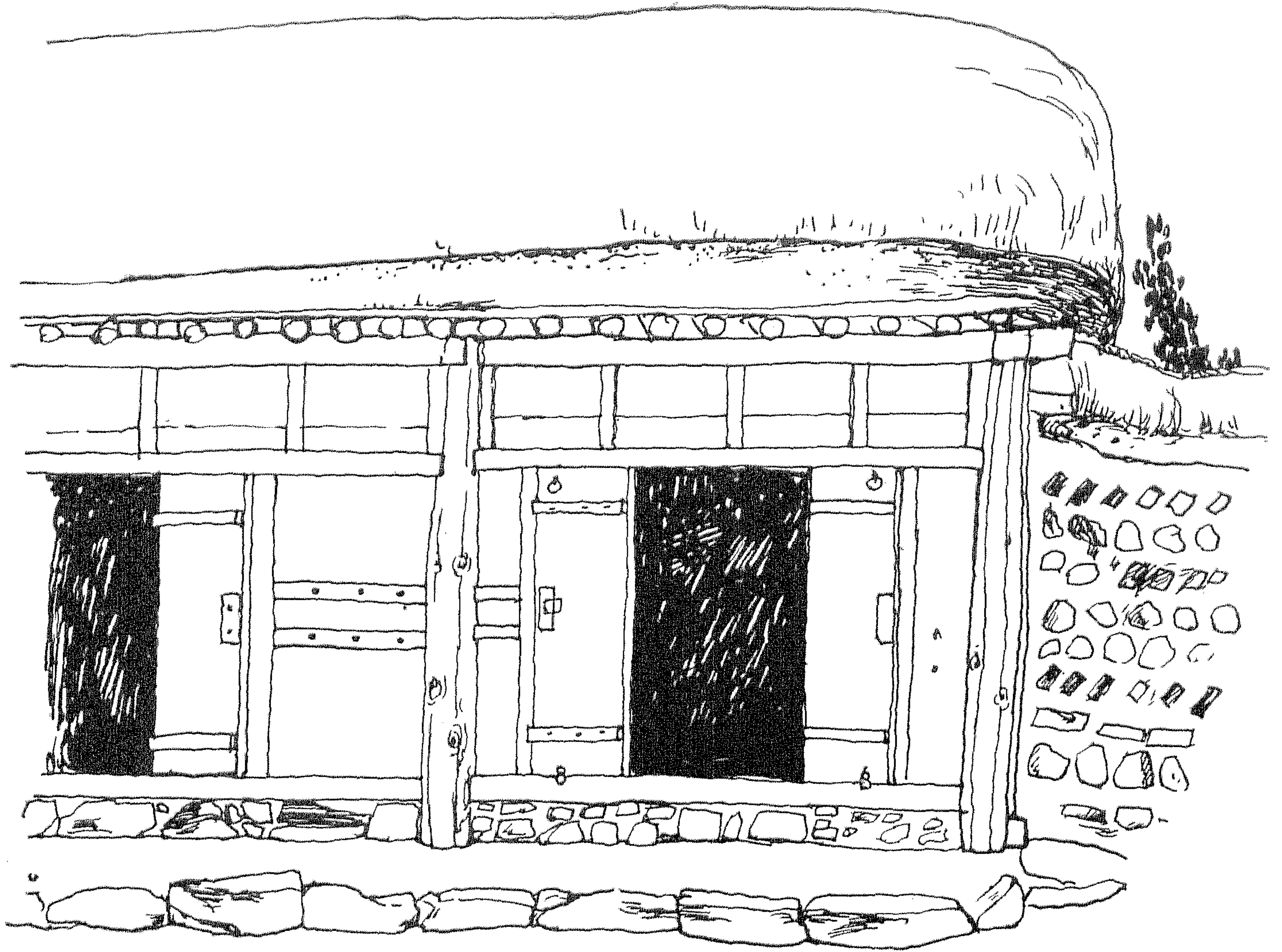
(泉 金) 家 民 の 根 屋 藁



家 民 の 城 京

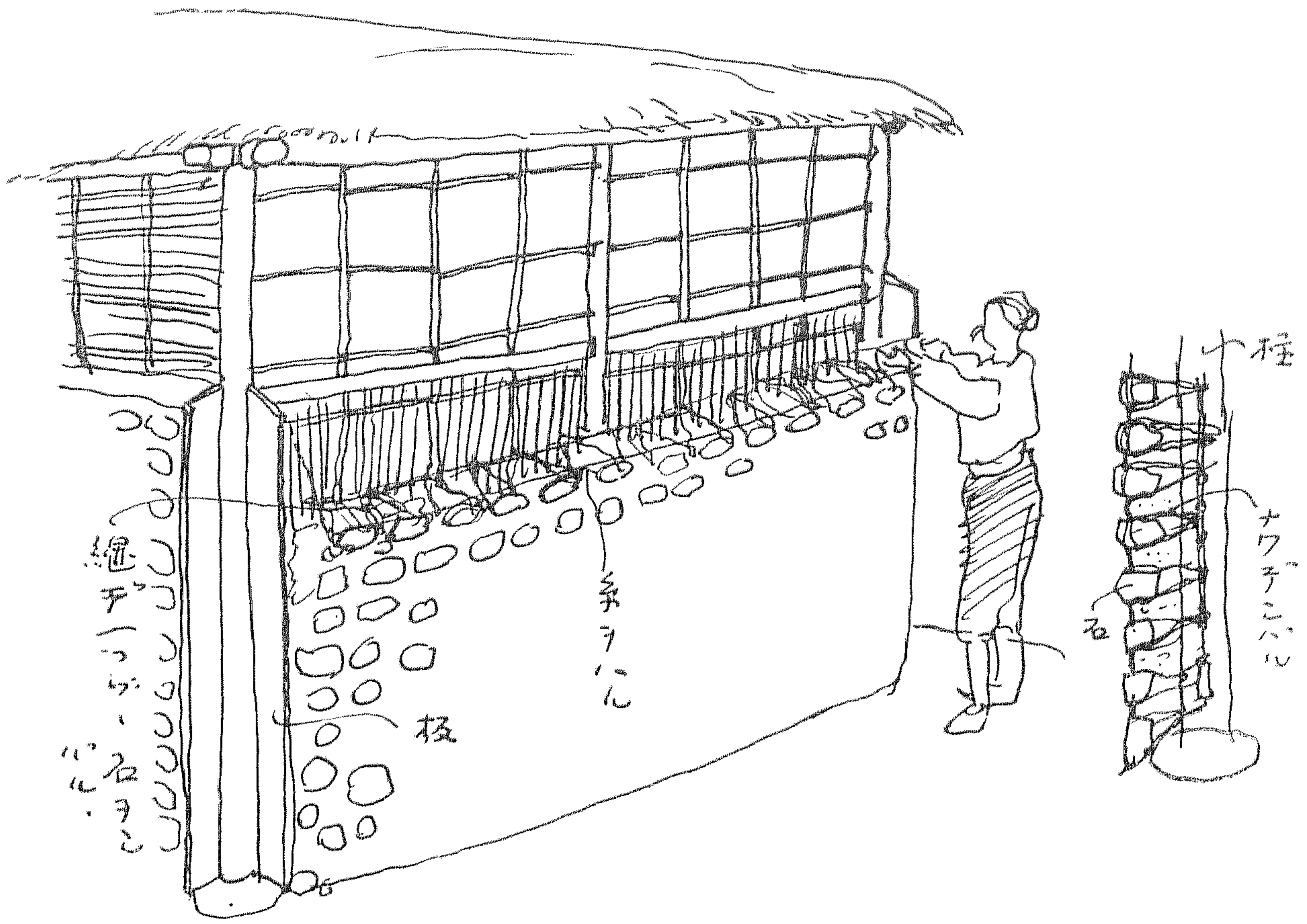


家 民 の 城 京

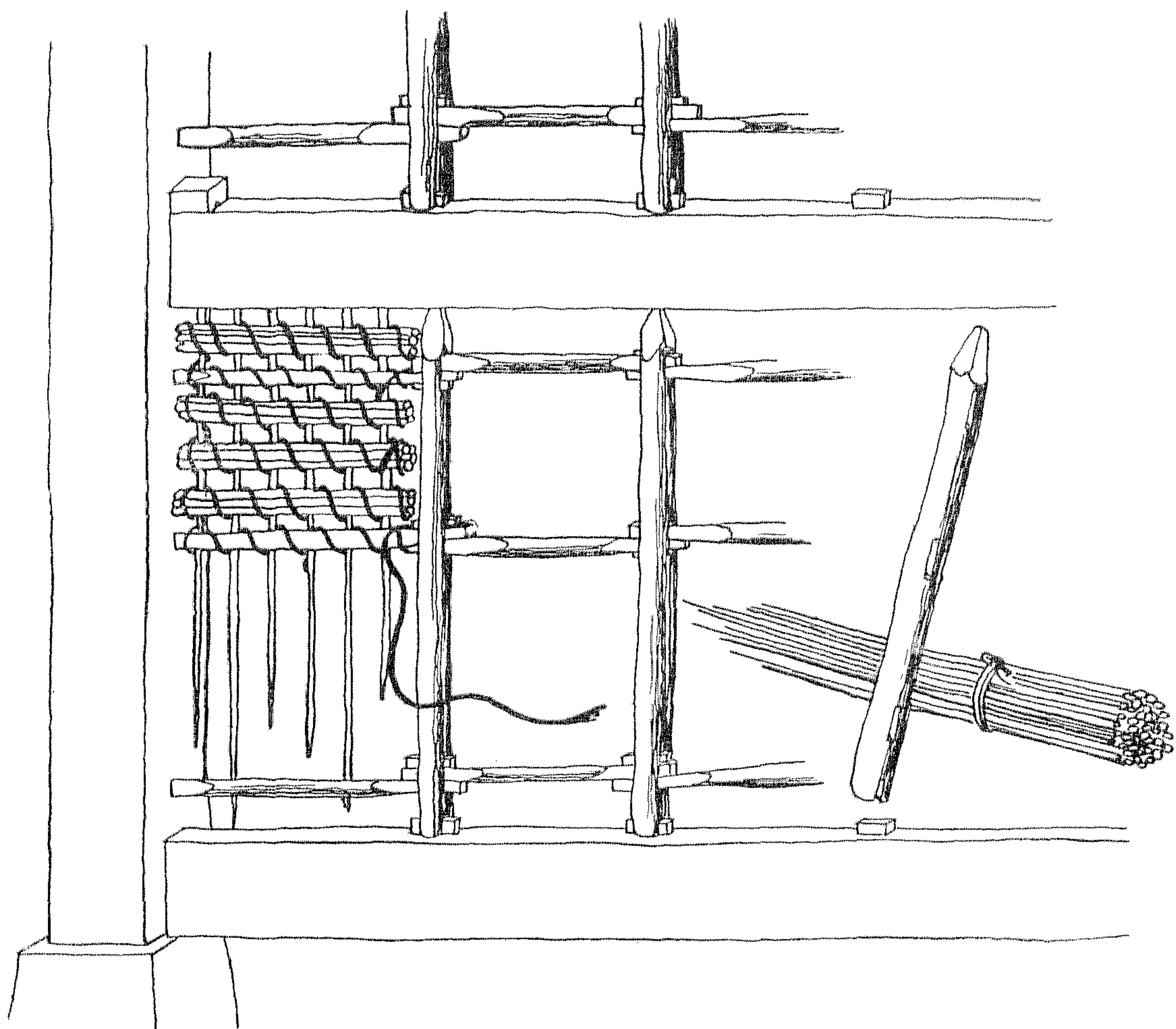


(院分郡州廣道畿京)

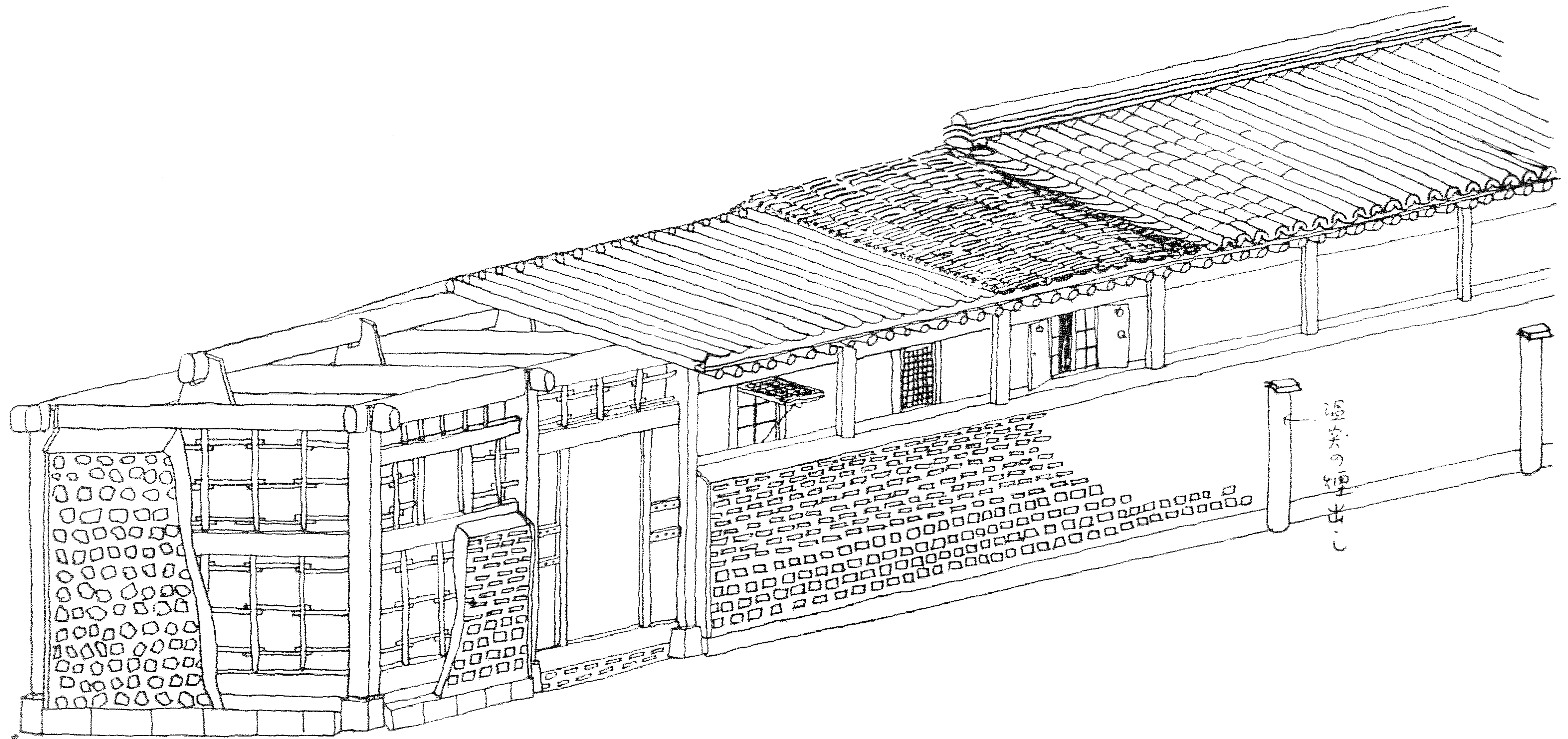
扉及店商の舎田



(城京) 況状の作工積腰の壁外



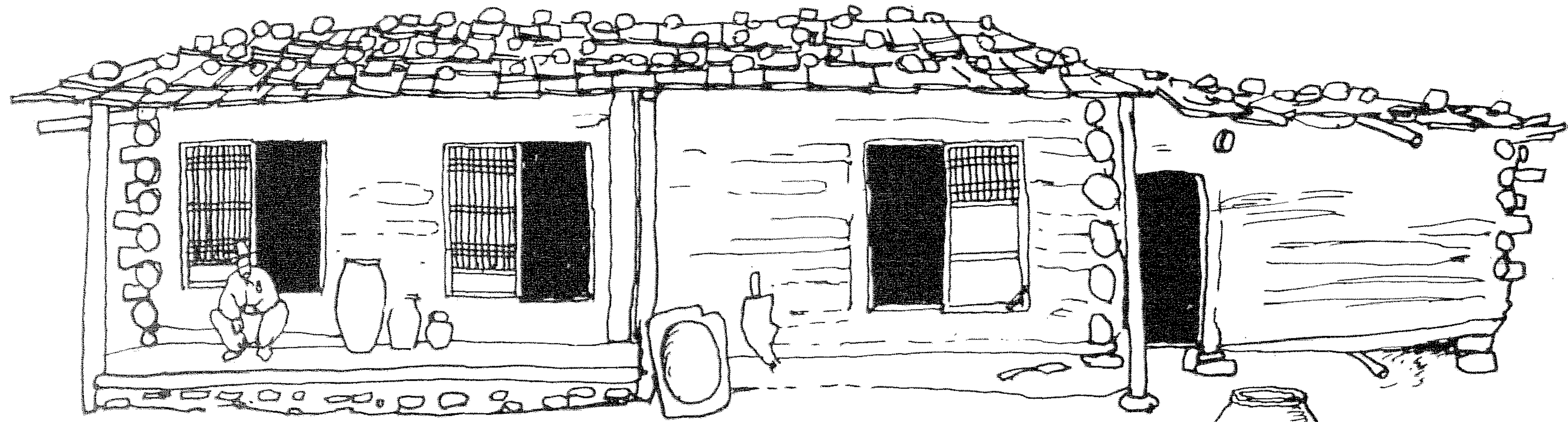
造構の眞壁



民家の模範

民家構築模範圖

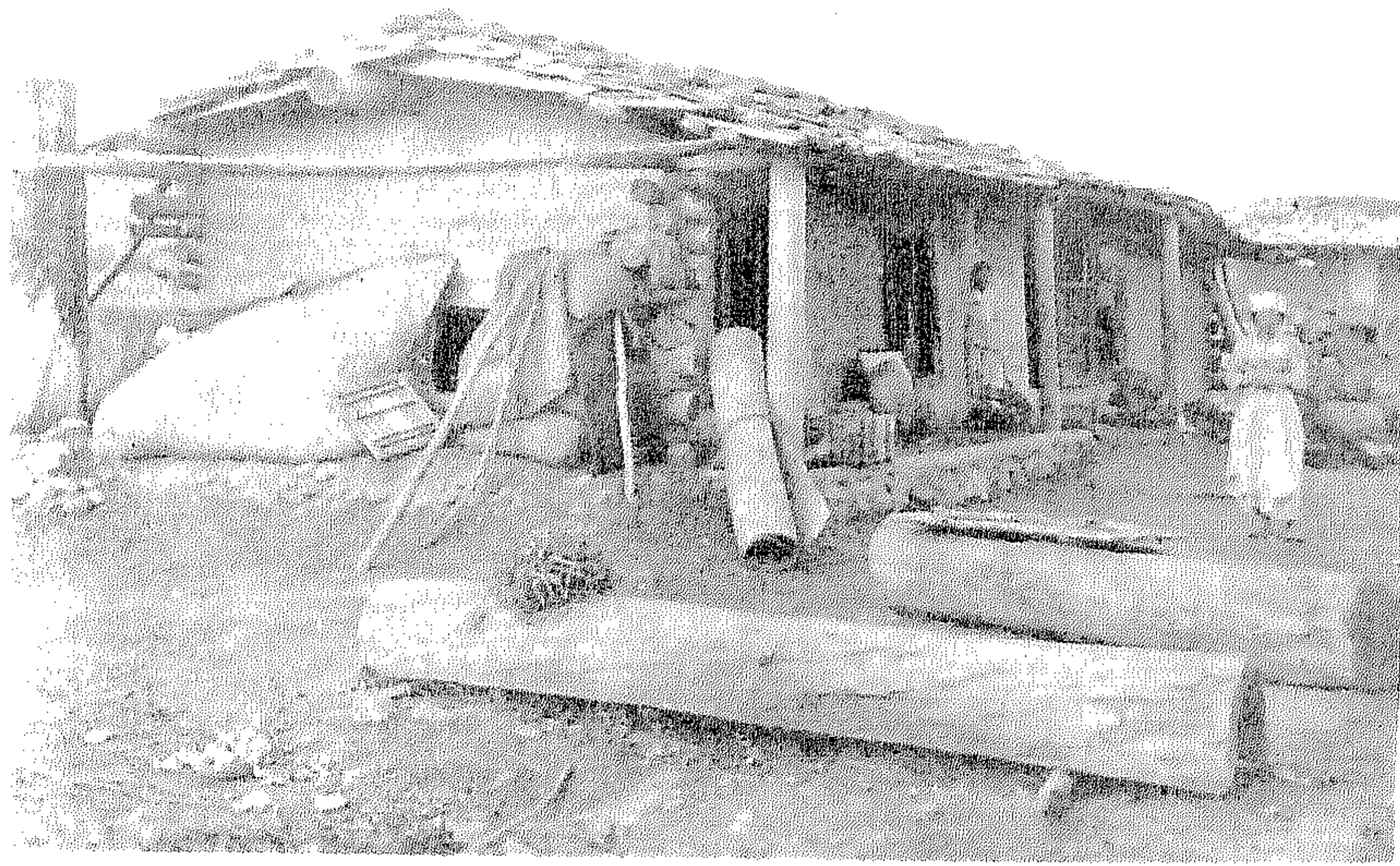
〔船越日田氏の調査より〕



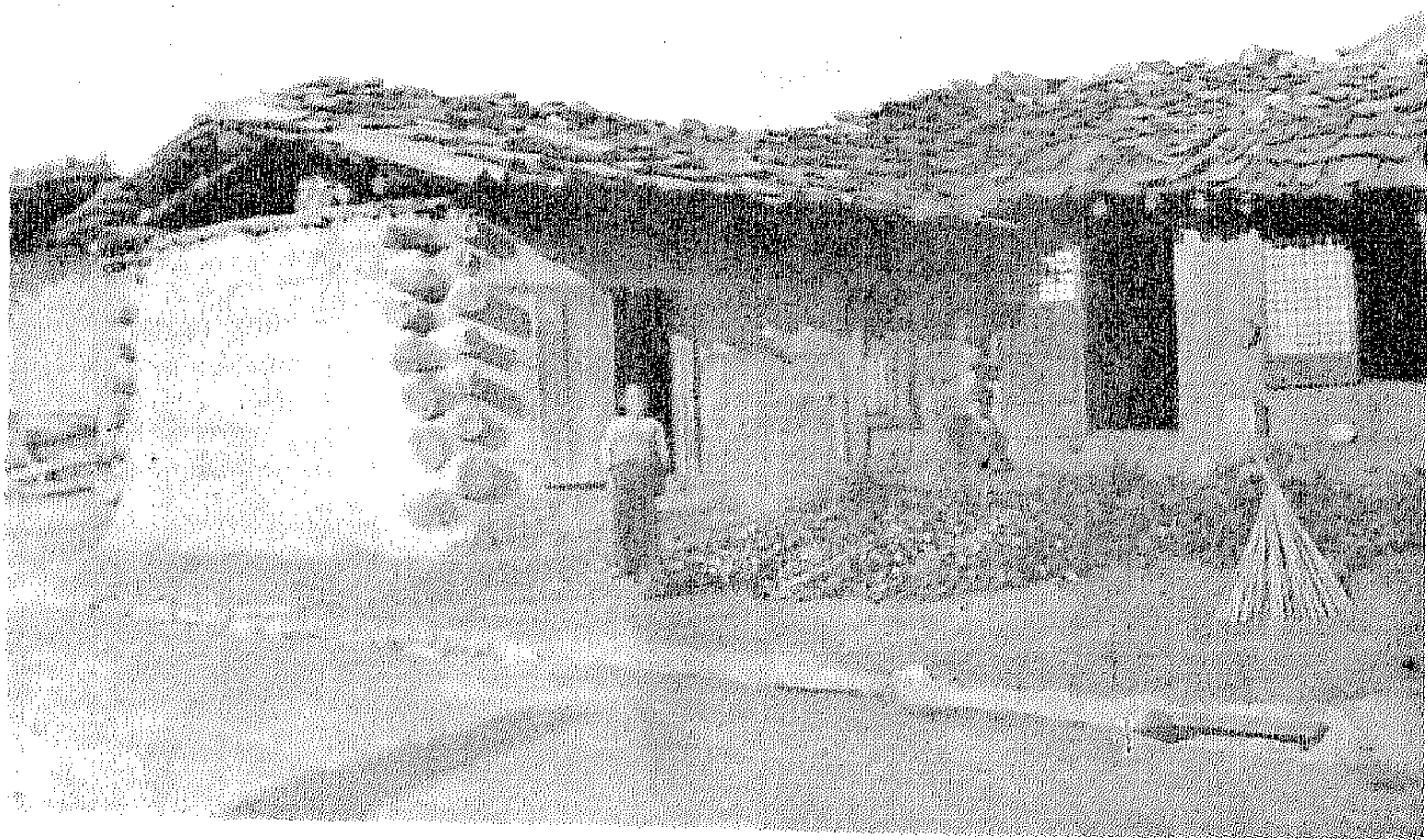
(郡津長道南咸) 部内及觀外家民の造太丸



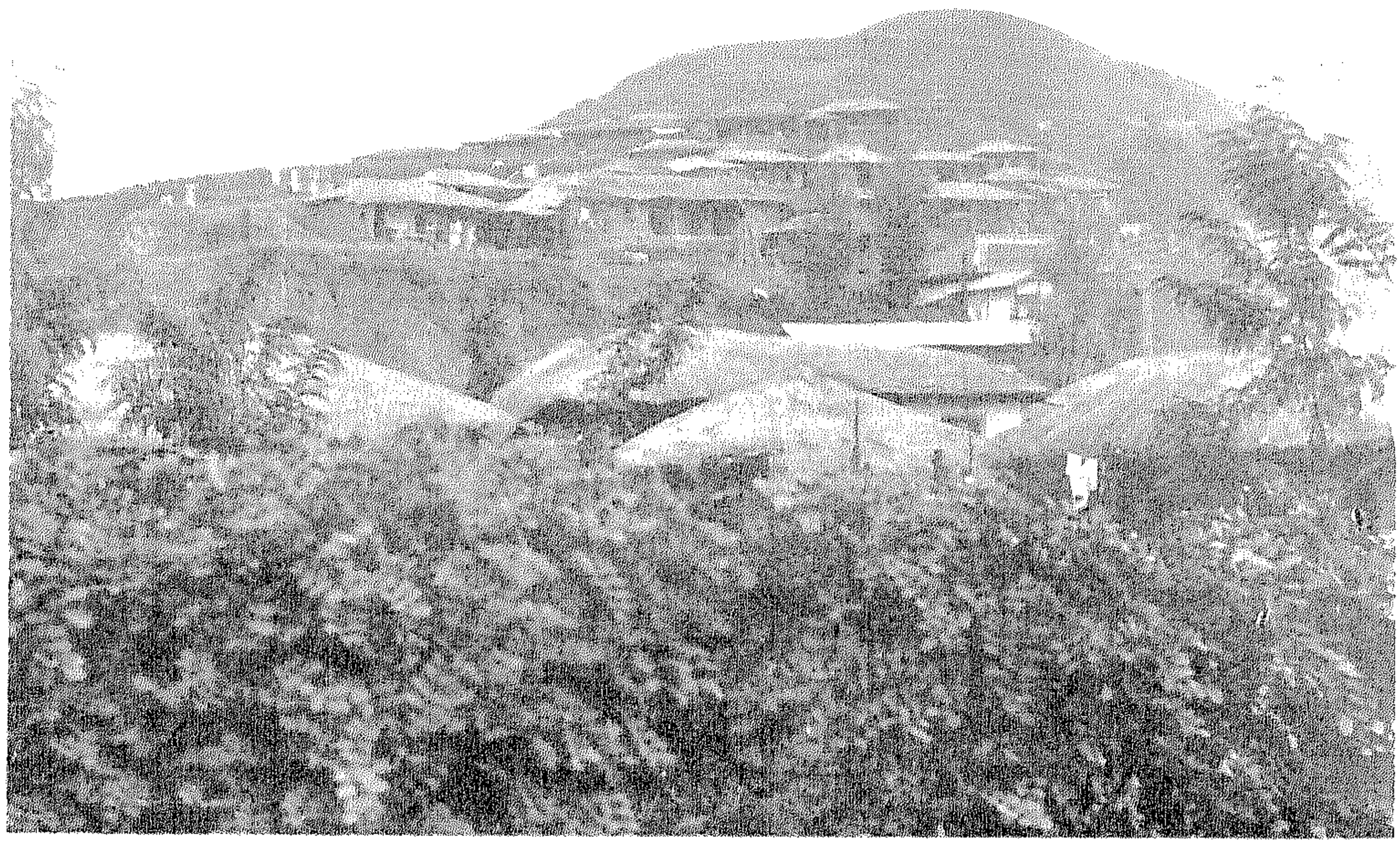
(郡川豊道南成) 家民の造太丸



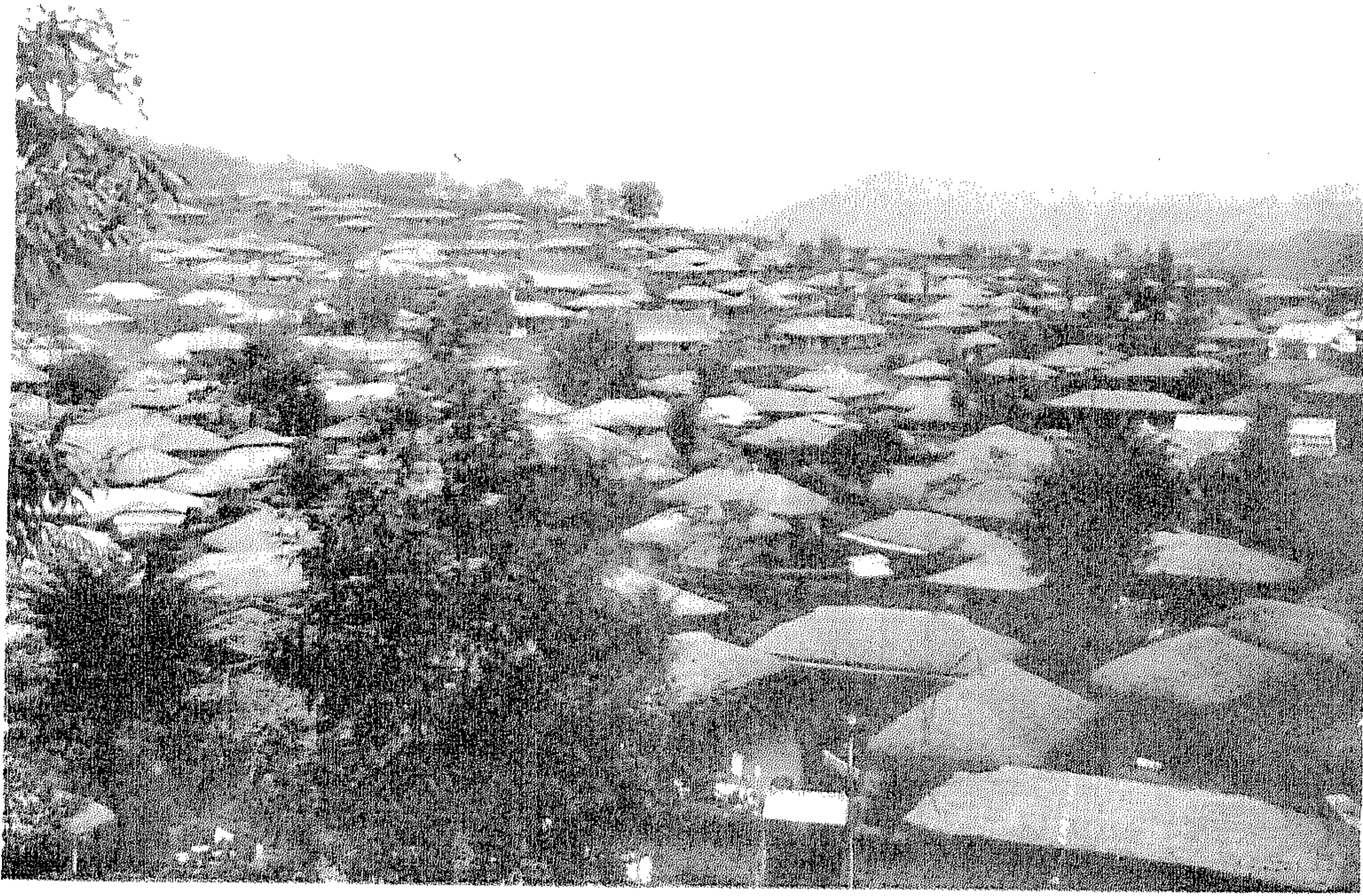
(郡津長道南成) 全



(全) 全



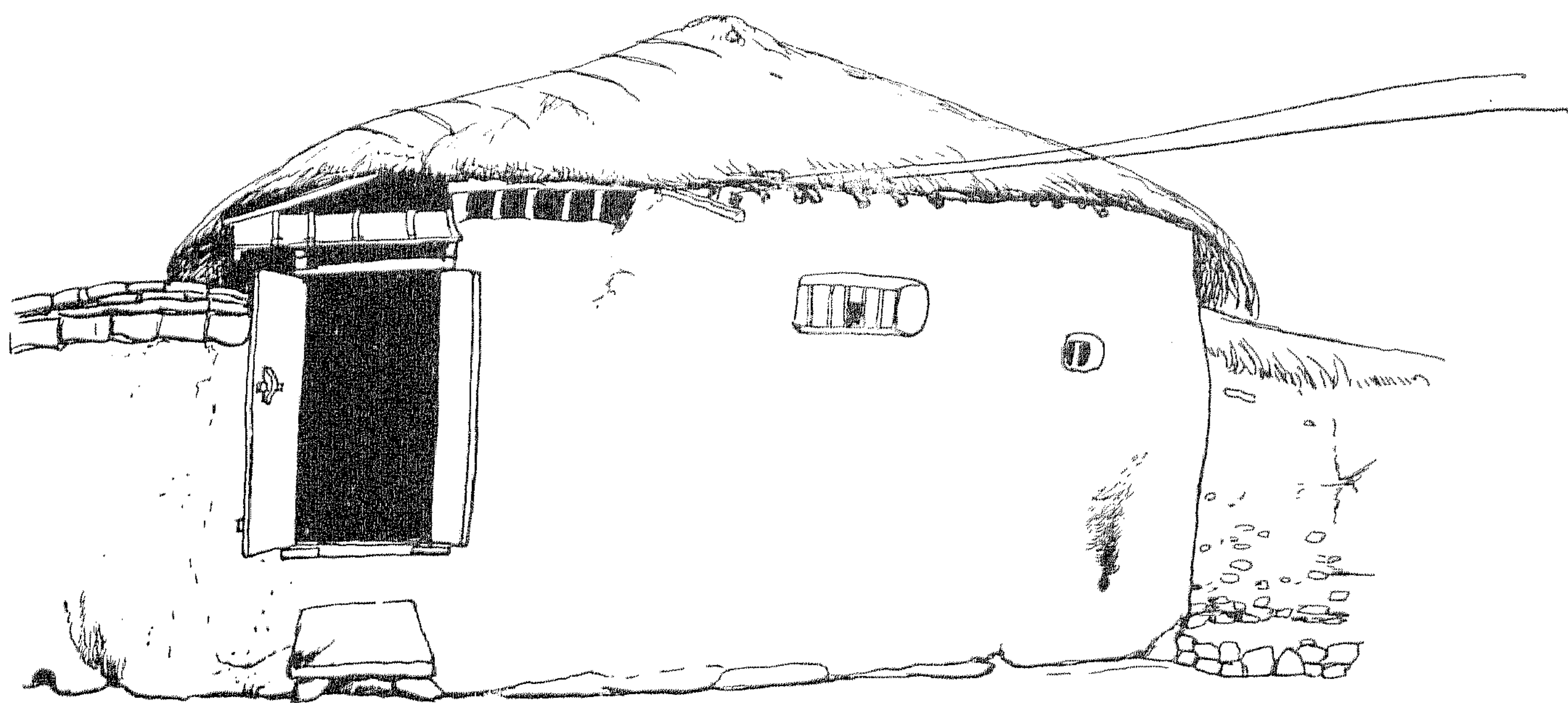
末場内邑泉金



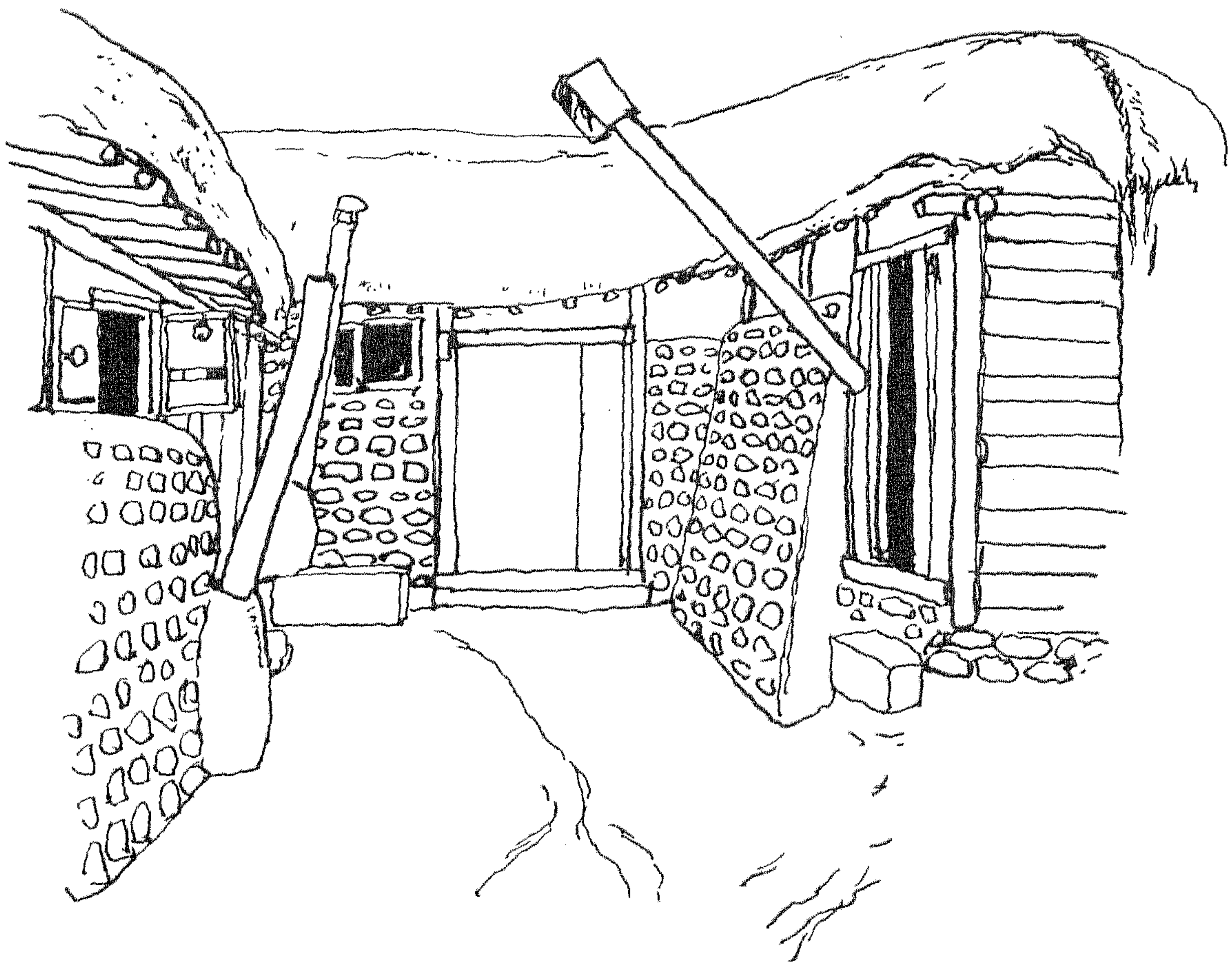
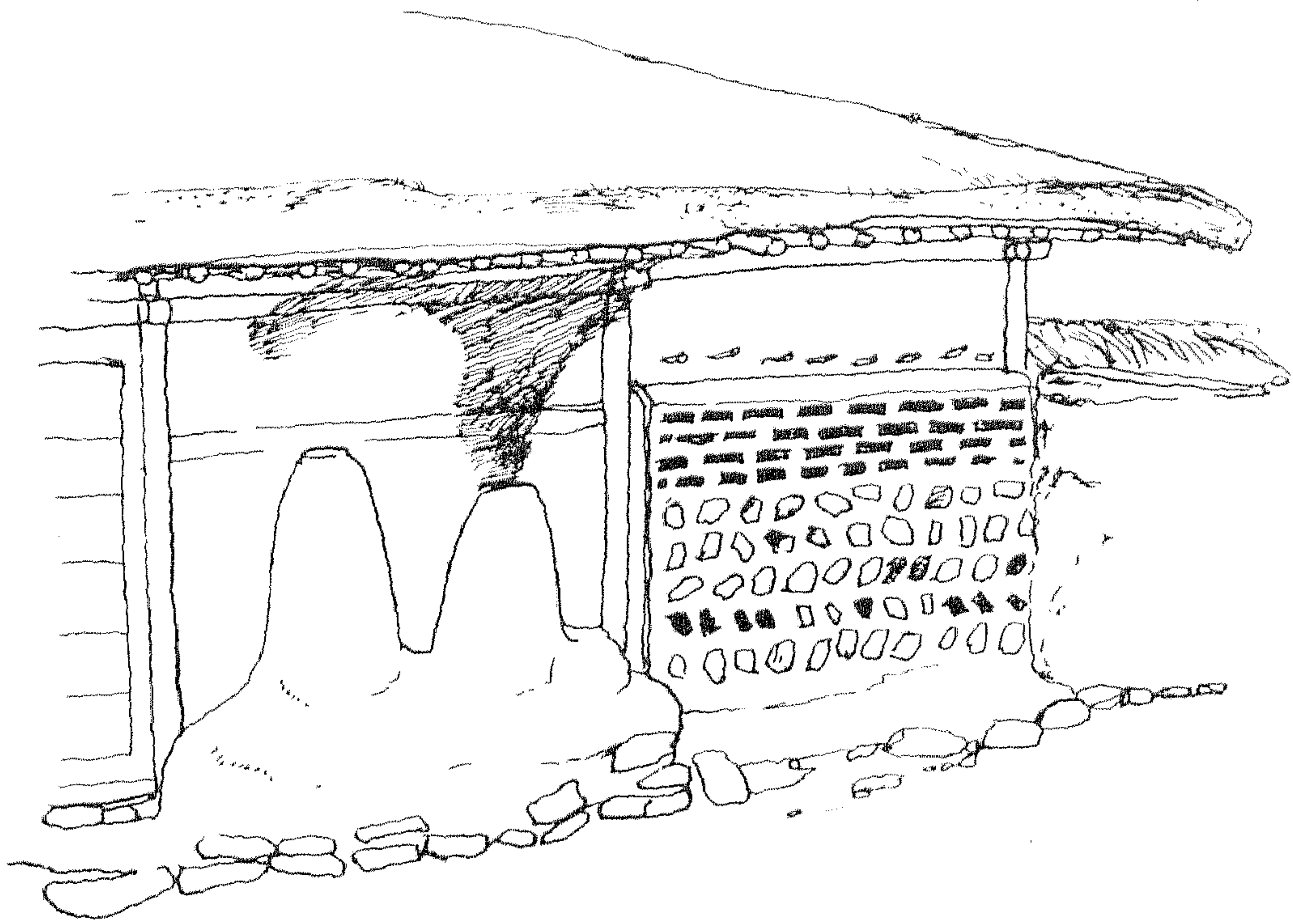
景概内邑泉金



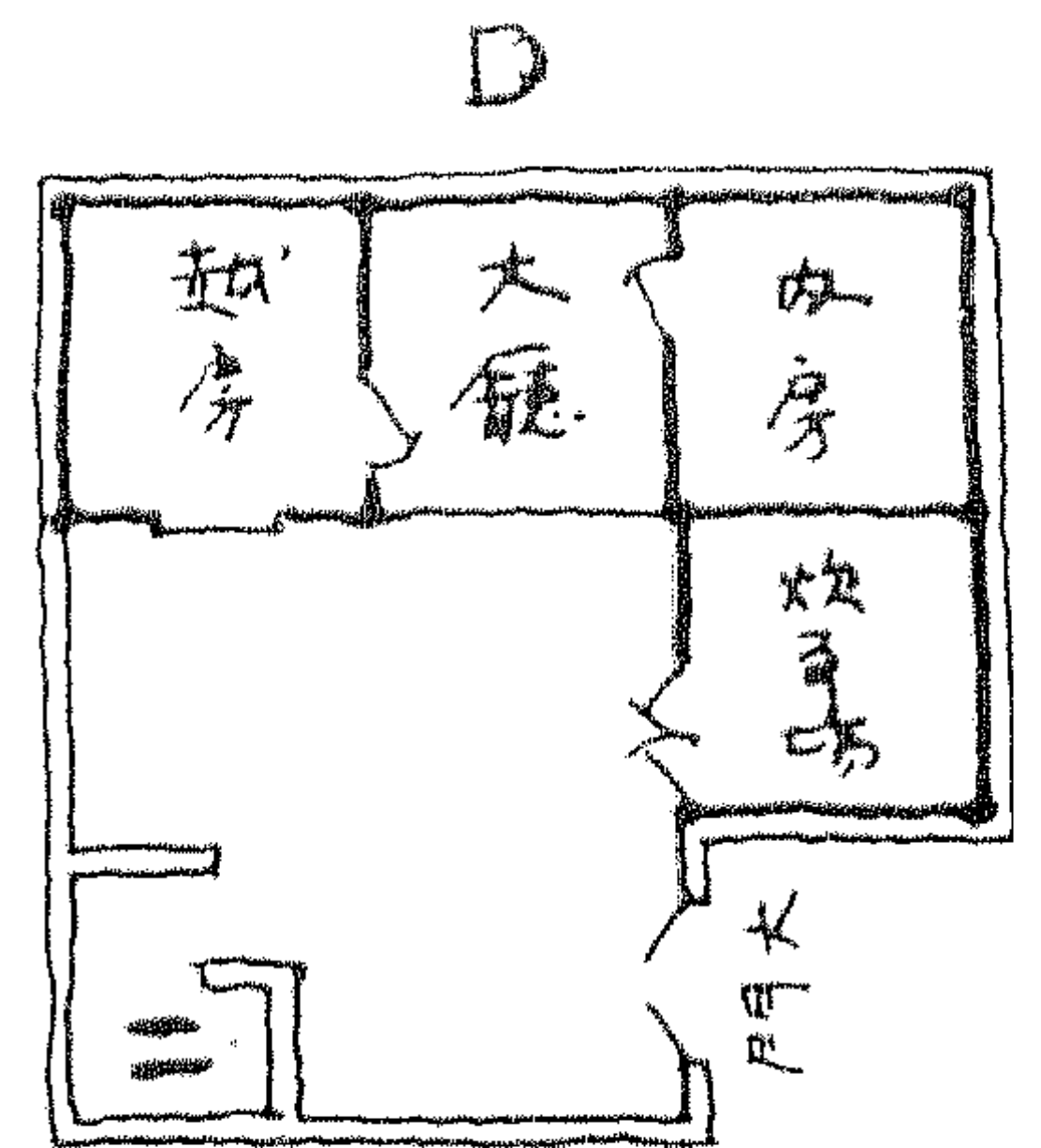
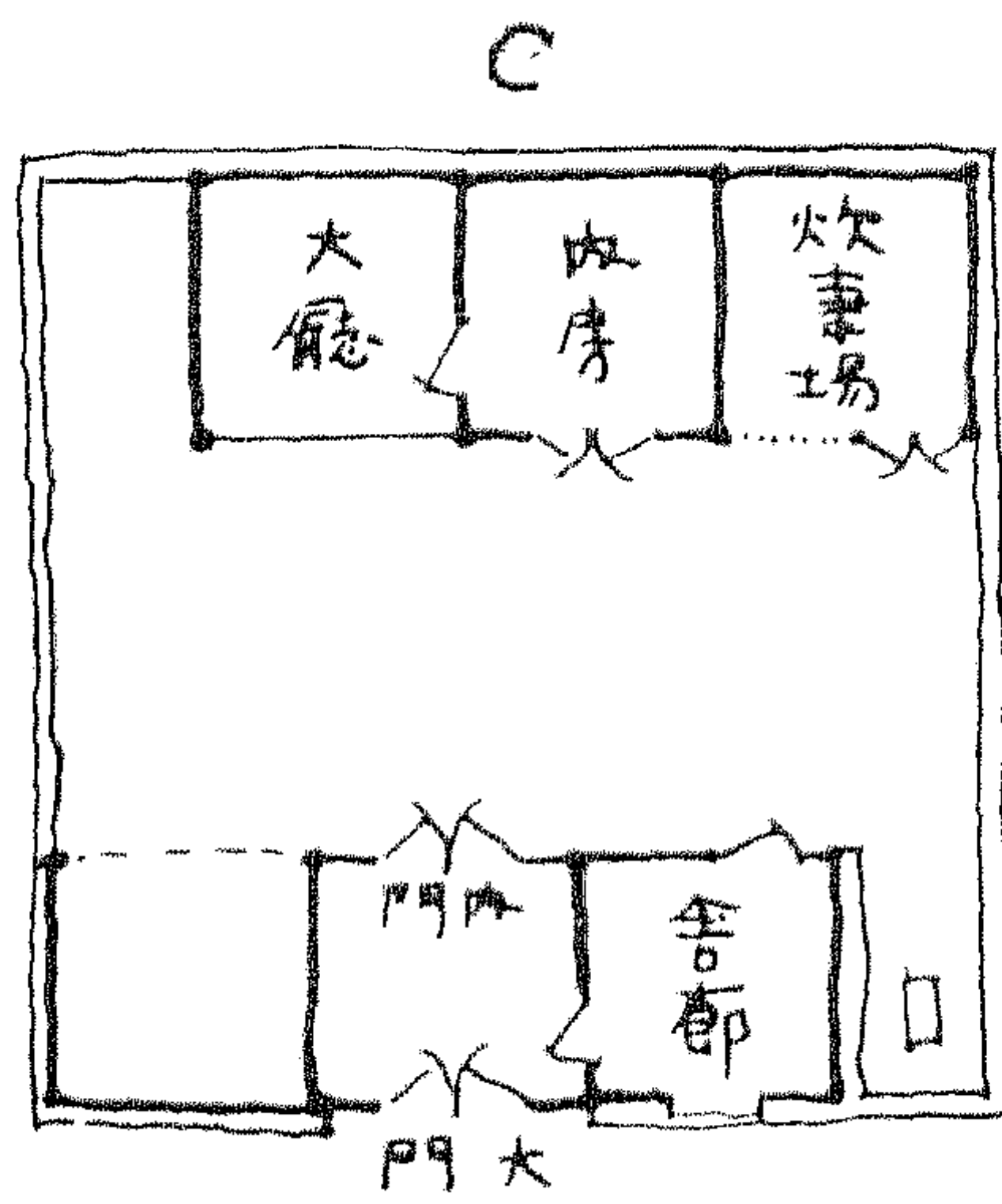
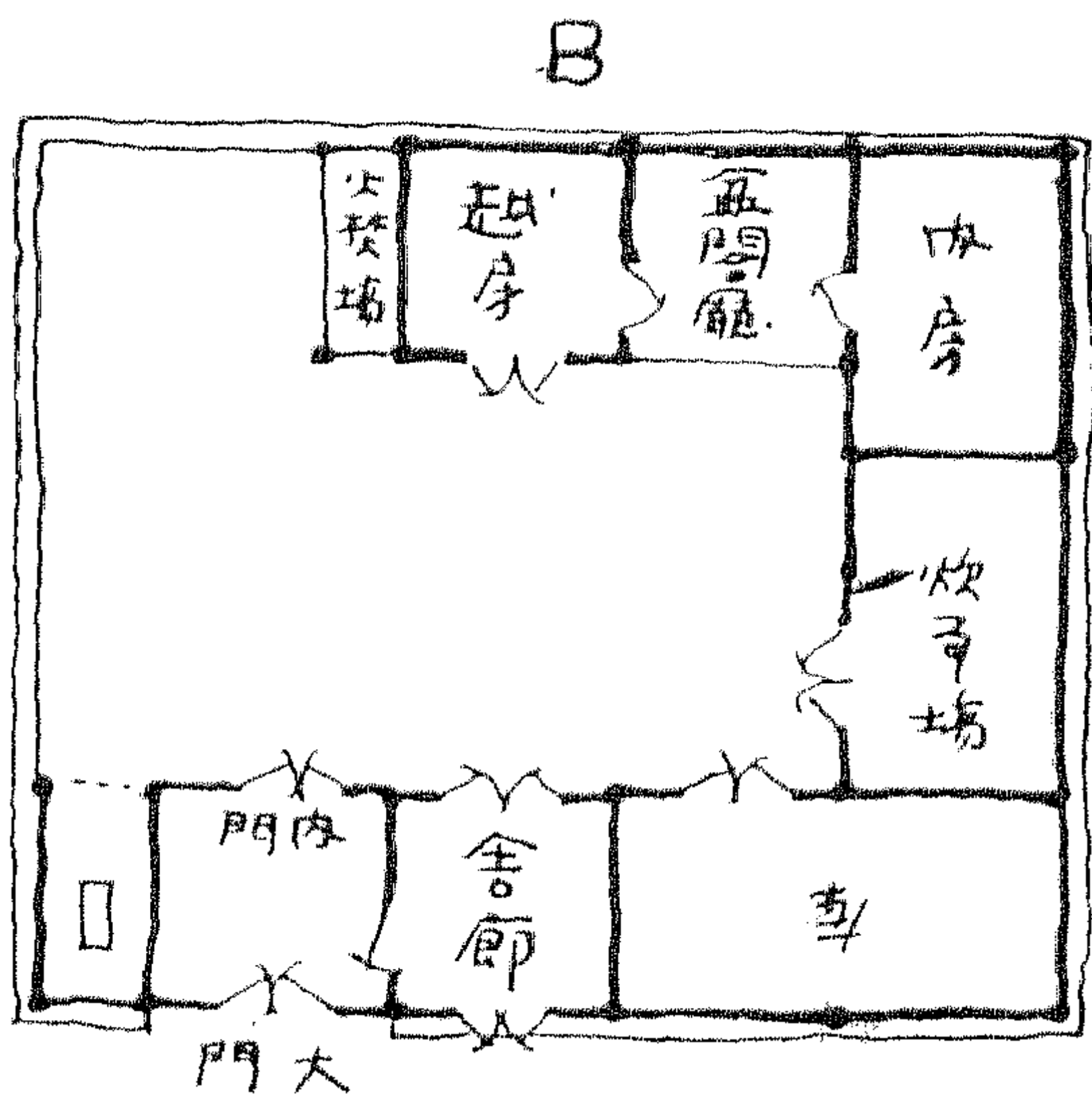
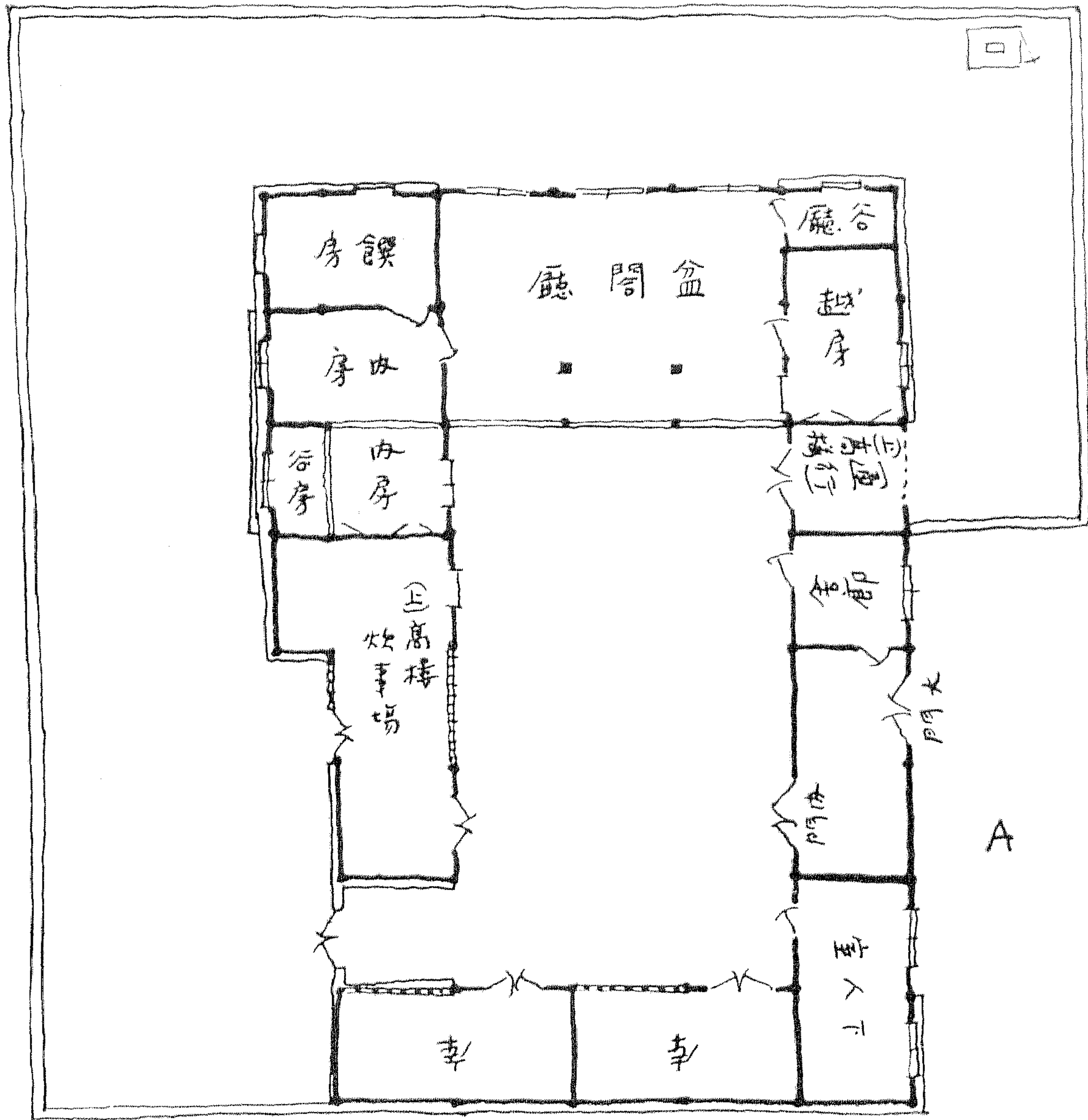
(泉金)家の泥の中築構



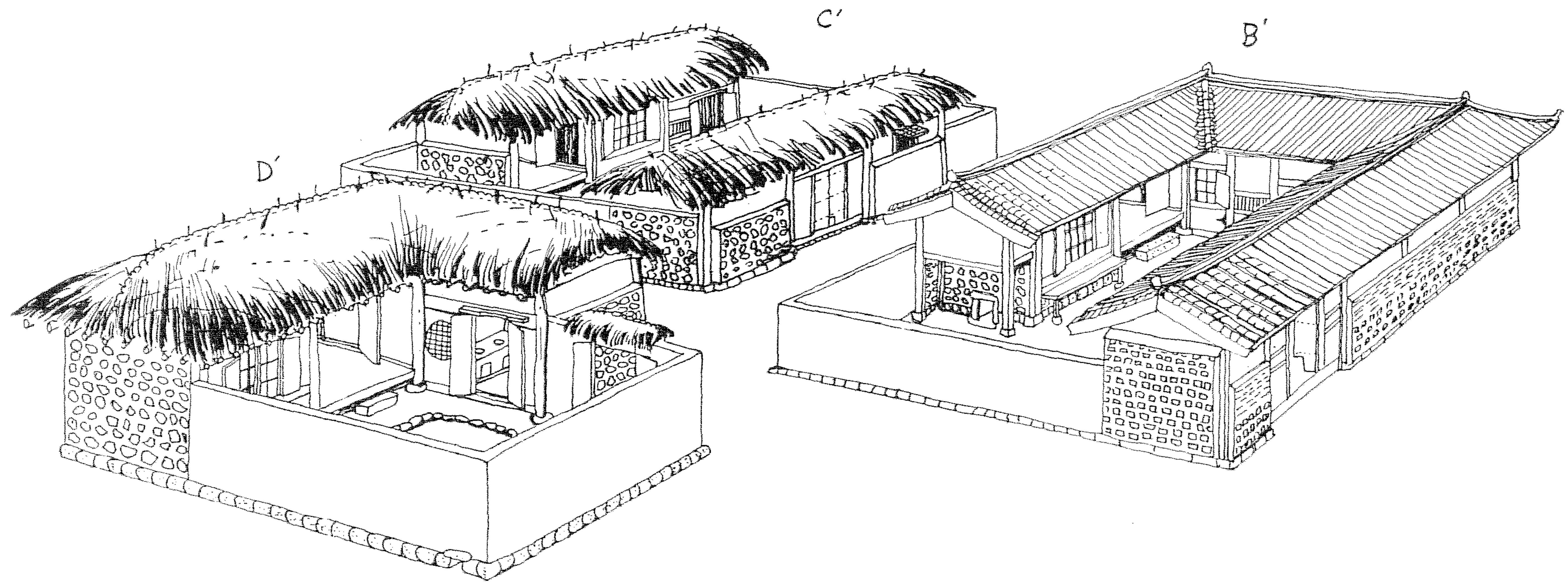
(泉金) 觀外の家泥



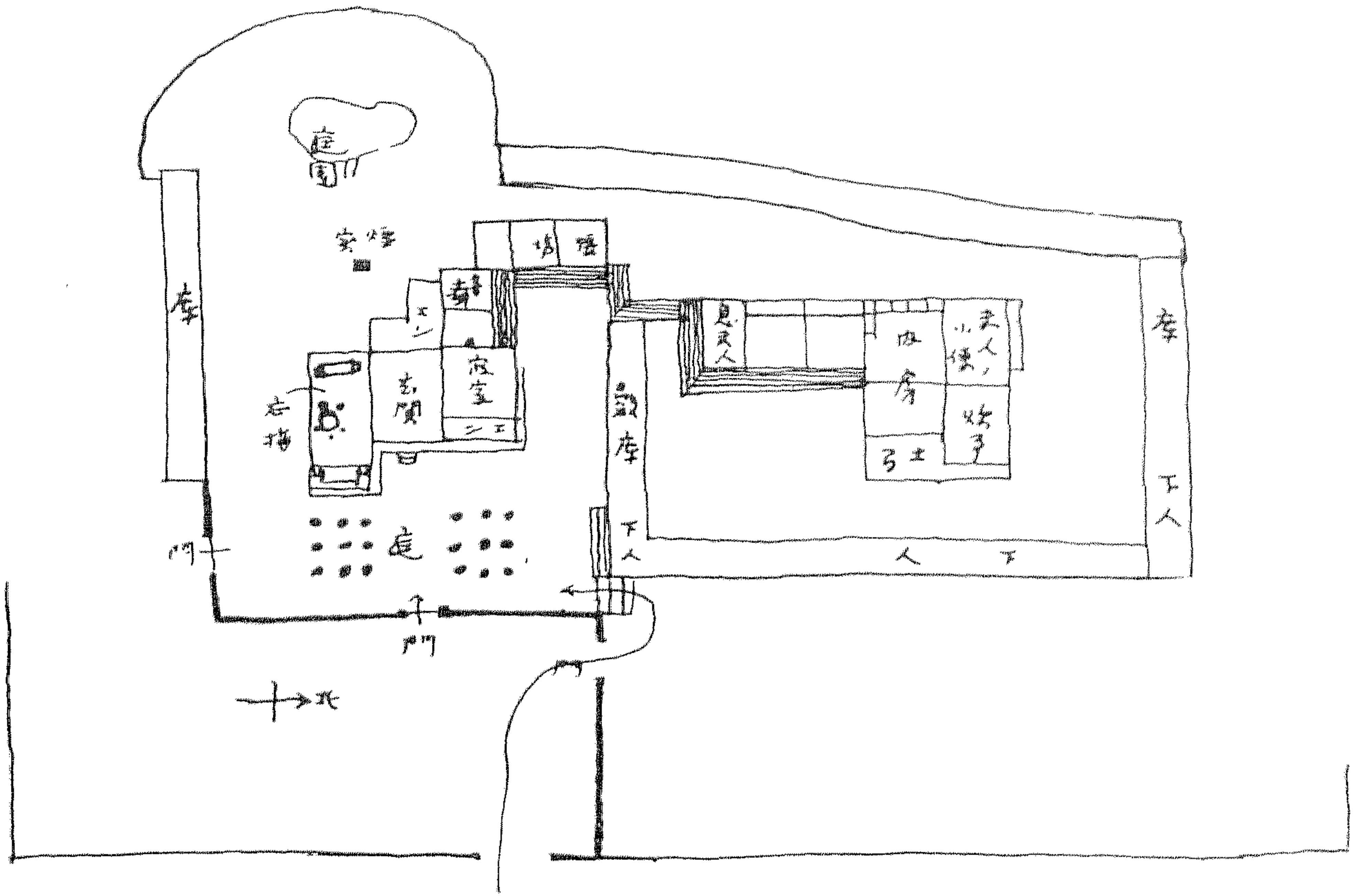
し 出 煙 の 突 温



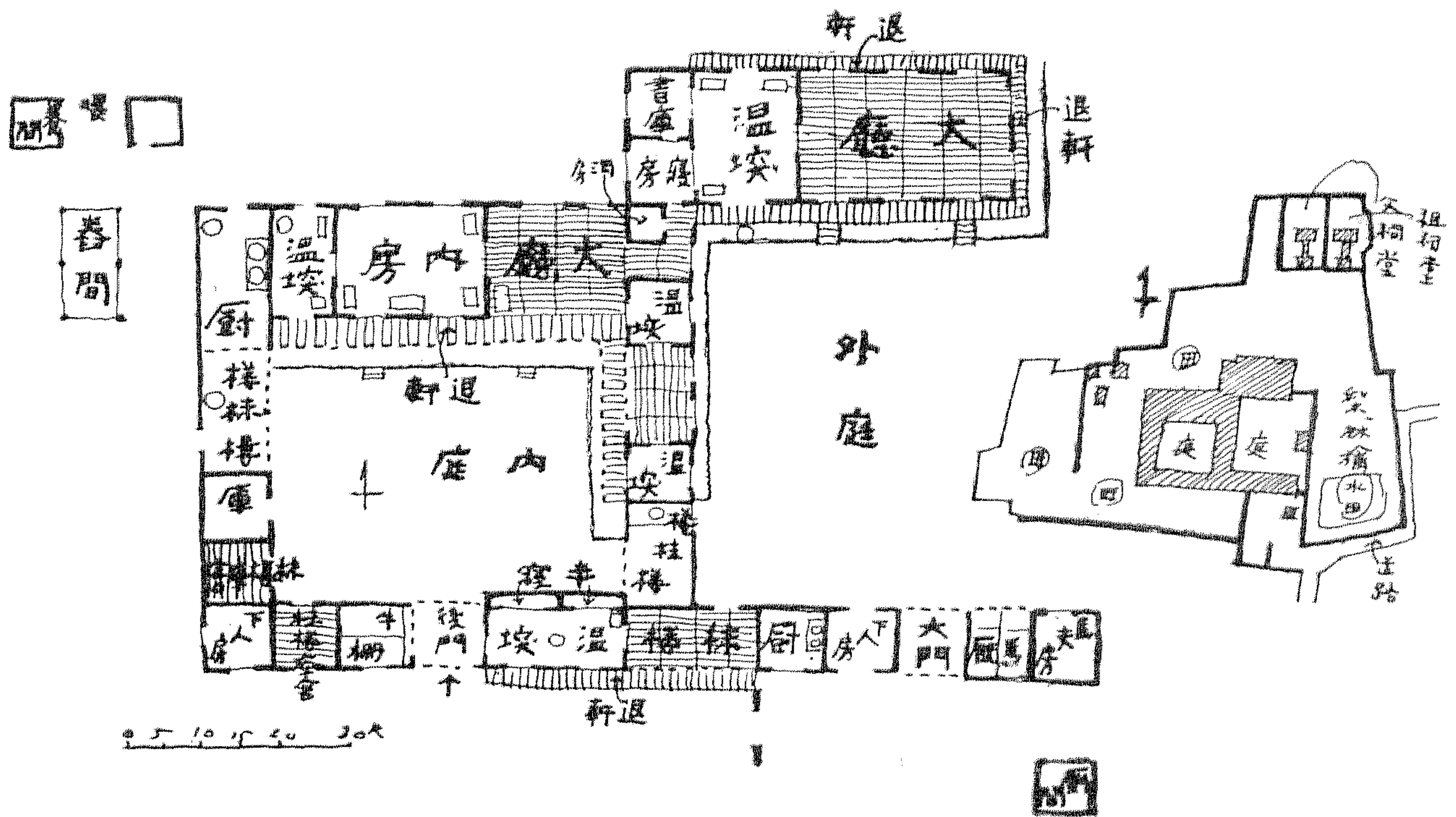
圖取見の家民 (型鮮中) 型般一



圖取見の家民(型鮮中)型般一

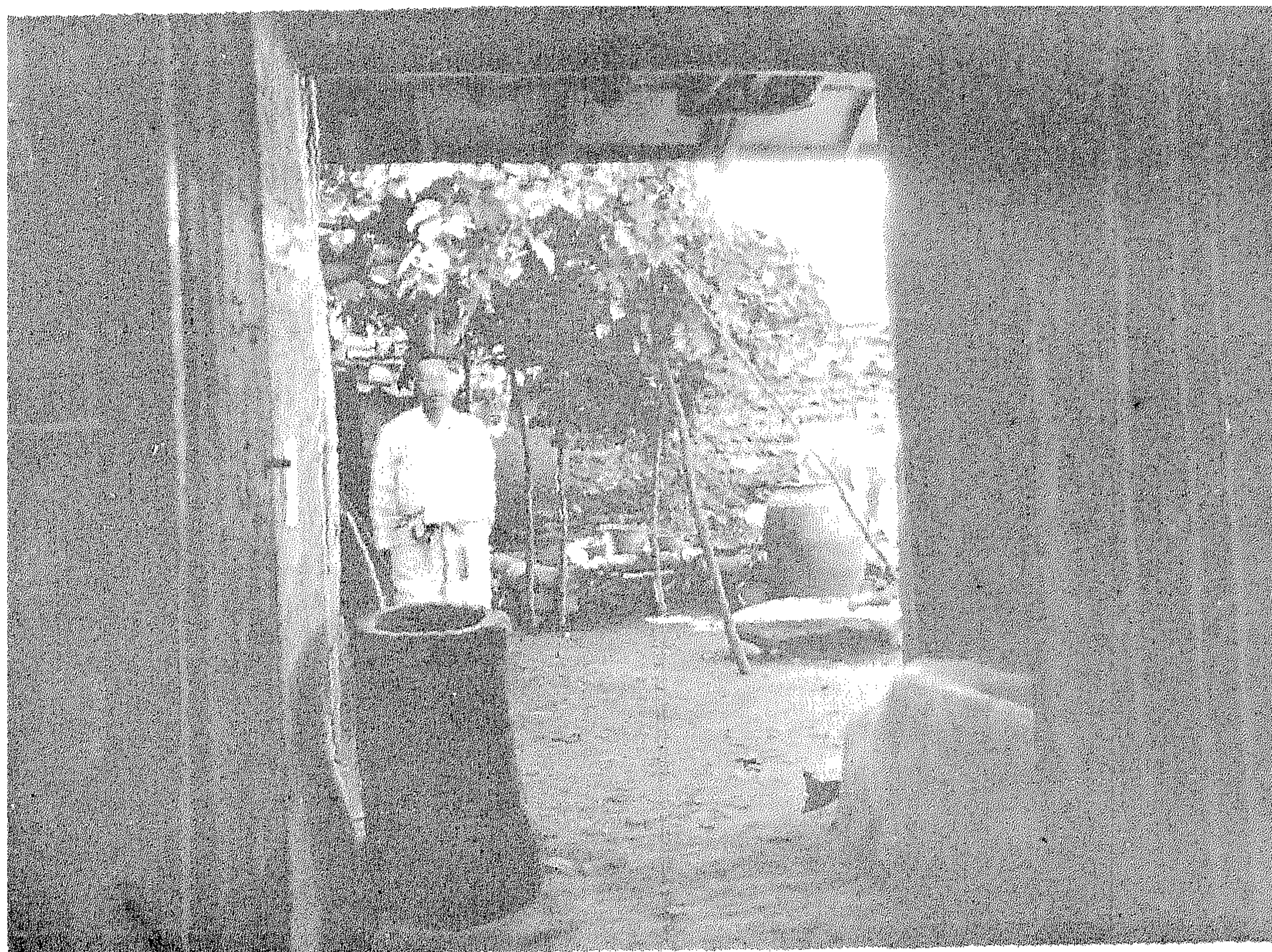


宅邸の流上城京



(郡東安道北慶) 宅邸の班兩方地

[りよ「家住方地鮮朝」府督總鮮朝]

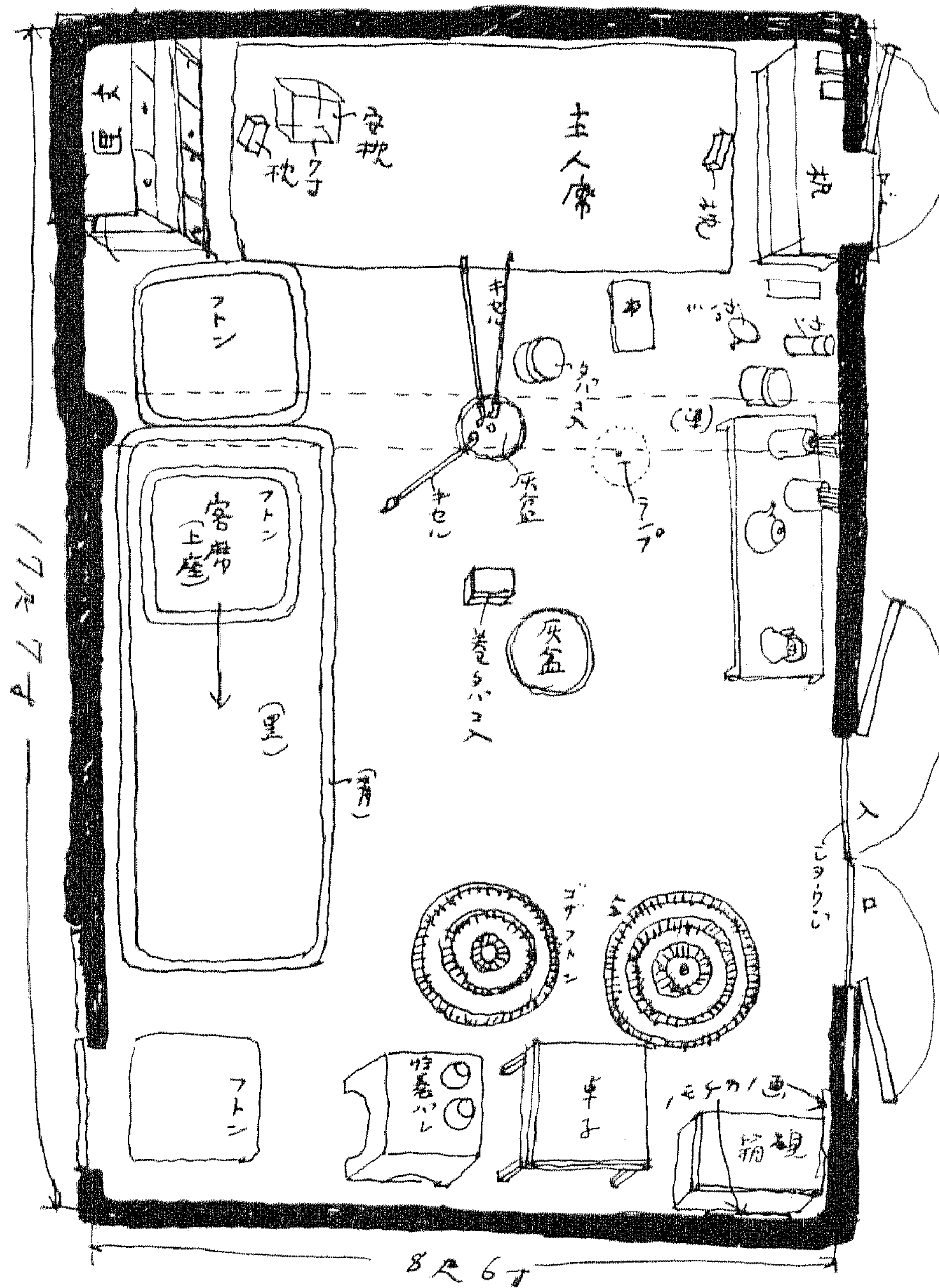


（壤 平）門大の宅住流中

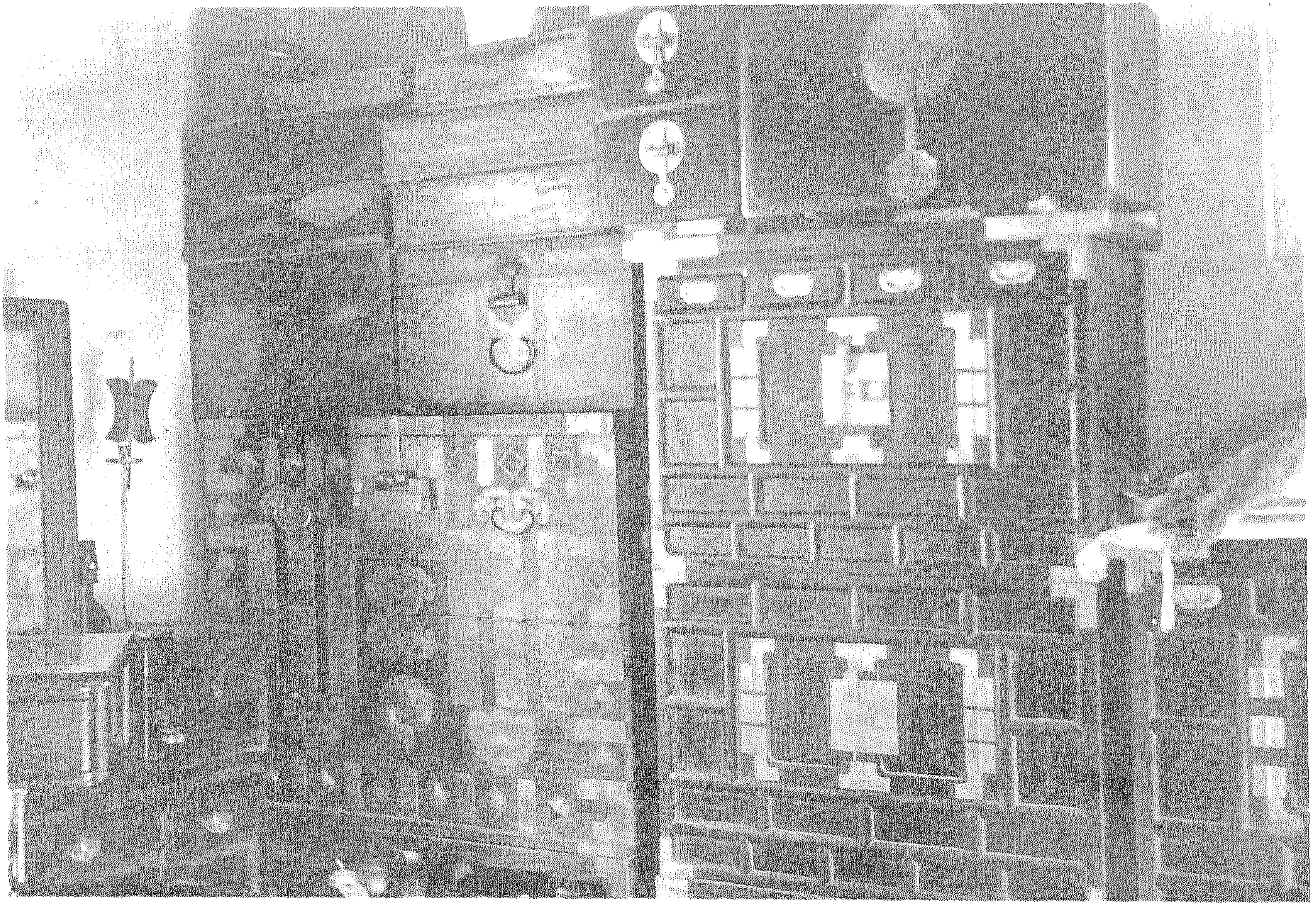


（城 開）門中の宅邸流上

圖版第一八



中流住宅の舎廊内(平壤)



(城 關) 筒 簞 の 内 房 内 宅 住 流 中



(城 京) 廳 大 の 宅 住 流 中



(城 開) 所 台 の 宅 住 流 中



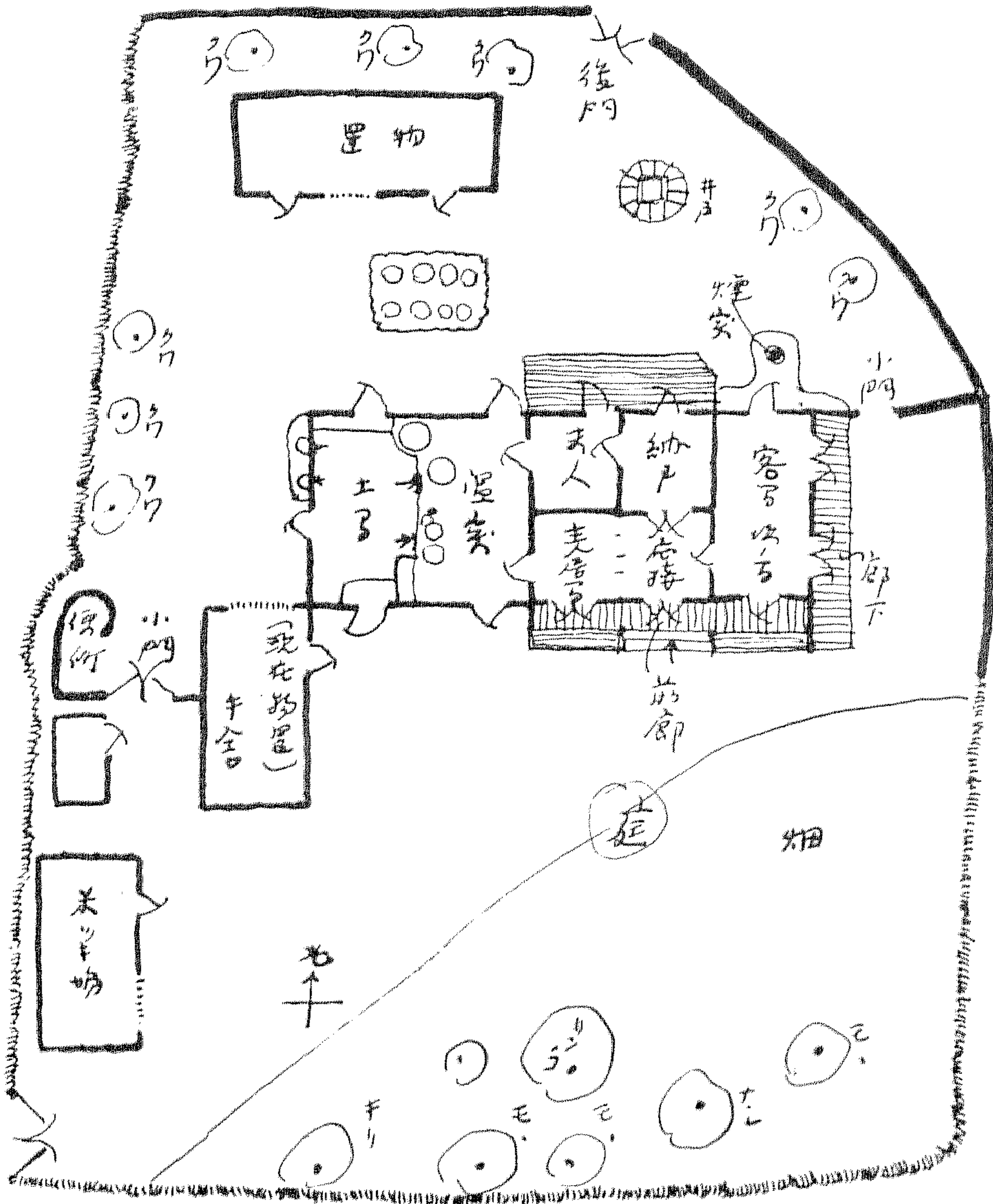
(興 成) 具器と棚戸の店食飲



(興 成) 埴甕醬の家民

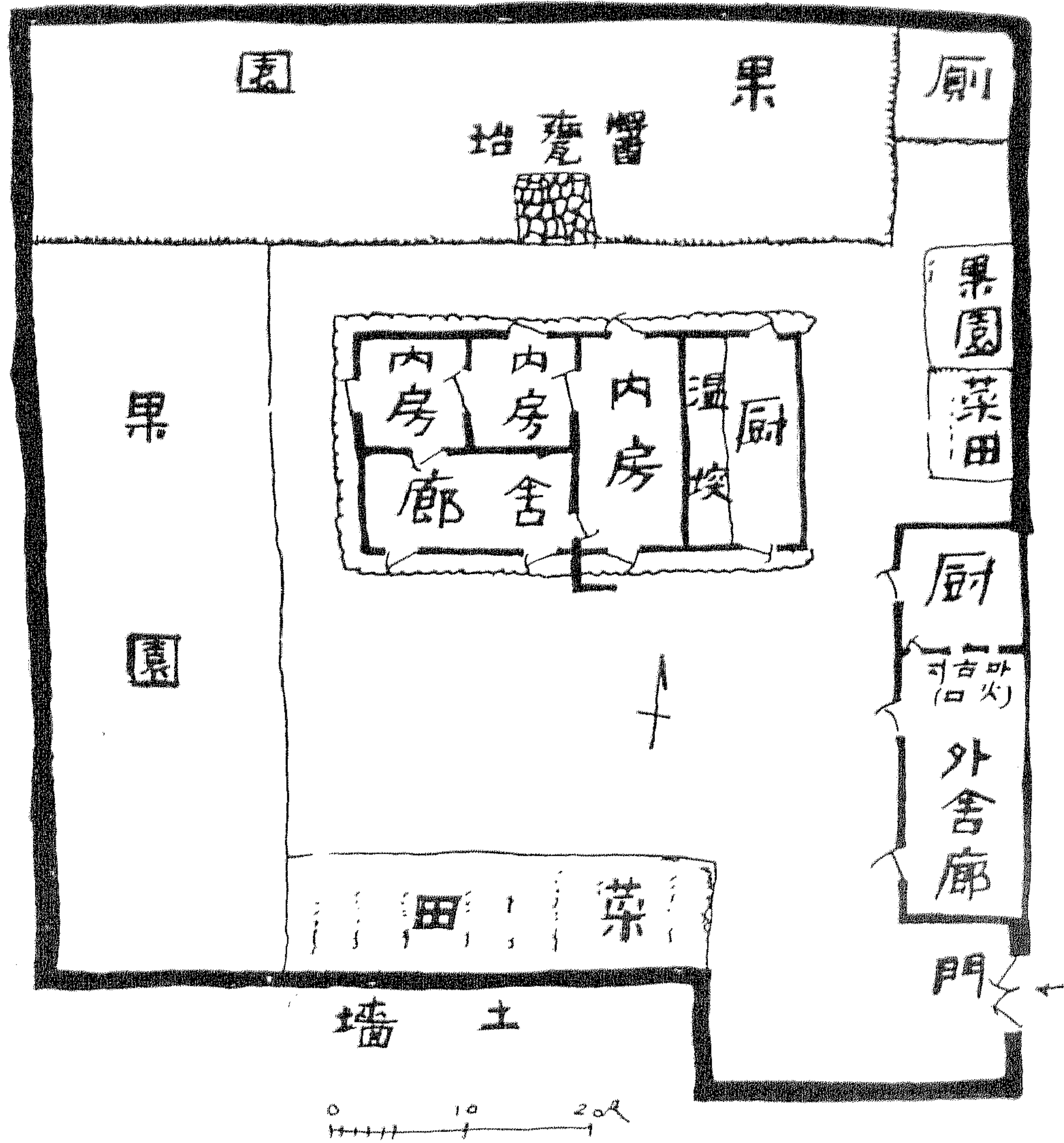


外観

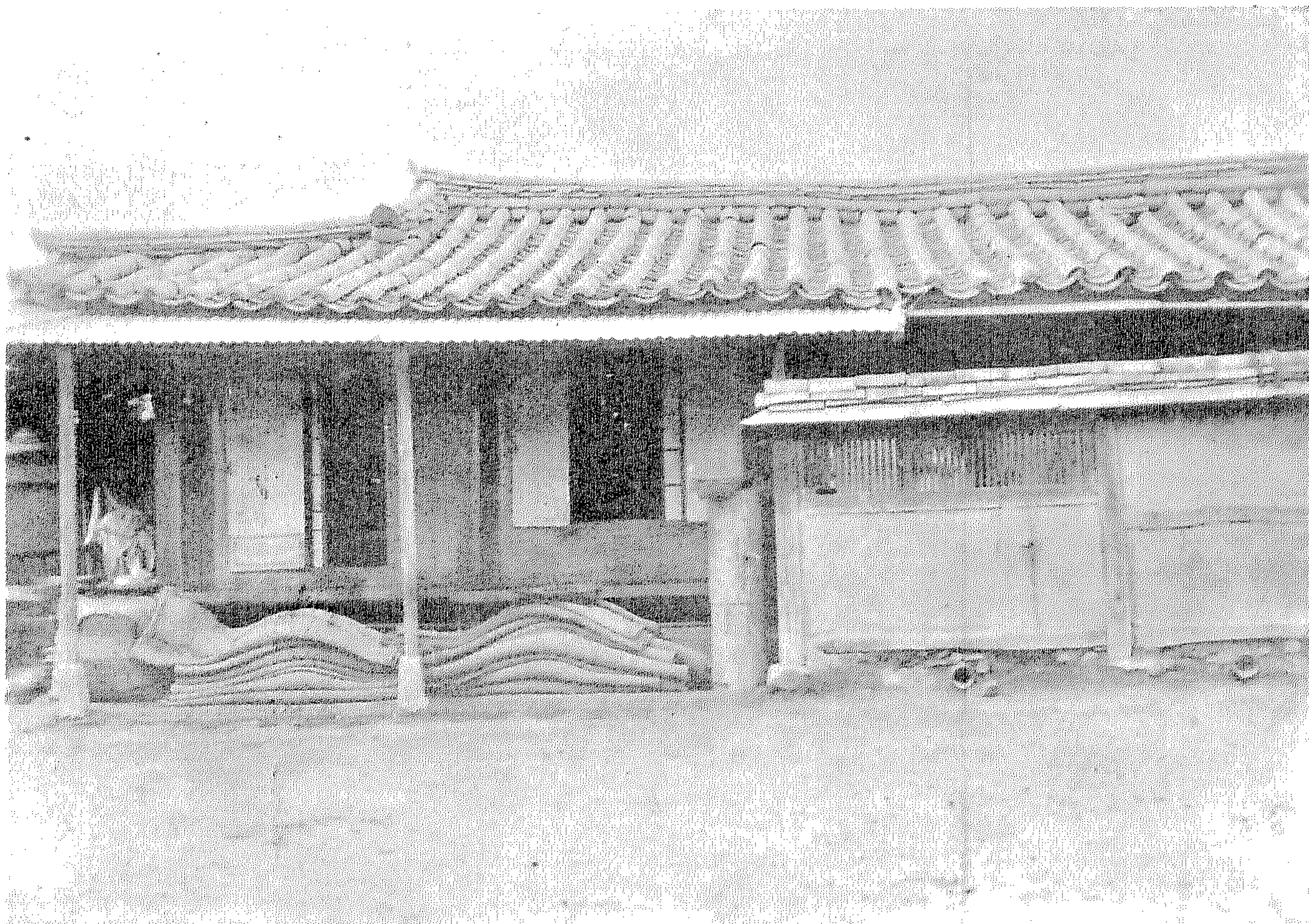


平面圖

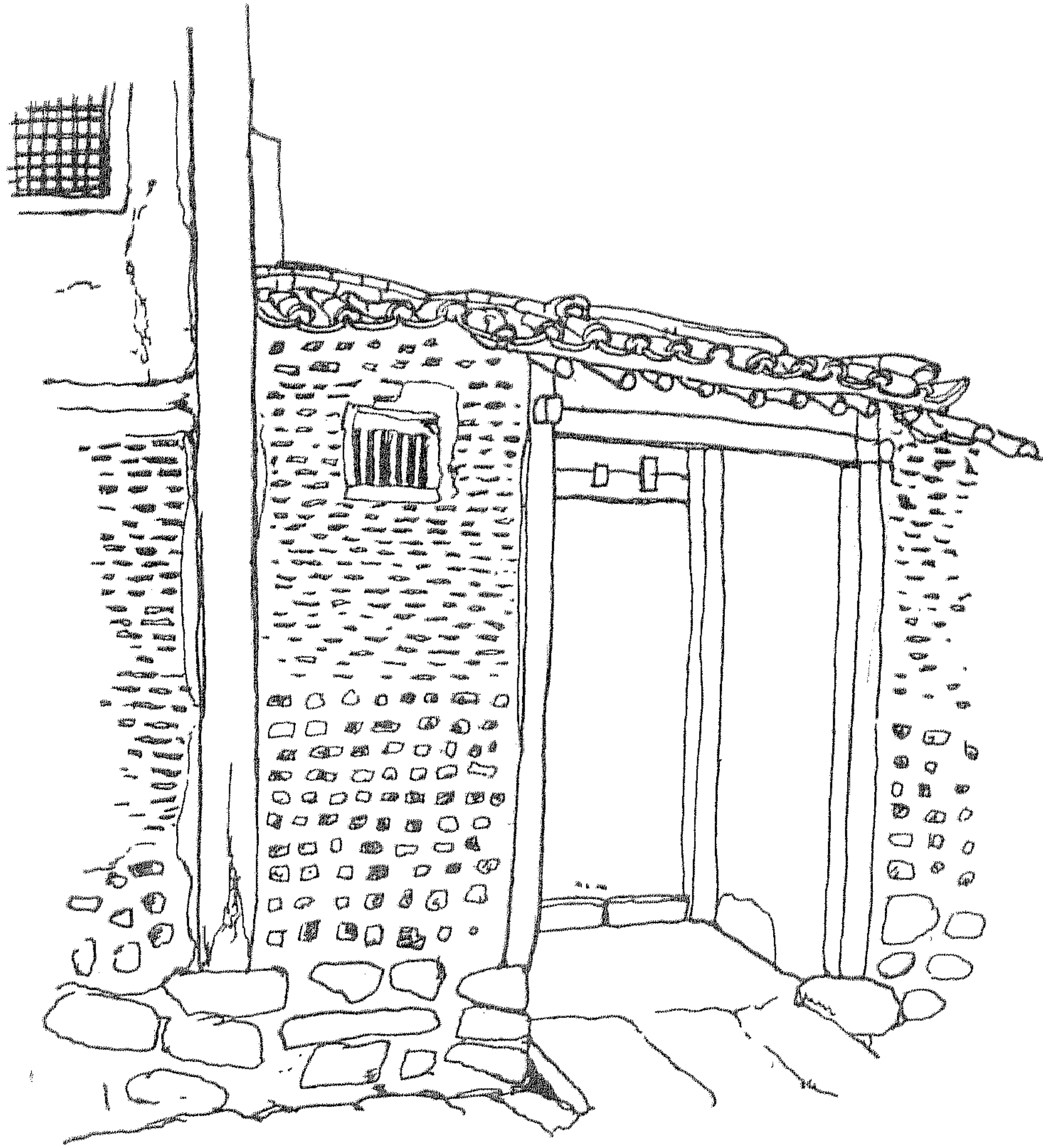
咸南道北青の中流住宅



圖面平家民の郡興咸道南鏡咸
 (リよ「家住方地ノ鮮朝」府督總鮮朝)



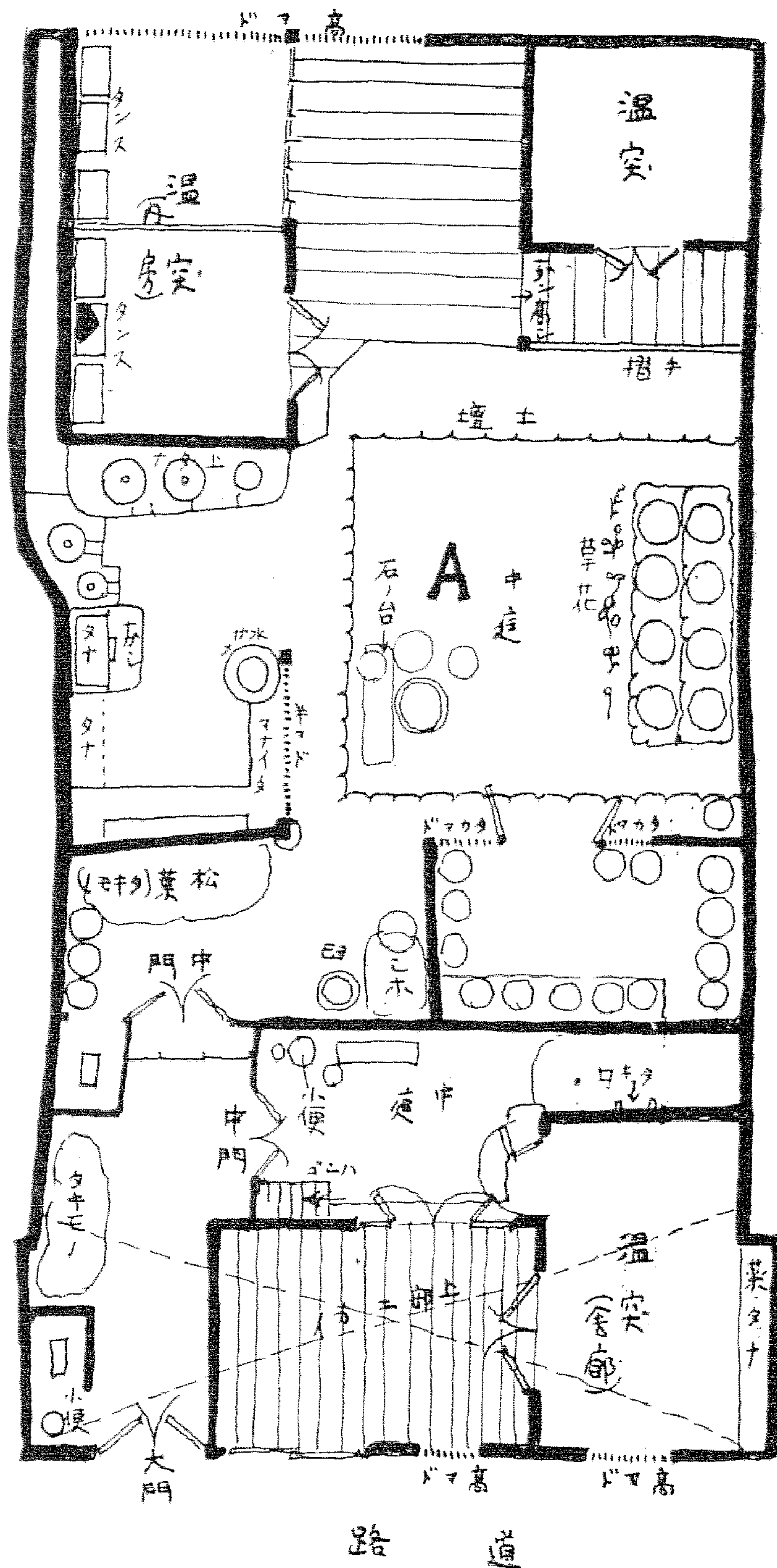
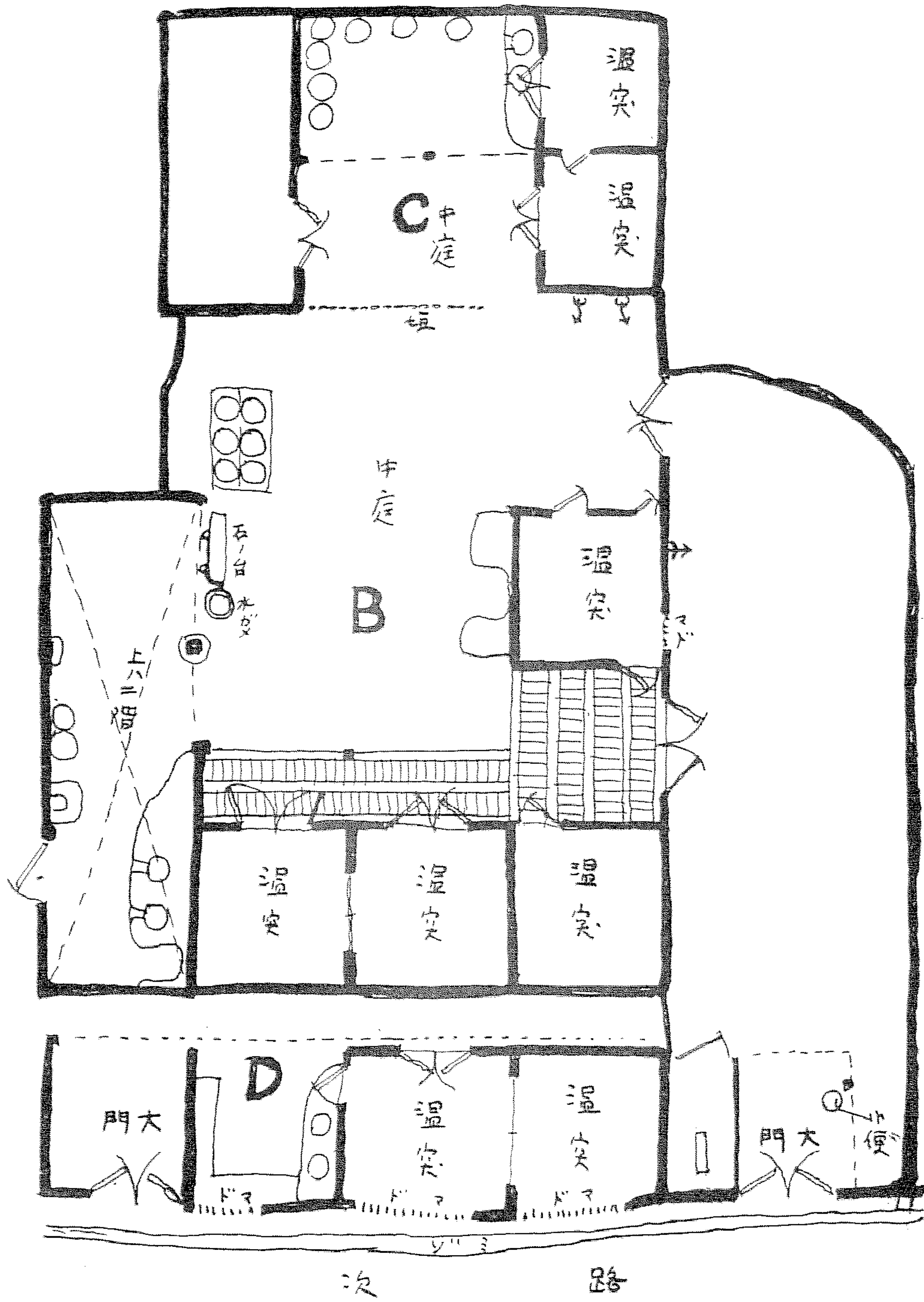
觀外家民の興咸



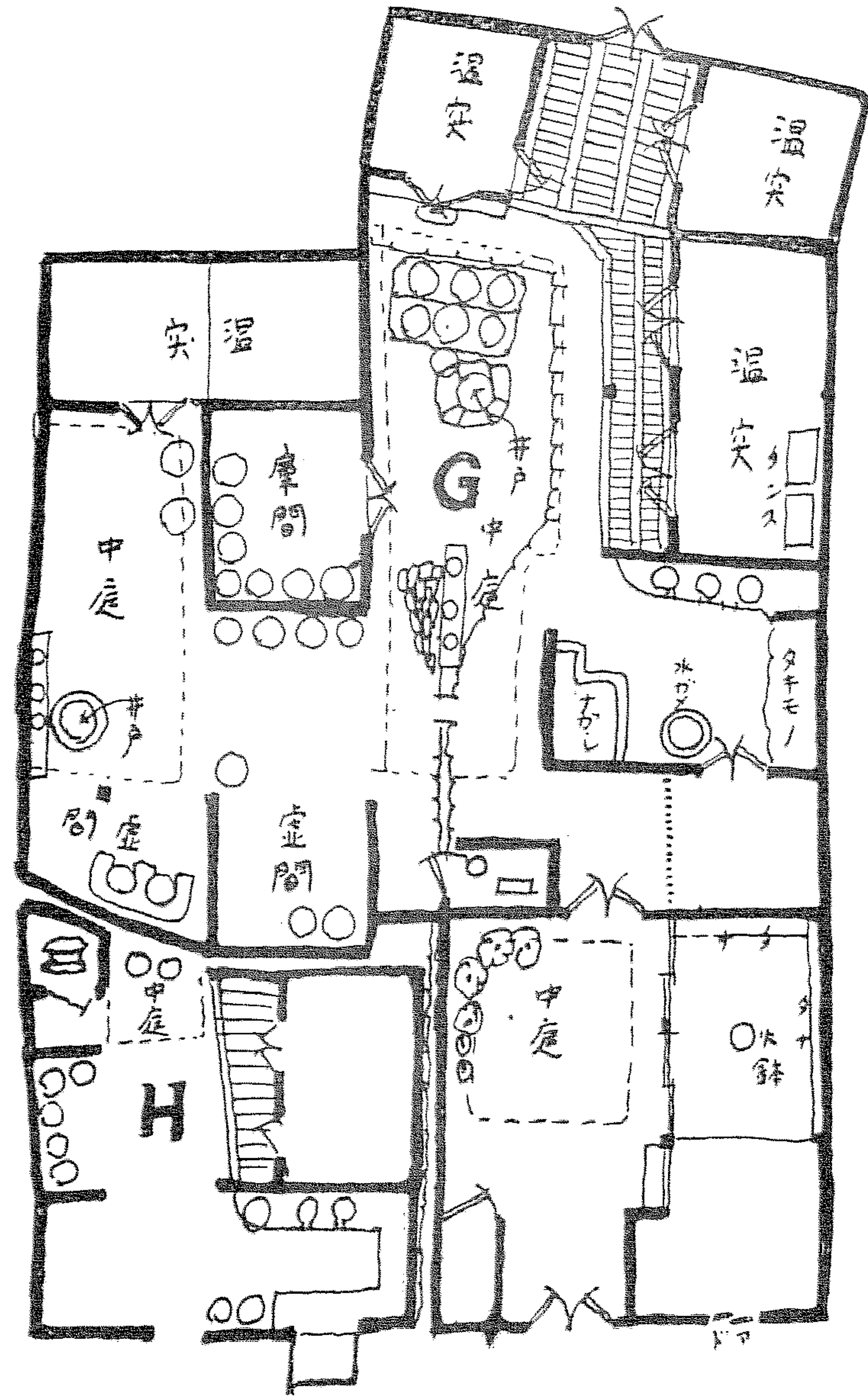
開城の民家の入口



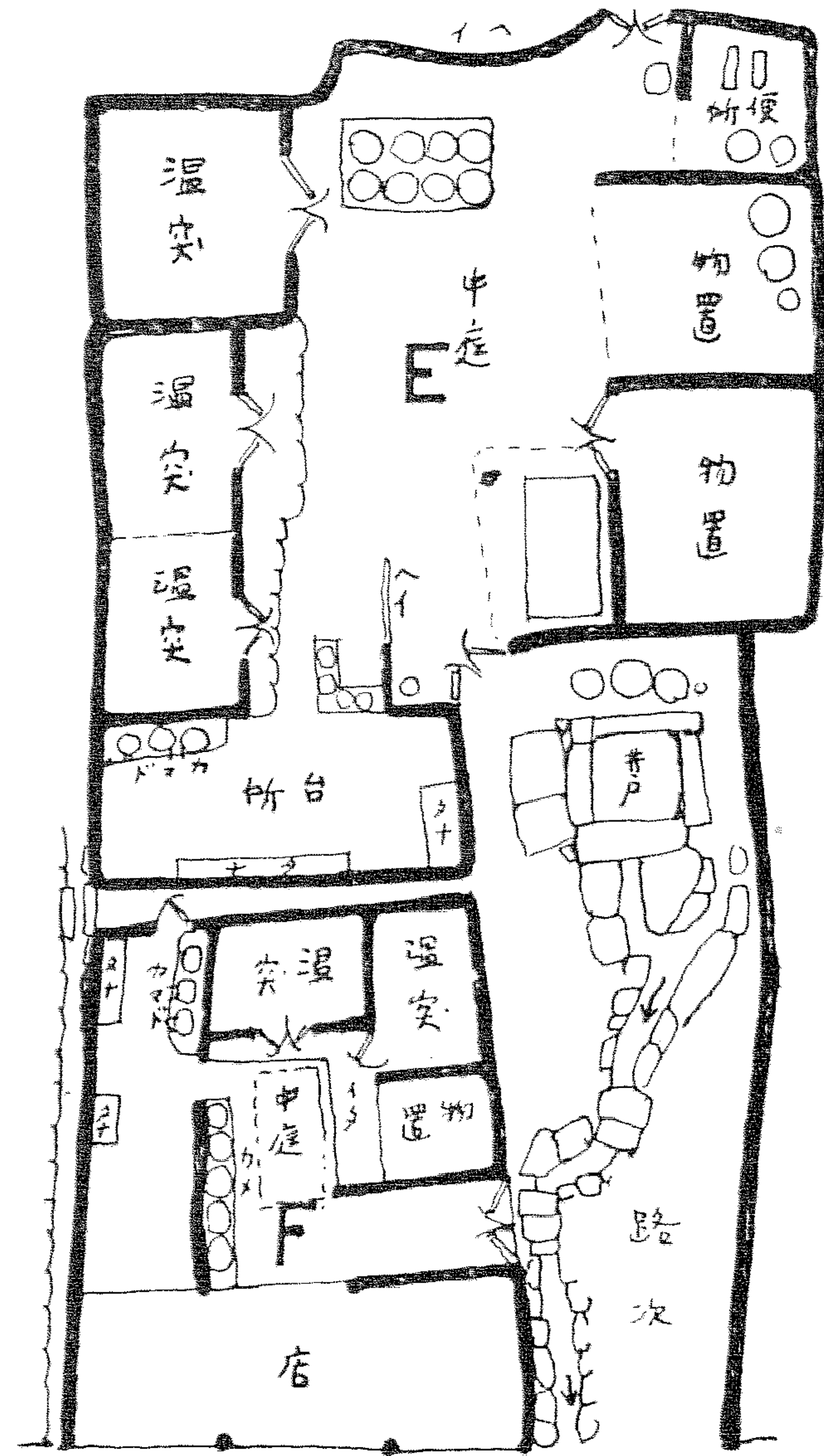
開城の路次概景



圖面平家民の内邑城開

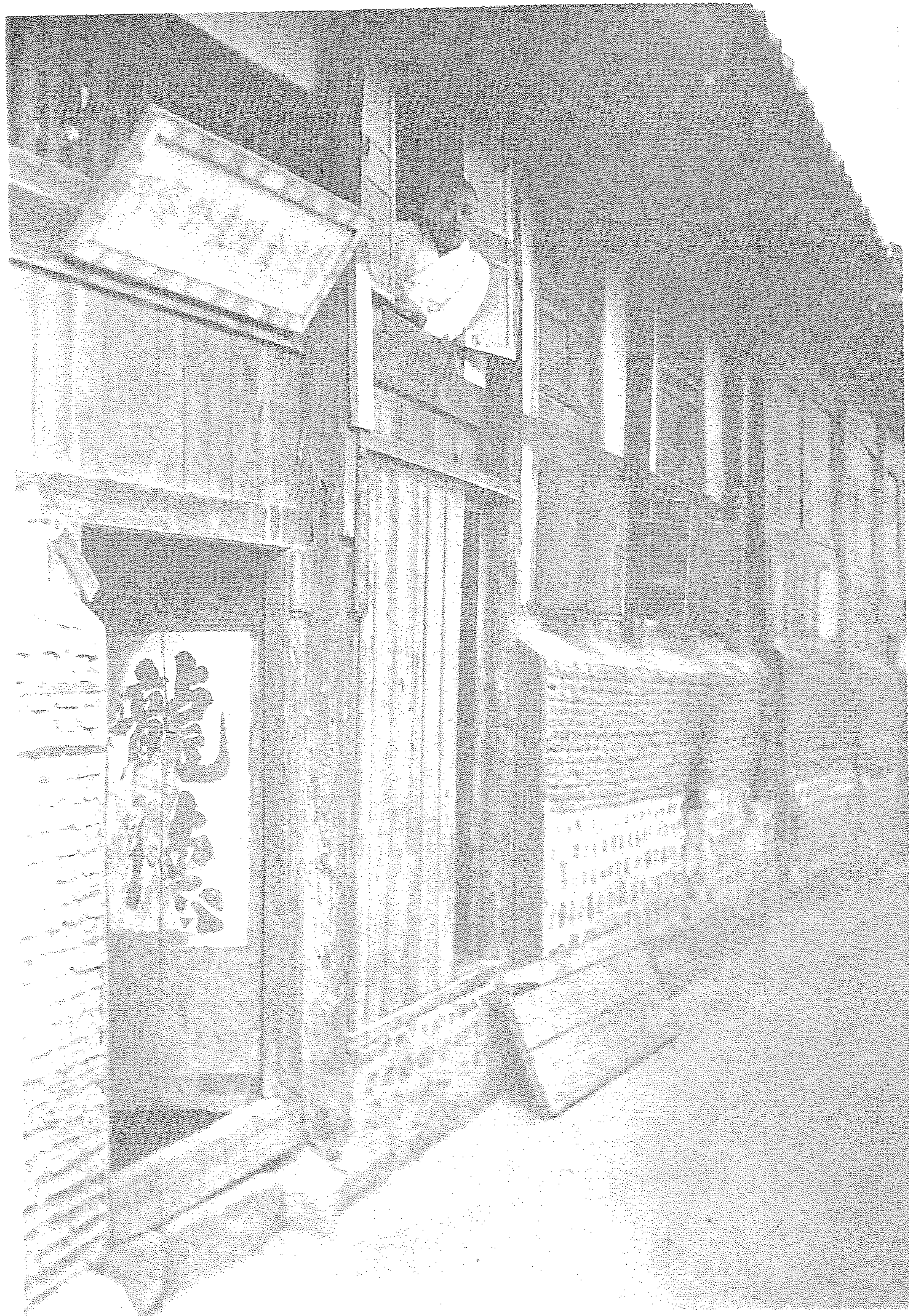


(道下通) 路道

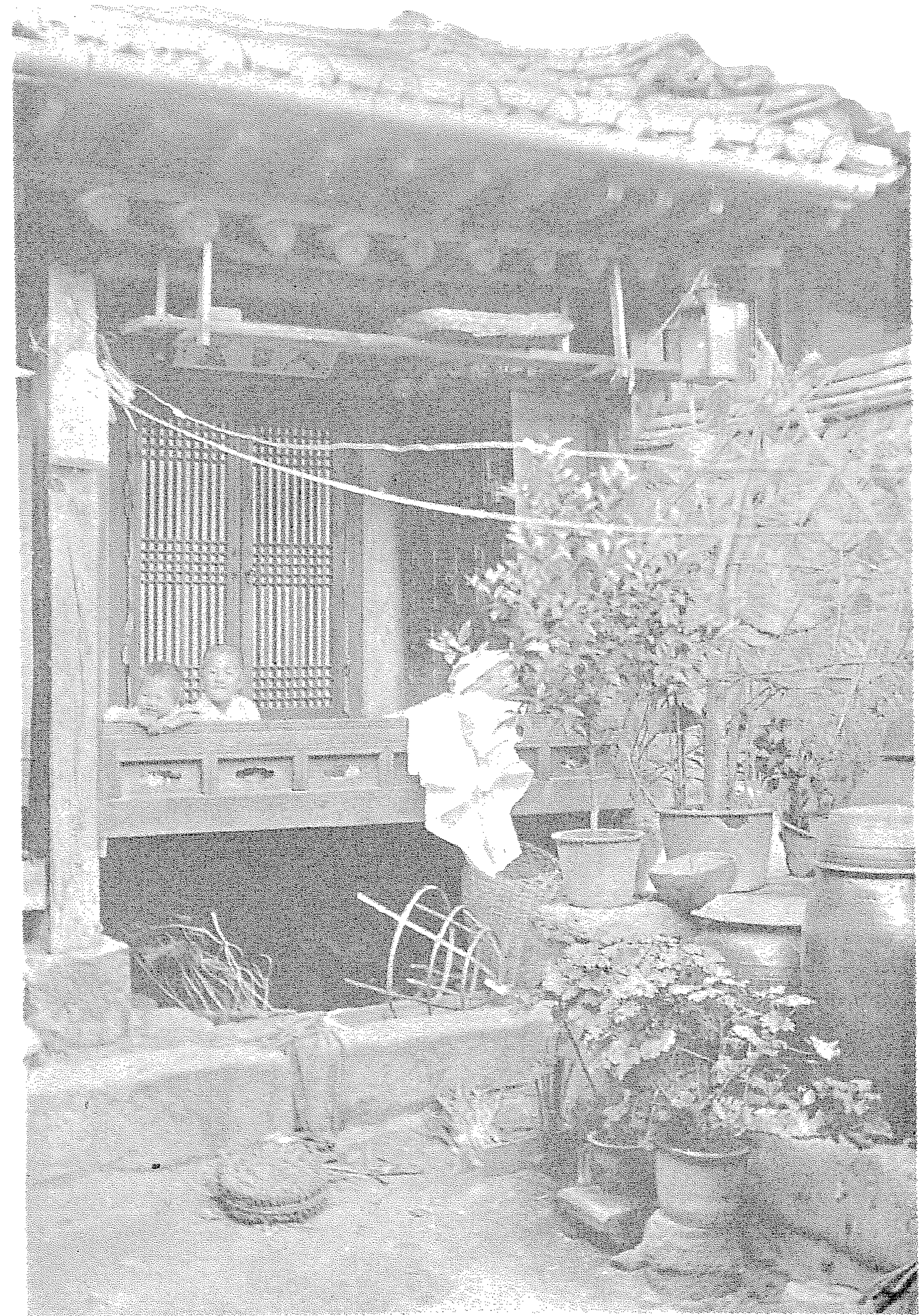


(道大通) 路道

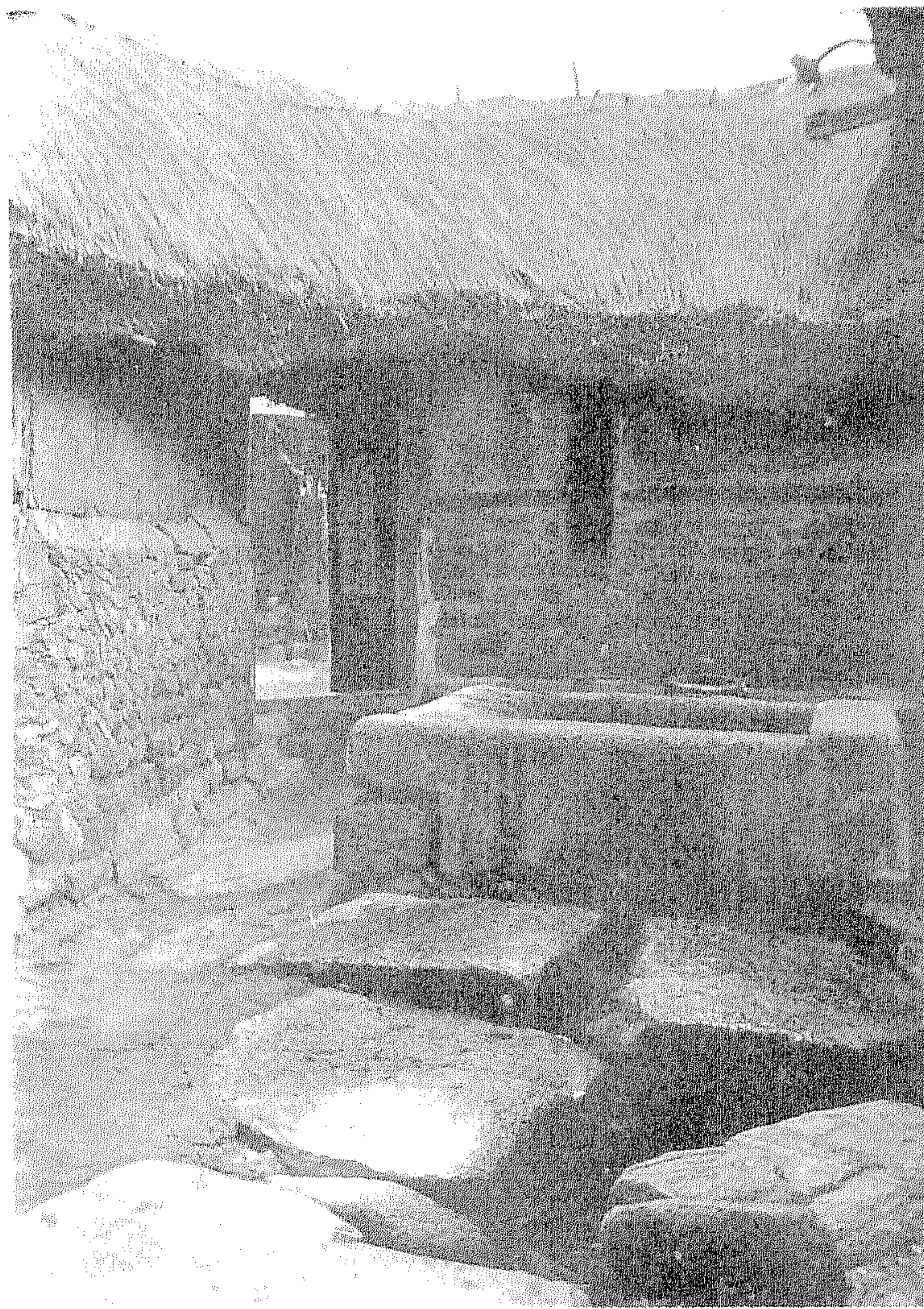
圖面平家民の内邑城開



開城の民家の入口



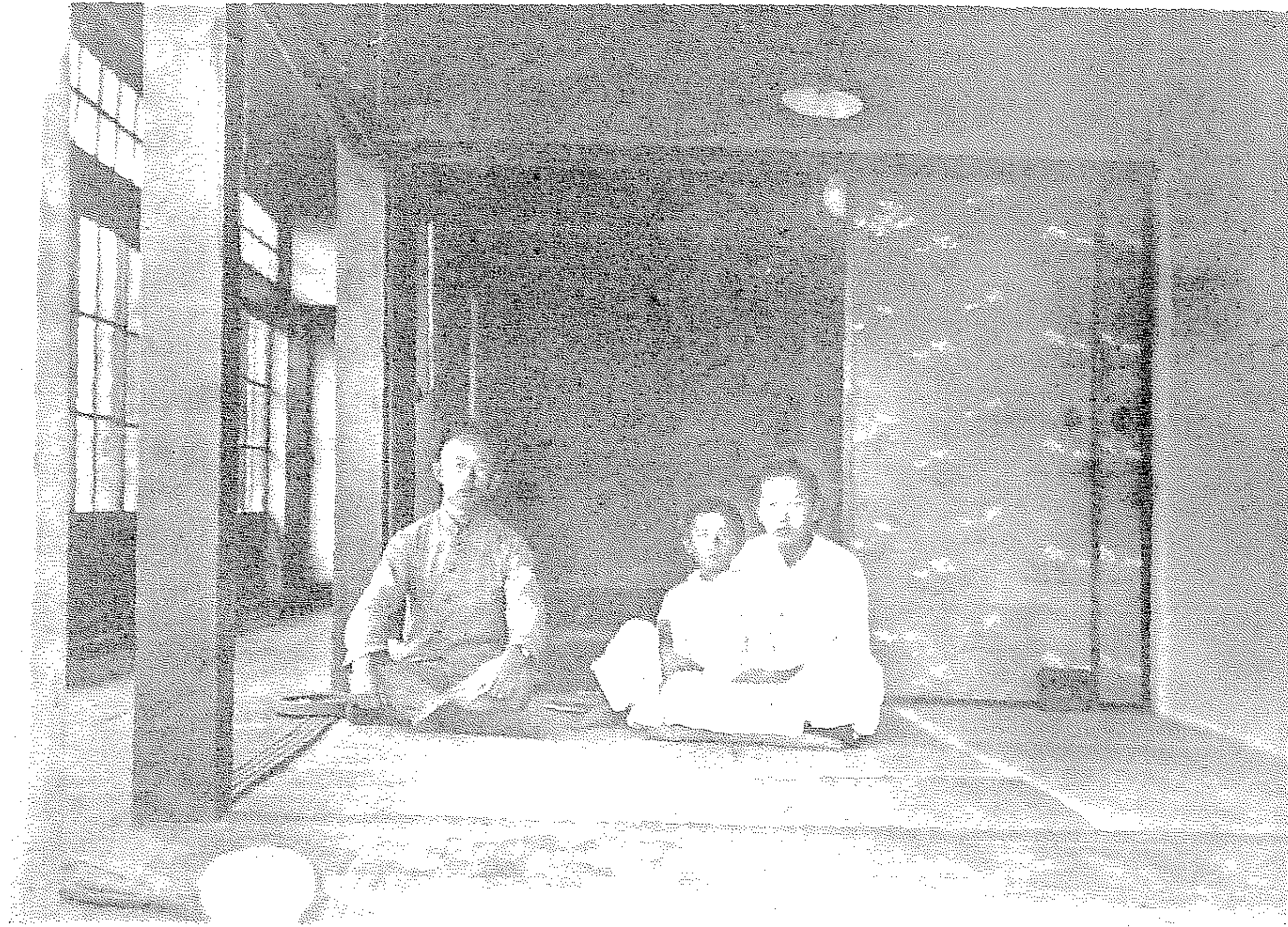
開城の民家の越房



戸井るあに次路の城開



店の屋餅の内邑城開

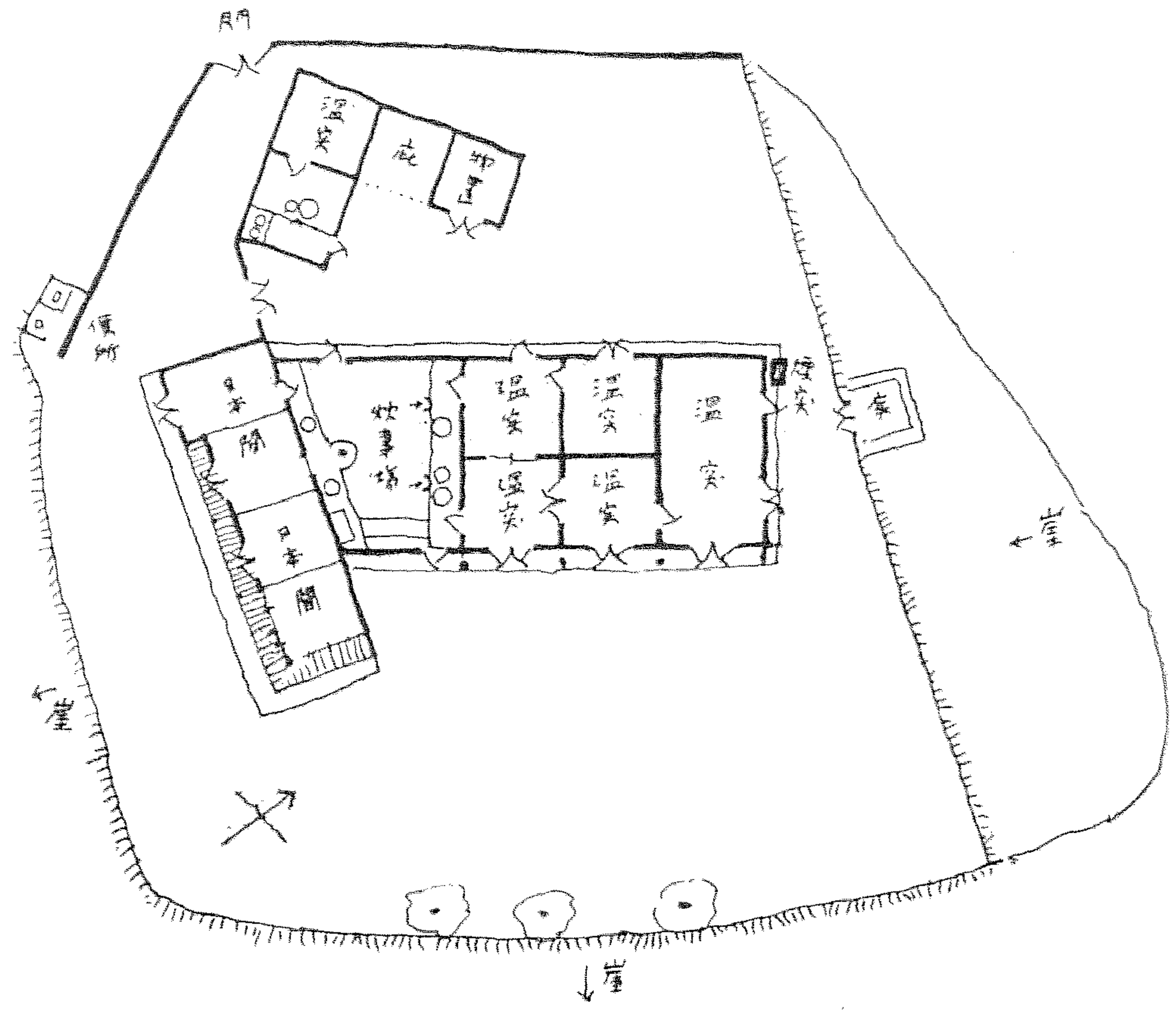


間本日



觀外

宅住新の(氏淵聖洪)興咸



圖面平



觀 外



所 台

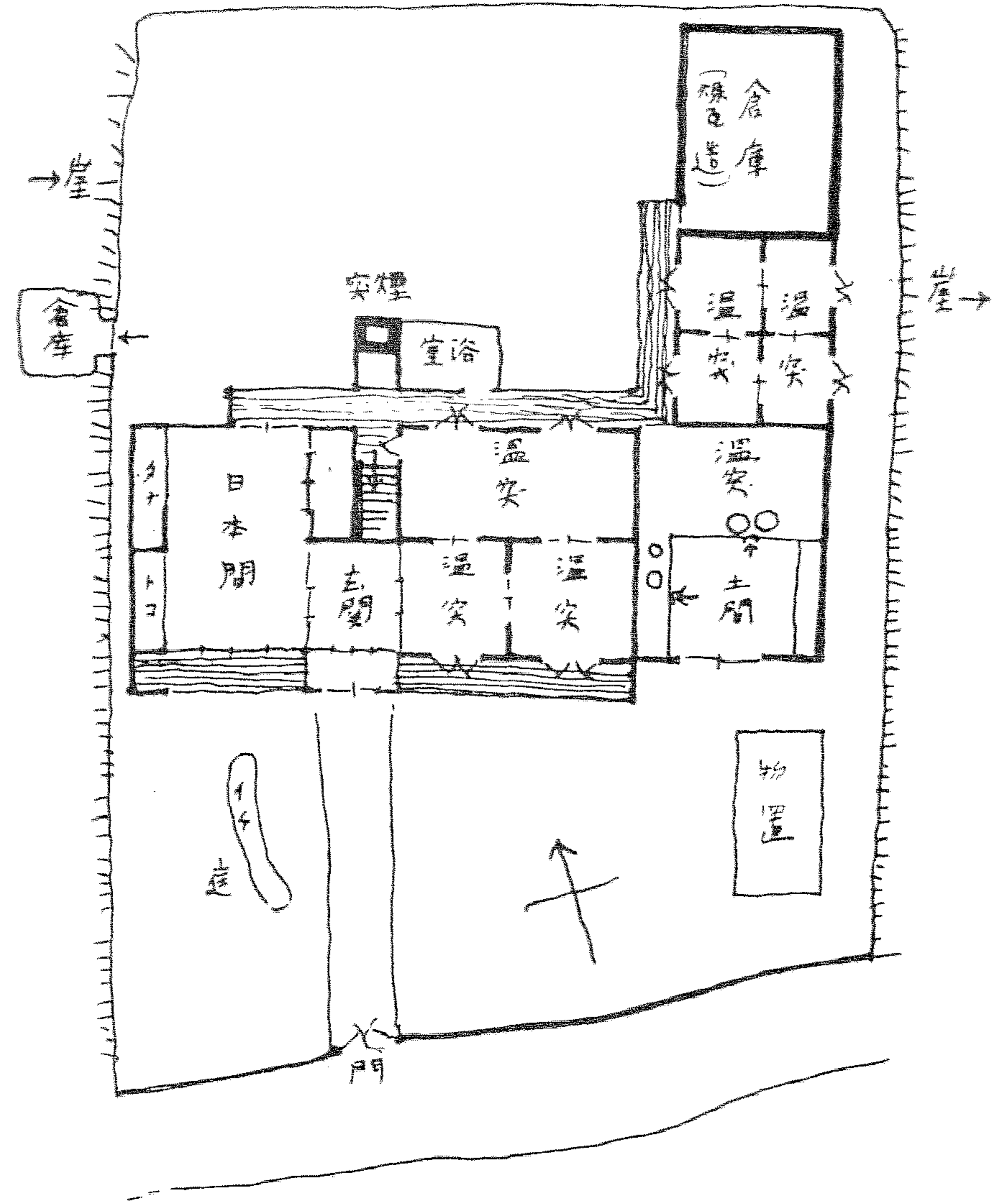


圖 面 平

宅 住 新 の (氏 用 洛 韓) 興 威



觀 外

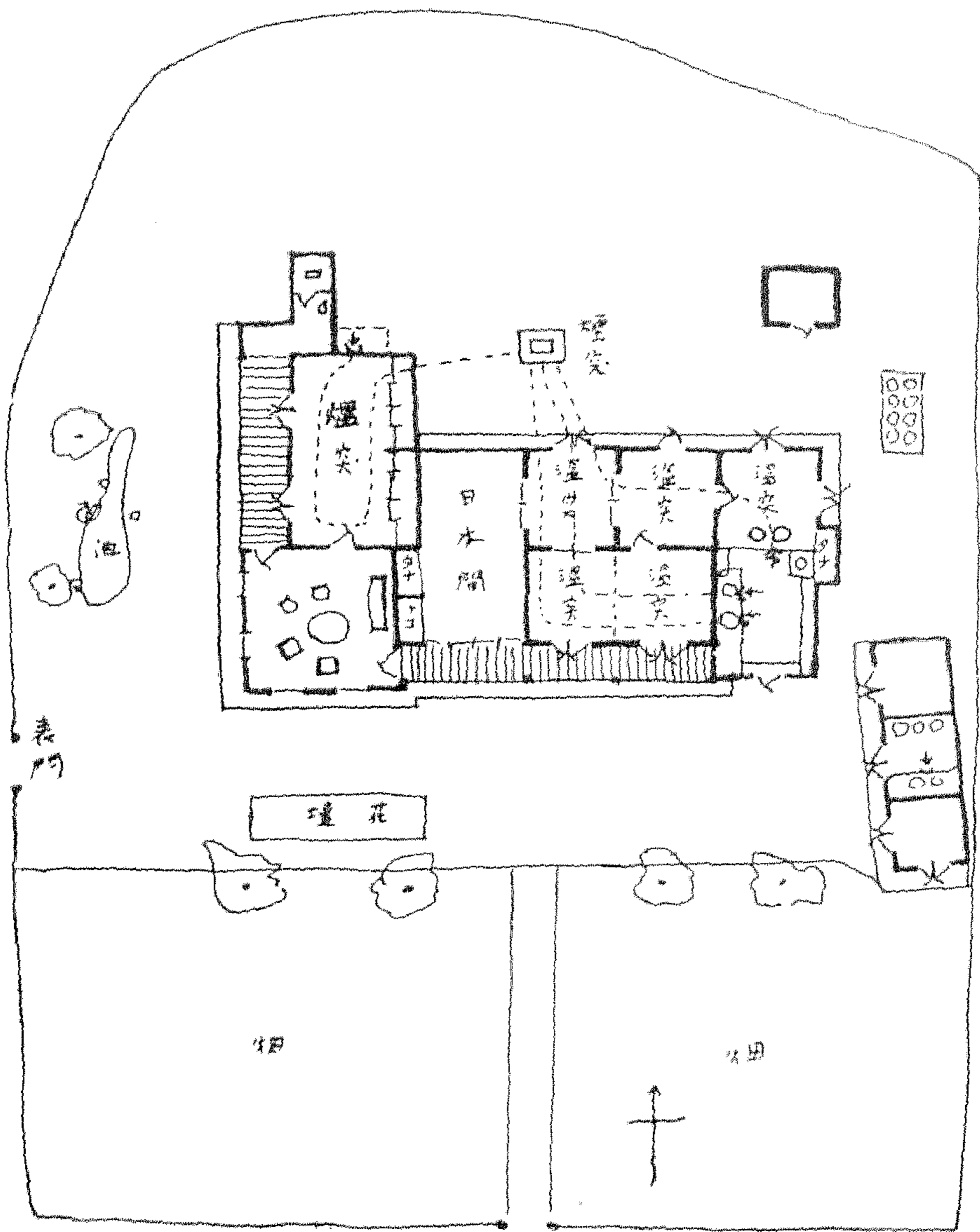


圖 面 平

宅 住 新 の (氏 定 錫 中) 興 威

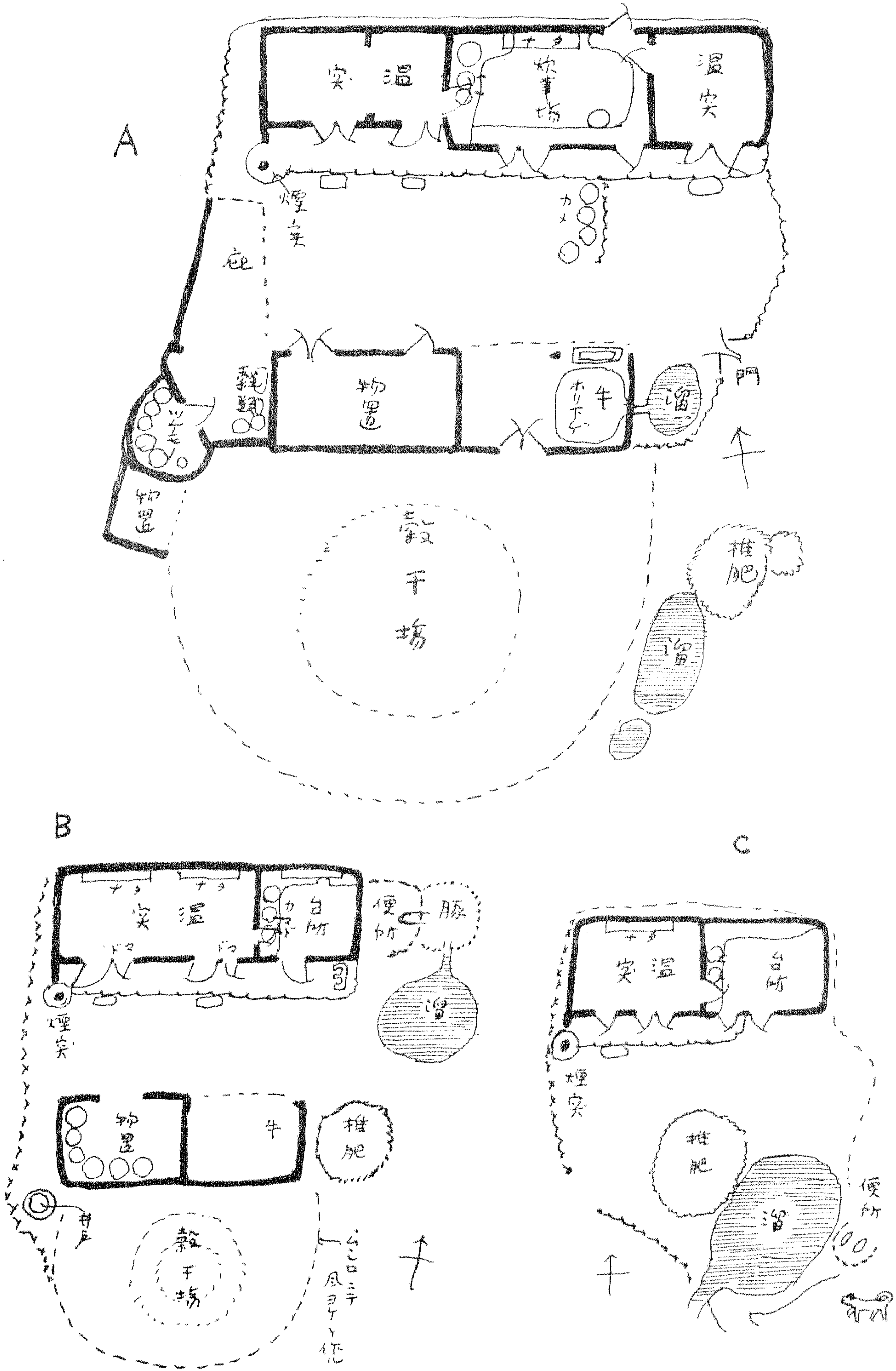


中庭より主人居間及大廳を望む



夫人居間

開城(基金台氏)の新住宅



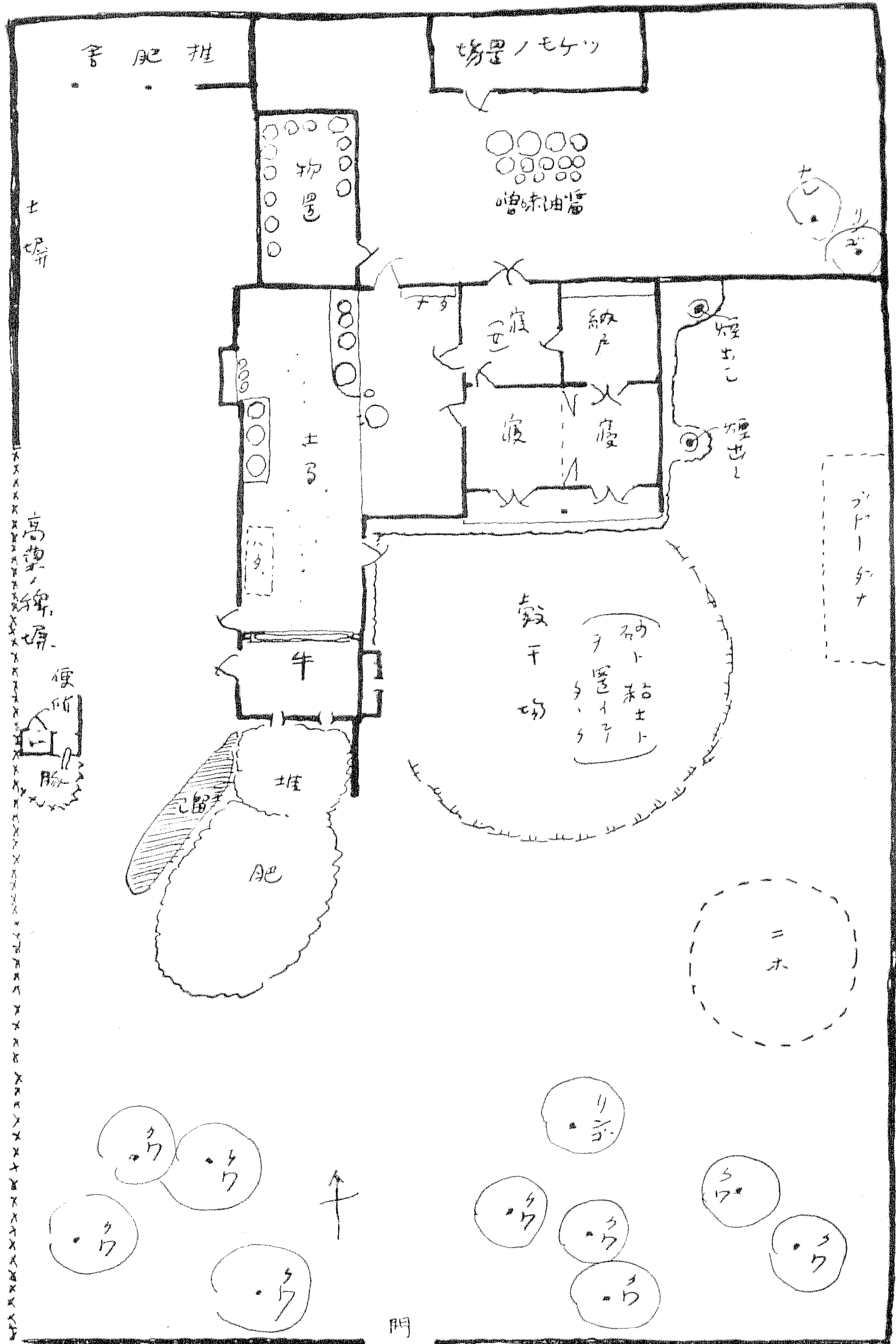
(近附壤平) 圖面平の家農



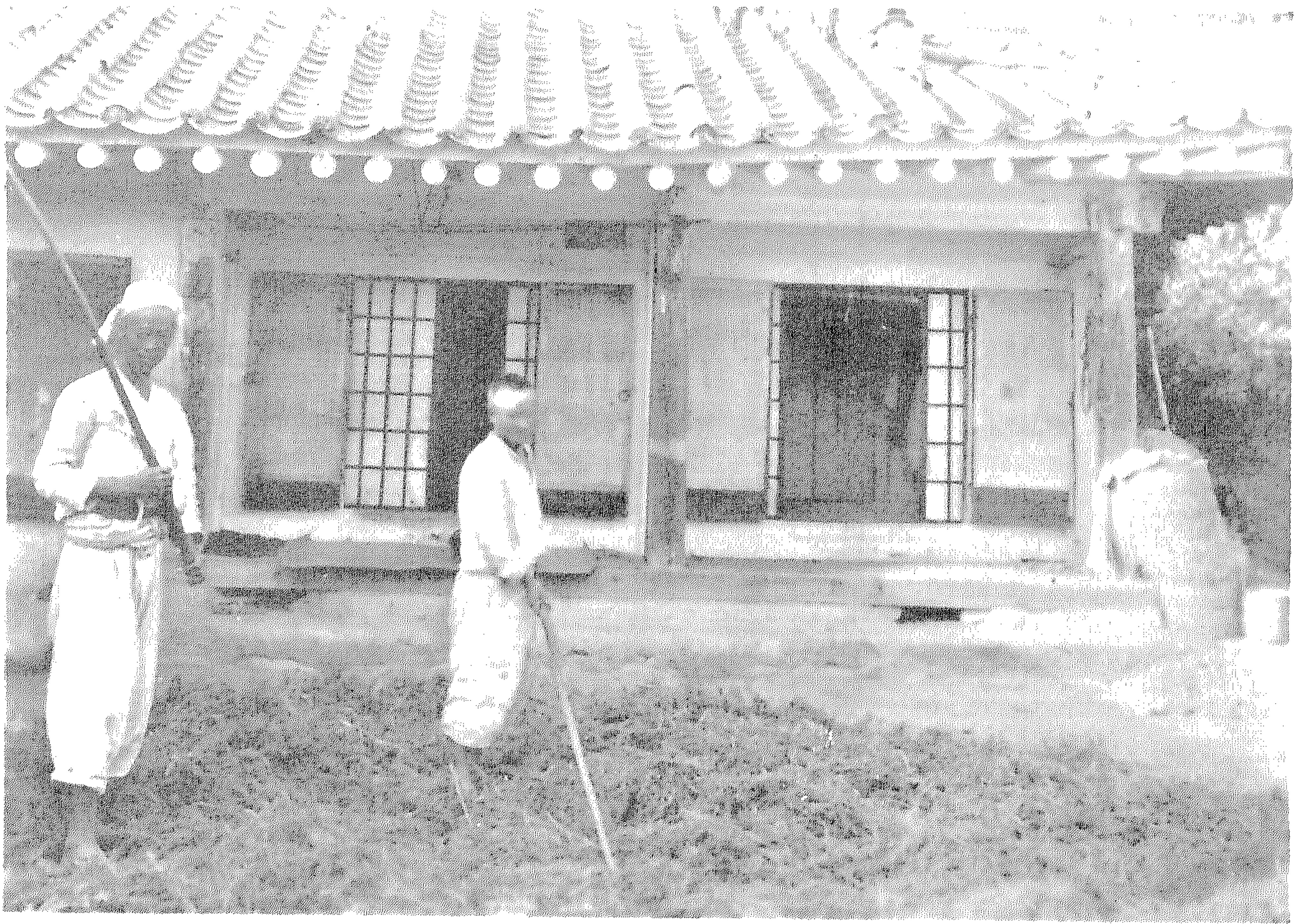
(道畿京) 根垣の家農



(近附城開) 舎納の家農



(青北道南威) 圖面平の家農



(青北道南咸) 庭前の家農



(全) 部内突温の家農



觀 外

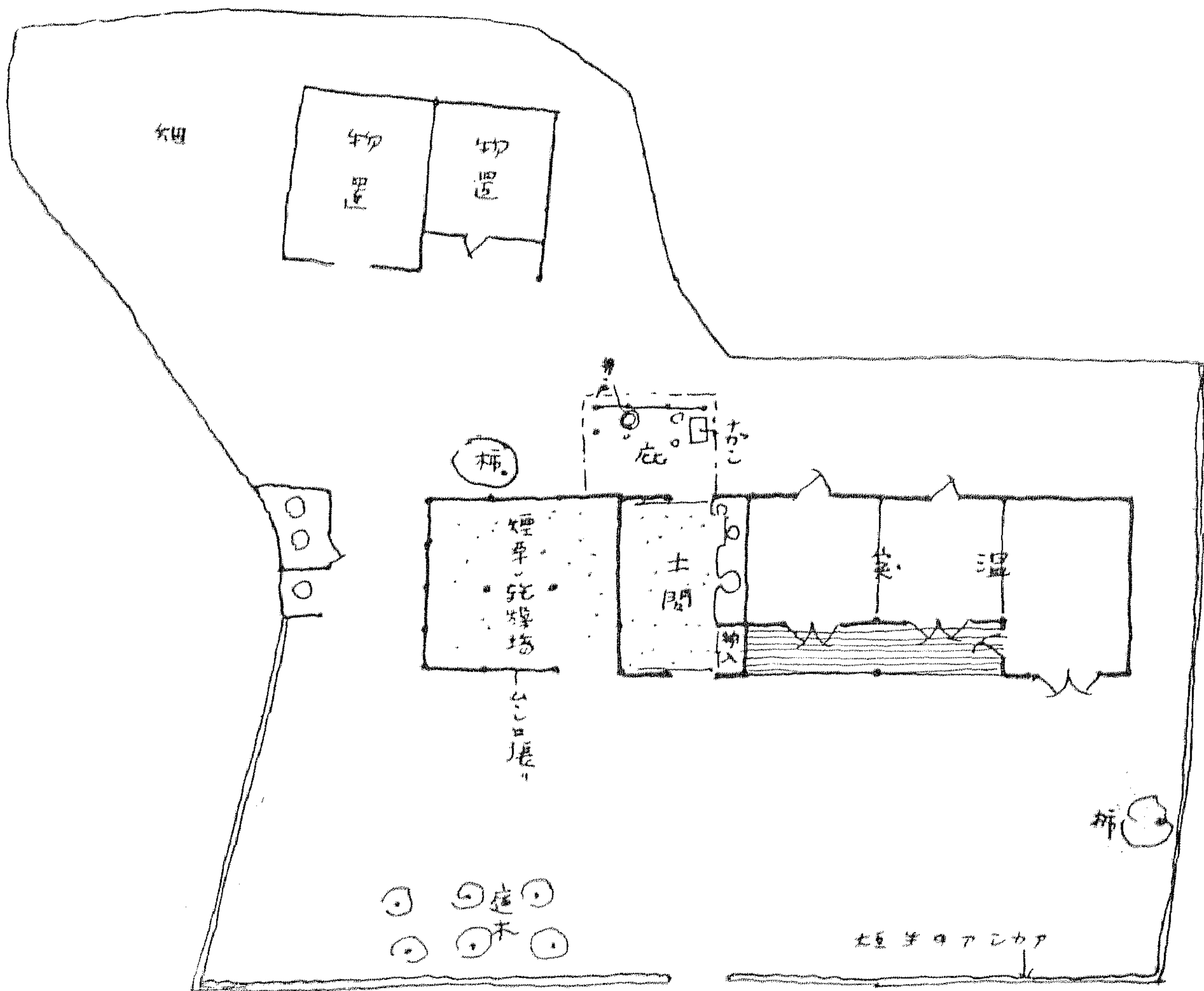
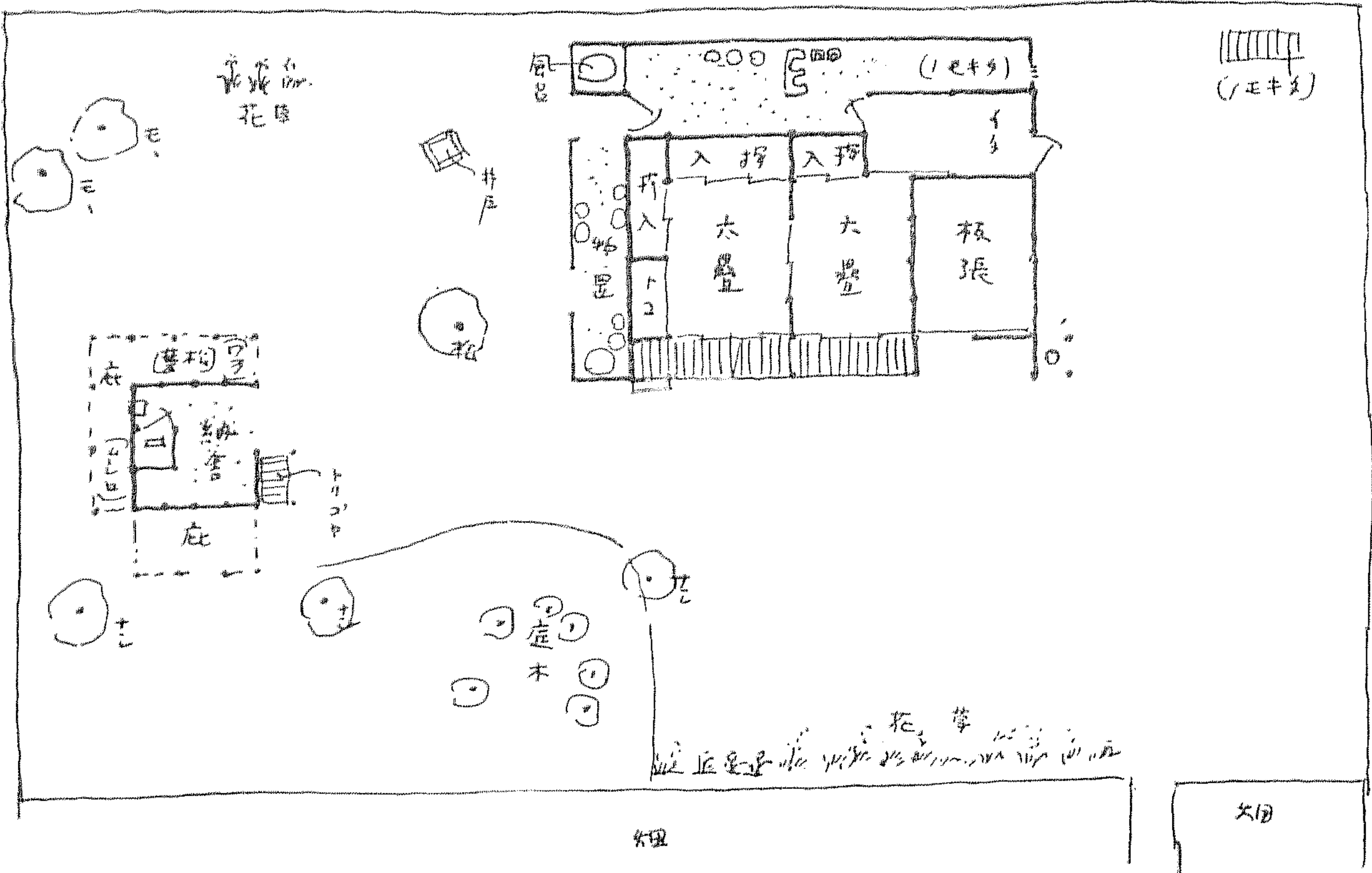


圖 面 平

(近附州全) 家 農 民 移 式 鮮 朝



圖面平



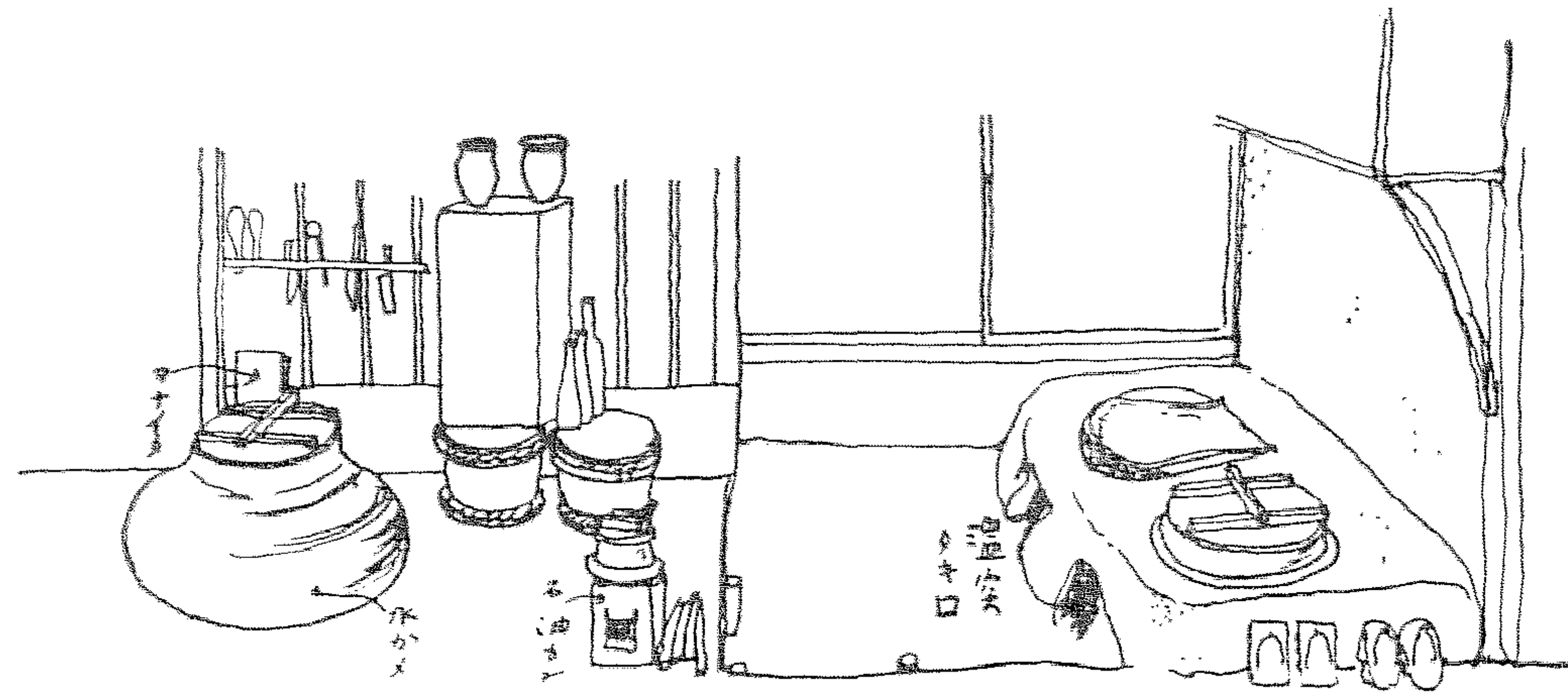
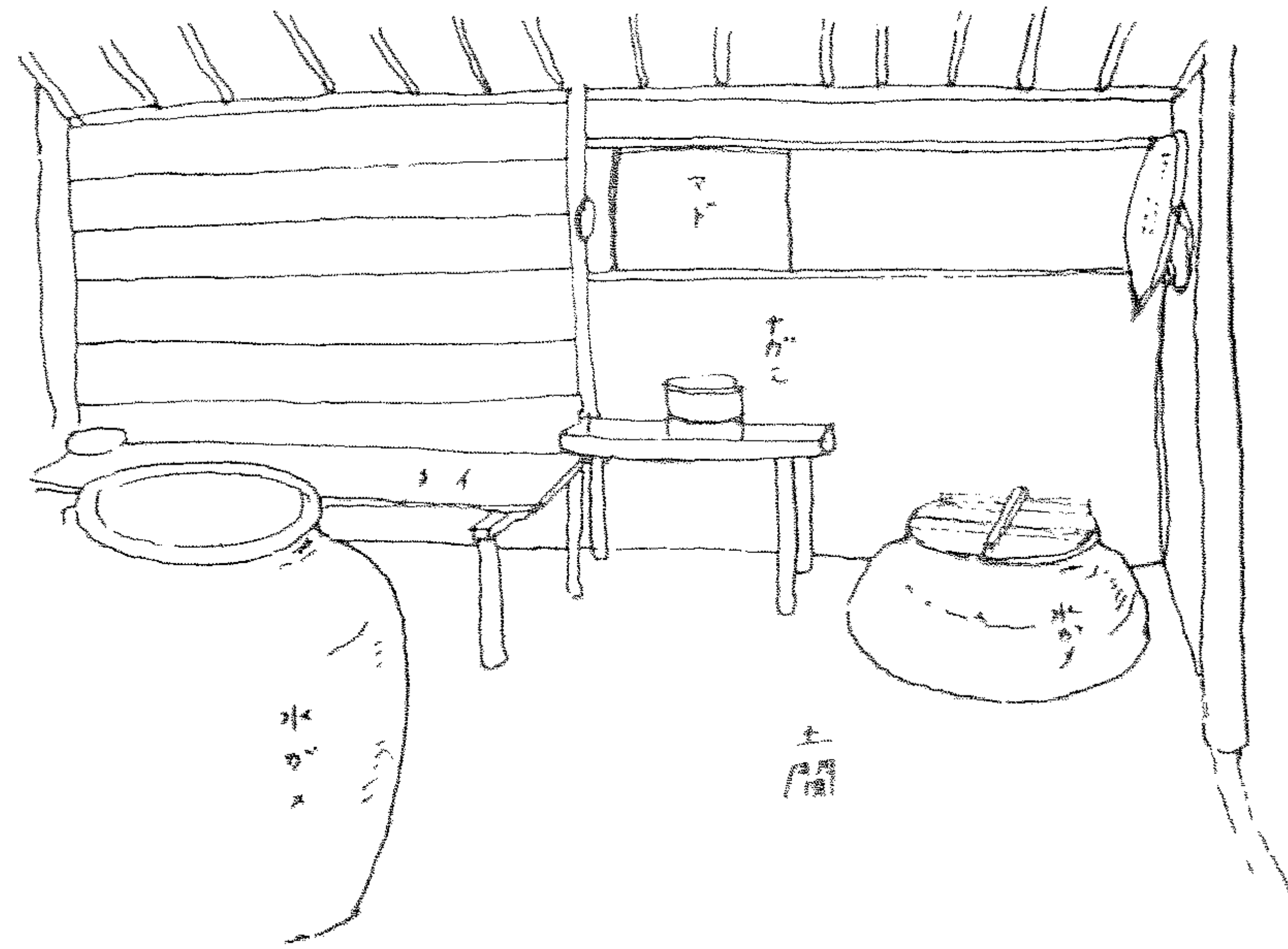
部内間土

(近附州全) 家農民移の式地内

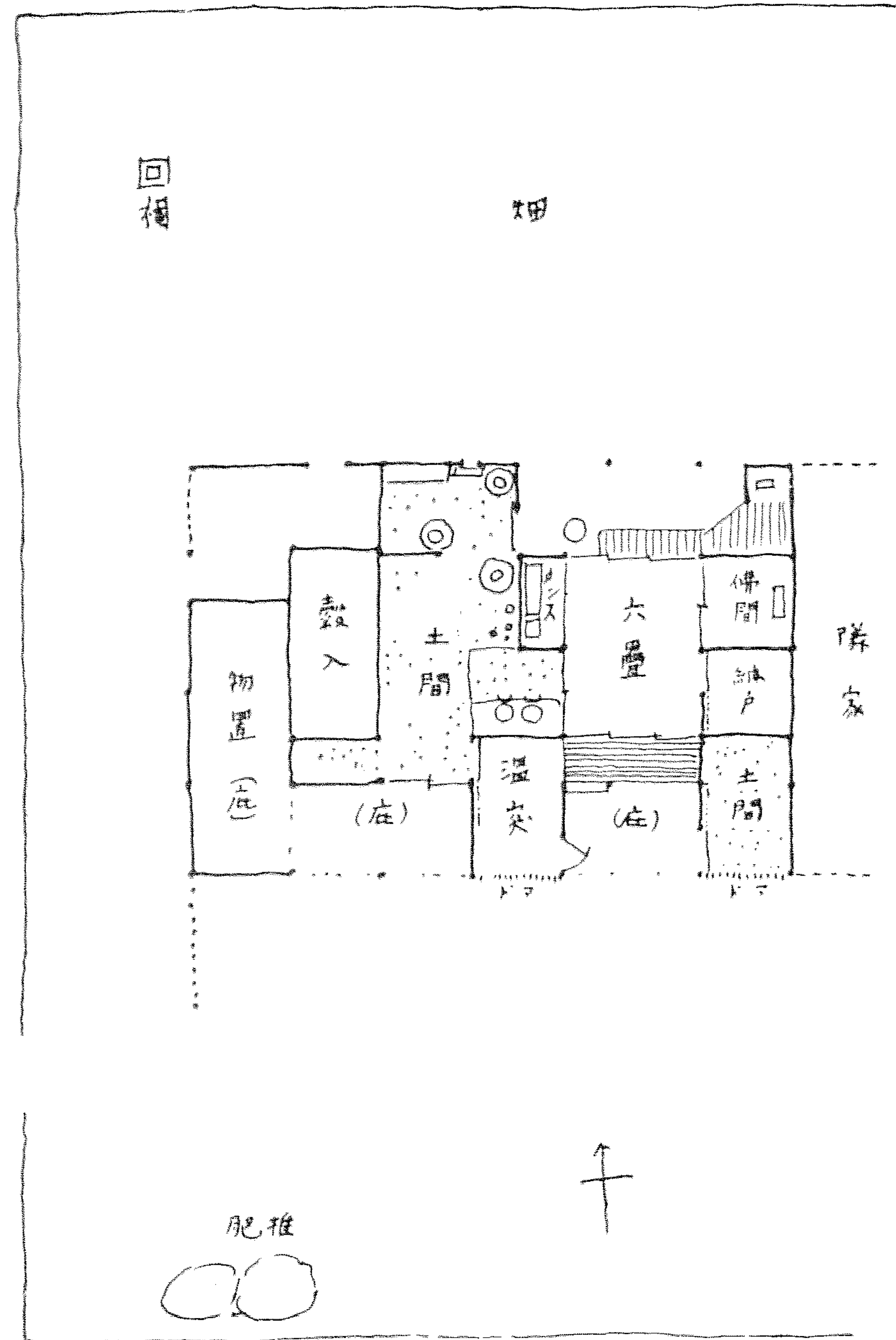


(近附州全) 觀外家農民移式地內

圖版第四〇



土間内



(郡山益道北全) 家農民移

圖面平



外觀



溫突內部

移民農家（全北道益山郡）